## 郷土の治水

養老町における水との闘い



養老町教育委員会

別の対けははなるなられ、好々年とを打火を傷傷国るるなるかれる古村和我行所より	公司完全各种人以称以明武策以中心相对各种州州外域的大学的						
大场相见了明月各族是山人居有的人都是不在西西北西西北西西北西西北西西京西西京西北西河南南南南京山村的村村的村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村村							
·飞港に上来る日川月本大日 清学館学全芸書の神子訓はついから	を発行している。						

#### 伊勢湾台風による大洪水



旧今尾橋以西の養老町大巻(中日新聞提供)



養老町瑞穂の枠池にあった琴平神社(岐阜県広報課提供)

#### 伊勢湾台風による大洪水



養老町瑞穂枠池の堤防上から南方を望む (岐阜県広報課提供)



養老町根古地の臨時船付場 (岐阜県広報課提供)

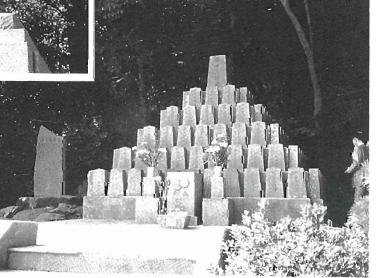


薩摩工事役館跡 (養老町大巻)

薩摩義士碑 (鹿児島市)



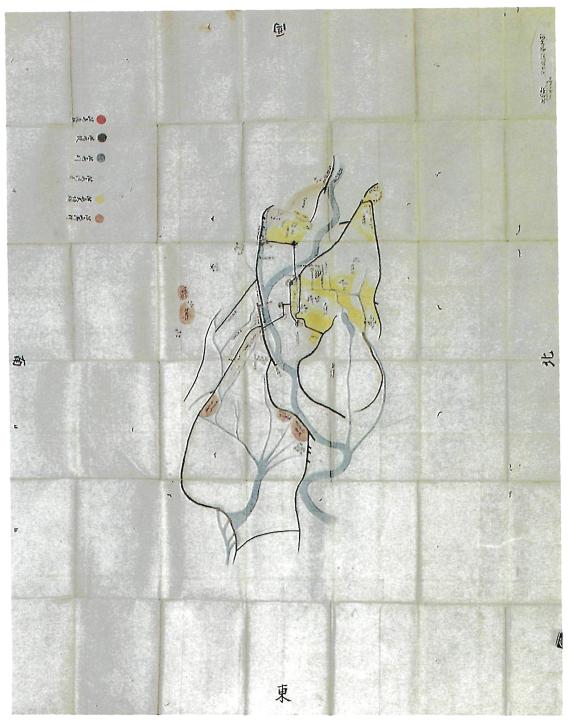
平田靱負翁像 (鹿児島市)



宝曆御手伝普請目論見絵図

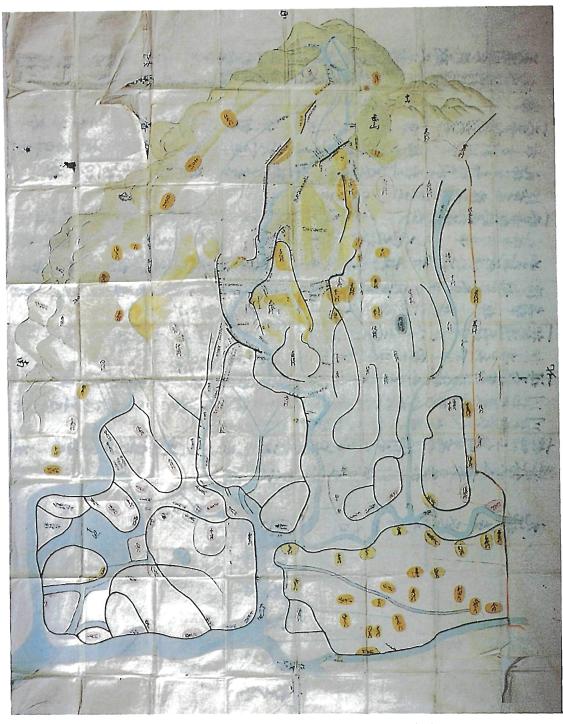
(養老町大巻

前田克巳所蔵)



寛保3年 大墳村と嶋田村河原論裁許状絵図 (養老町所蔵)

防衛回左衛門衛行衛門衛衛衛門原務教徒之事 人衛村新都至中门後水小人代教所即都在各百人会上回以公太武在村村在中兴、其多縣下 る日初十八八人人ははいくのはは生なくはいくる日村を安くるりの見情はれなるようの所はは人心をく 去好了多數一個不過一种學生物門所以在於我有人有人打不管在在其可不多大學的學生 は天前を不好な多なら人處える以からはず、以雷八人とち得不敢到同情者が、今年教之る回町らり今 出作不得你行政情人但父人的有了了人保持了大分得得一本不完明一排本人名国际人就被其就本国不得行神的 本层如後多外好都白傷棒快情子所多傷中御門松至多人用咨問人們不不可以親中不傷事不能 る国門一味不言人所名は本一味も多ろろんしは状いなは細く、味不多うななってなり その門成派を治回能して於於明一群等之間不其中院司門文字中之前至人見以見除了以便在 法国初创在門衛院院大子際處你衛衛軍官有明了不不可以展告一年今月就不行行人以外不完全人居民徒又 原金田清明了一年了文本部的公共原本三年一个代成了万代之之就就父本中接收職之常多了完 有人会及此所以中山城大河大學不会不是是不可以在我国人不知在我一个門面的人 これであるなけれる大きのころいとりますとうというとうのできるとはいいろうなべのをかけられたとうなる ◆所依をはらくと相言できなり、からいかくながはとはなるとはなっていまするとのである。 見通一人称教授的學是在其一人同以為其有其如此八村以去在本共計明不能小一本學的以一一人称於納之 限まする情味は経過ななないのが致後、前は者は本土人ろろんのからあく被利用なるなくをを行ける 状则我的教育之在我的我的人会的产品的小的人才可以在其具的的人的不会情况以被相及可能完成的相 同とこのはいりまえとるないないないというないとはないないなるるないなるないなるのである 今日は一年かれれるできたないのるはとん 茶品格 古のは、一年日日1十一日 大学 生 海老教 神水学 湯水 NUS 马玉春 7 大独希 そろん



元禄6年 五日市村外十八ヶ村と橋爪村外二ヶ村川除争論裁許状絵図(写) (養老町所蔵)

# 発刊にあたって

分たちの生命・財産を水禍から守ろうと、たゆまぬ努力を続けてきました。 わたしたちの町養老町は、 西に急峻な山地、 東に低湿地という両極端な地形であるため、 人々は昔から共同して、

ましたが、住民各位の烈々たる郷土復興への情熱と、郷土愛に燃える献身的なお骨折りにより、 特に江戸時代には、薩摩藩・長州藩等他郷の多くの人々による大治水事業が完工されたことは、ご承知のとおりです。 時は移り、昭和三十四年には集中豪雨、 伊勢湾台風の直撃を受け、二度までも多芸輪中は泥海化し、 今日のような隆盛発展 悲惨な姿となり

する養老町に成長してまいりました。

ていかねばならないと思います。 として築いてこられた先人の偉大なる功績に、今一度深く感謝し、これらの偉業を末長く後世に伝え、そして教訓とし す。しかし、もう水災はないのだということは決していえません。そこでわたしたちは、幾多の困難を乗り越え、営々 しかし、その災害から年を経ることはや三十余年。今では当時の水害の苦しみも記憶のかなたに薄れようとしていま

男先生をはじめ、資料等提供していただきました関係各位に対して心からお礼申し上げます。 なお、この読本を発刊するにあたり、執筆していただきました編集委員各位並びに、監修をお願いしました安藤萬寿 最後に、この読本を住民各位が養老町の治水史を知る大切な資料として、ご活用いただければ幸いに思います。

養老町教育委員会 教育長 小足幹 雄

## 目 次

四	=	=		第五章	11,	<del>-</del>		第四章	第三章	第二章	第一章	
明治の美濃の大洪水46	江戸時代の主要な治水工事29	江戸時代の主な洪水28	洪水の多かった美濃28	災害と治水28	多芸輪中の成立と範囲25	津屋川流路の新しい造成25	輪中の形成と近世に開発された新田7	- 輪中の形成と新田の開発7	- 治水工事のはじまり6	- 郷土のあけぼの5	- 濃尾平野はどうして出来たのでしょうか1	

		(付録	第 八 章	四、	=,	<u> </u>		第七章		- , E	第六章	五、
参考文献166	用語解説161	(付録)養老町の主な水害と治水工事	薩摩義士の顕彰事業14	土地改良136	排水124	用水	治水89	明治以降の治水と用排水89	排水72	用水	近世までの用排水9	昭和三四年の集中豪雨と伊勢湾台風48

#### 第 章 濃尾平野はどうして出来た うか。 の で

ち 在私 この 0) 私 たちはどのように対応しているでしょうか。 祖先の生活にどのような影響を与えてきたか、 大きな平野はどうして出来たのでしょうか、そして私た たちの住んでいる養老町は濃尾平野 0 西南部にあります。 また、 現

平野であります。 たなく てはっ 部 濃尾平野は、 南北約五〇总、 13 またがる平野で、 きり 境されていて、 岐阜県の 面積約 西端 南部から愛知県西部および三重 八〇〇平方牍の我が国第二 南は伊勢湾に面 は養老山 地の 東斜 した東西 面 0) 断 層によ 約三五 県 0 大 0

ちが毎日ながめている養老山地 大きく落ちこんでまた、 がだんだん高まってきて陸地となりました。 濃 尾平野は、 もと海の底でしたが、 海の 底になってしまいました。 の東側は、 約二億年前 その時にできた断 その後、 か B 陸 海 私 地 0) た 底 が



上多度地区土地改良工事に出 土したカキの貝殻

でも養老

えられます。

羽

沢貝塚

庭

 $\mathbb{H}$ か

貝塚や養老町の明徳の辺まで海であったと考

ましたが、

今

b

六千年

から八千年ぐら

r V

前

12

は

南

濃

町

0

だと れ て、 落ちこん お以上 も 二千 現在 £ V わ

層であっ

2 6 5 堆積過程模式図 (東西方向の断面) 12 [---] • 9 10

5. シルト(砂と 1. 山地・丘陵・基盤 2. 第一碟層 3. 砂碟 4. 砂 粘土との中間の細かさの土) 6.粘土 8. 原結節士 7. 氾濫原堆積物 9. 崖 10. 河川流路(未確認) 11. 海 12. 非常に浅い海

#

海津正倫「更新世末期以降における:農居平野の地形発達過程」地理学評論 1979年 による

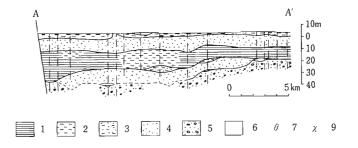
どさえ海の底になってしまった時代が 在養老山 Щ 化 その後も、 地 石 0) 麓 が おびただしく出るのはその証拠であります。 地に石灰岩が出たり、 帯は、 さらに沈んでいったので、 濃尾平野の中でも一番低 赤坂山 長らく続きました。 から貝などの海産動 養老山地や赤坂山 い所であります。 物 現. な

その後 また海底が高まってきて、 陸地が姿を表わ してき

0

であるので、 が、 きます) 中でも木曽 の三大川 砂礫は途中で止まることなく犬山まで流れてき Щ は 0 砂 IJ 礫 か 牧 0 量 田 Щ が 多い など多く ば か I) 0 でなく、 Ш が 流 れ 7 流 13 12 ・ます が急

#### 濃尾平野東西方向地質断面図



A 東海道本線清州駅付近 南濃町駒野駅付近 1. 粘土 2. シルト (砂と粘土の中間の細かきの土) 3. 砂質シルト 5. 砂礫 6. 腐植土 7. 貝殼 8. 有機物 海津正倫「更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程」地理学評論 1979年 による

に少なく 堆 積した量は木曽川が ここを扇頂として大扇状地をつくりました。 伊尾川や牧田川はさらに少ない量でした。 最も多く、 長良川は 木曽川 砂 よりはるか 一礫を運

搬

きます。

濃尾平野には

木曽

Ш

長

良

Ш

伊

尾

)][

現

在

は

揖

裴

III

کے

て現在のようになりましたが、

現在は少しづつ低くなってい

その

後

も平

野

は

高

いくなっ

たり、

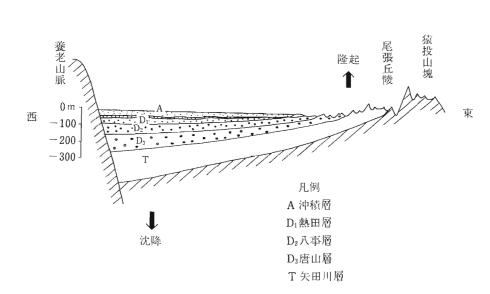
低

合くなっ

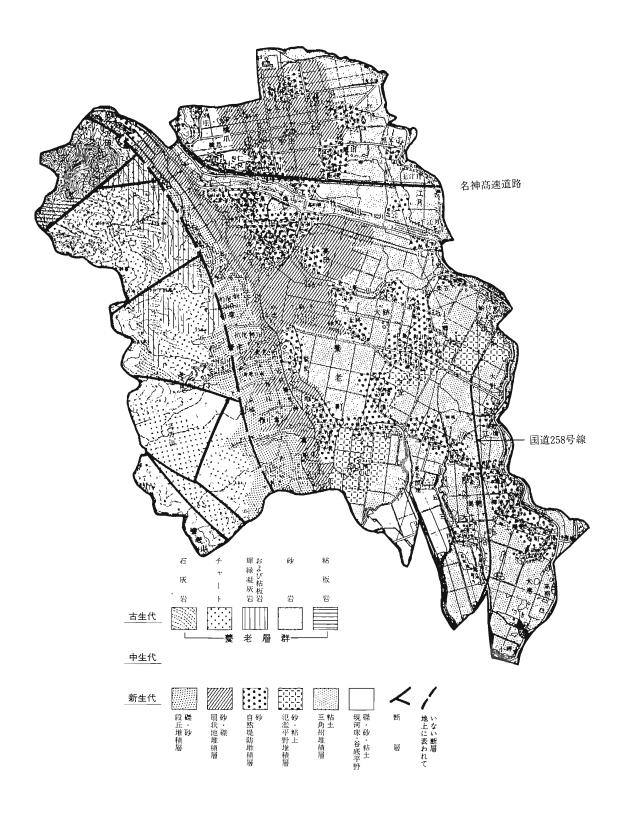
たりをくり

かえし

#### 濃尾平野地質構造概念図



安藤萬寿男編著「輪中 その展開と構造」古今書院 昭和50年 P2による



養老町地質図(養老町史通史編、上による)

まり 東 0 0 れでなくても一 方 やす 方の 0 0 よう 伊 地 11 尾 域 土 É Ш 地 東 にくらべ となっ 牧 0) 干 方  $\mathbb{H}$ いも Ш 0 てますます相 てしまいました。 木  $\mathcal{O}$ 落ちこんだ養老 堆 曽 積 Ш した量が か 番 対的 多く が ず Ш 0 0 低 ٢ 砂 地 少 礫 0 なり な 東 を 麓 か 堆 積 0 0 た 水 地 0 域 た は た 8 西

が 運 傾 定んでい 養老町 61 7 V) ます。 南東方 0 地 域 0 は 低 た 地 が 山 地を除くと北 に 0 て以 向 0 て自 前 0 由 牧 に流 部  $\mathbb{H}$ Ш が 高 1 0 Ĉ, 下 水 0 は て土 定 南 ま 東 砂 部 0 た河 P が 礫 低 道

また養老山 地 の行平 谷 勢至北 谷 勢 至 南 谷 柏 尾 谷 淹

ました。

ところができました。 路 土 くことが少ない所です。 谷 つくり、 た。 砂 長 0 É 13 兩 また、 、礫など 倉谷 長 側 田畑 が次第に高 13 年 を耕や 月 が Ш 直 0 が 積 江 間 自 0 谷 くなっ 然の して生活するようになり てできた扇 10 養老町 これを自然堤防 今 人々は、 ままに 熊 て堤 谷 0 Þ 防 象鼻 平 流 状 野 扇 0 地 れ 部 役目をするようになっ 状 7 が Щ では、 地や ک 次 0 13 るう い 第 谷 自 13 12 か まし 然堤 ちに、 広 b 扇 そこは水 状 が 押 地、 防 0 に集落 7 7 出 自 0) z 61 きま n 然 が 流 堤 た 水 た

防 後背低湿 地 が 7 くら れていきました。

地 備 15 米 2 (14) k ±: 3 /10 ŀ, 粘 10 m 2 [11] (P) 14 [1] 粘 土 30 2 册 料 50 2間 砂利 男の面なければ自噴する 黒 ほ こ 木・草のくさったもの 3 間 粘土 1 /10 60 2 間 粘 £ 70 14個 - 利 や、良水が出る 養 80 老 町 池 1 111 90 辺 4 [11] 青 粘 1: の 地 100 粘 БЬ 層 5 凹 頃の面なければ自噴する 段水あり 出昭 1 [10] される 2 間 粘土(青白色) 1 (1) れた粘土、砂などを調一六年池辺小学校に掘 二枚貝の化石 木の根等有り 3 間 粘土 4 [1] 砂 , 利 私 かなり聞い 3 間 砂 ਵ 3間 砂 サク泉困難 脳ベて作品抜井戸 140 6 [10] 粘 + った掘 色 た図である。 こった時に掘った時に掘った 150 非常に固くサク泉困難 86期頃二枚貝の化石有り 160 貝·実をつけている草木 170 1189 表土の下21間切までの 粘土よりは固い 青 白 色 2 間 牨 土 草 色 4.5間 砂 利 良水が出る

106.5間

196 m

# 界二章 郷土のあけぼ

の

ŋ に弥生時代の住居跡と思われる遺構がみつかったことがあり どもの国」 が見つかり、 状地では、 私 また宇田から古い 弥生時代・古墳時代と移る間に北部地域や養老山 たちの祖先が住むようになっ の付近や宇田の西勝寺境内から石鏃が見つかった 次第に文化が開けてきました。 同時に須恵器も出土しています。 古い 時 代の水田 た遠い遠い時代から繩文時 の用水路と思われる跡 養老の ます。 昭和五〇年頃 「岐阜県子 このよう

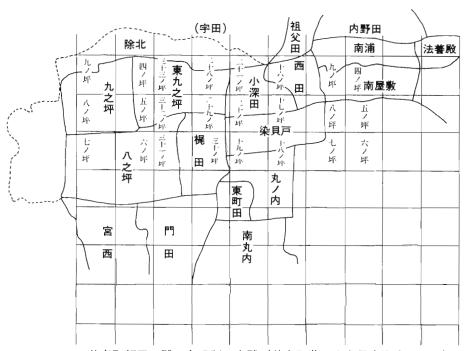
須恵器 (養老町中央公民館蔵)

といえます。 はずい分古い時 はずい分古い時

な氏族が栄えていたものと思われます。合せて六○基の大古墳群であって、この地域には極めて有力群、わけても象鼻山の古墳群は前方後方墳二基、方墳・円墳多岐神社裏の古墳、室原の古墳群、養老山麓の大小の古墳



之坪……三十一之坪……と小字の境が直四角にくぎられた地坪・西九ノ坪など「坪」の付く字があり、さらに一之坪、二大坪という大字があり、又、大字飯田には八ノ坪・東九ノ



大久保家文書による) 養老町飯田に残る条里制の名残(養老町蔵 (太字は小字名、細字は条里を復元した坪名)

残 域

が

あります。

これは大化の改新の時に行われ

た条里

制

の名

りと考えられております。

そうすれ

ばこ

n

b

0)

地

域

は千三

百

五

十年も前に広い

水田

が開けていたものと思われます。

のように現在の三神・

泉と金屋・

直江

飯

田

大坪

蛇 域

持

地

他

n は

は

長

わり とに大きな水害を被ってきました。 中 発されるようになったのです。 間そのままで、江戸時代になってからようやく新田として開 す。 0 橋 第 この 適当な雨量があり、 地域とくらべ早くから開け、 爪 かし、 又 山地にたびたび襲う異状な大雨の場合には、 地方の気候は、 中 養老山 南東部の 豊・安久・ 治水工事 麓の扇状地も早くから開けました。 低くて水がい 常時は恵まれた気候の所であるが、 古い時代から冬も比 宇 田 のはじ 室原など牧田 養老町発祥の地と考えら つもついている所 まり 較的 川 北 温 部 そのたびご かくて、 0

微高 な堤防 らばっ れてい 村付近まで出て来た河水は、 時 地 代 が移り、 てしまって洪水になることはほとんどなく、 ました。 は築かれてなく、 (付近よりも少し高い所)を選んで集落をつくり、 したがって、 鎌倉時代に入っても、 きまっ 大雨 自由 た河道はなか に南東 が降 牧 っても、 0 田 低 Щ 63 61 つ 方へ たの には今日 水 は 向 人びとは で、 面に散 つ 0) よう 7 沢 田

ま 年

になったと考えられます。 頃になると 人工の堤防を築き、 畑を耕やして生活するようになりましたが、 自然堤防と自然堤防との間をつなぐようにして 河 0) 流 れを固定し、 洪水の害を防ぐよう 室町時代の終り

牧田 ぎました。 老山 たびであったの Ш 洪水の時には低地 の河道や津屋川が人工的につくられました。 (地の谷水や扇状地の湧き水は、 これが津屋川のできはじめです。 で、 へ流れこんで集落や田 片側だけの堤防を築いてその害を防 山 麓沿 このようにして 畑を荒すことが 13 . 南方 流

### 第 끄 章 輪中の形成と新田の開発

## 輪中 の形成と近世に開発された新 田

国的 んの新田 江 に新 戸 時 が開発されました。 田 代に入ると、 0) 開発が盛んとなり、 幕府は新 田 私たちの郷土でも、 0 開発を奨励したので、 全

(2)

]]]

捨

堤

入侵の水

水路や圦樋をつくったり、 で囲 の工事が大切であります。 新 あげてくる逆水を防ぐ逆水樋門をつくるなど、 「んで、 田を開発するには、 や圦樋をつくったり、 大雨が降っても大水が入らないようにします。 まず新田にしようと思う場所を堤 更に、 逆に悪水を堤防の外へ出すため 又、 用水を取り入れるための 大雨の時 悪水路 から堤内 たくさん 用 防 0)

(1)

を共同で行い、 と呼びました。 活を送ることができるよう組合をつくって輪中を守るように の費用が必要でした。このように堤防で囲まれた地域を輪 輪中内が一体となって助け合って、安全な生 しかし、 後には 囲 堤 P 用水 排 水の管理

この組合の



輪中堤の発達過程のモデル

洪

安藤萬寿男著 「輪中 井にようがわ れる土手が多く、 小さく除桁と呼ば n ·) なかった。 ても安心しておれ 度には役立つとし て、 た輪中は 応水害を防ぐ程 早くつくら 、堤防 と堤防 Щ 堤防も が 天ん

との間 砂礫 河 床 が周囲 が たまっ の河 川敷に の平 7 地

部

分

堤

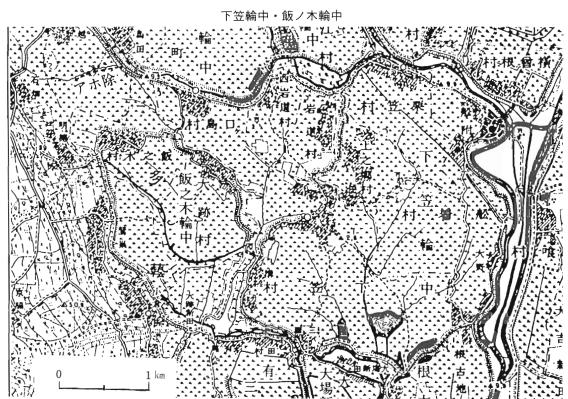
ろあ

と高くなっ となり、 合輪 を内廓輪中とい なりました。このように大きな輪中の内に小さな輪中 して大きくて丈夫な堤を築き、 おきてきました。 輪中内の水を川へ落すのに困難になるなどいろい 内廓輪中をふくんでいます。 中とい なかなか防げなくなりました。 その中に下笠輪中 洪水が )たり、 た川 ます。 或は、 次第に多くなるにつけ、 のこと。 います。)がいくつもふくまれてい それで、 後に述べ 川ざらえをしたりするくら 牧 飯 同じ利害関係を持つ 田 ノ木輪中 るように、 Ш は有名な天井川であります。 大規模な輪中をつくるように また、 大牧輪中などたくさん 多芸輪中 除桁を高く 河 床が高くな 小 ろ は複合輪 る輪中を複 輪 61 中 のことで 0 誾 が (これ 共同 題 れ

養老町の主な輪中と新田に ついて述べます。

がつくっ 大野は 上之郷の五か村で、 ・笠輪中をつくっ 伊 尾 た扇 ]][ 状 0 自 地 然堤 0) 栗笠 7 末端 防 61 るの の上にあ 0) 舟付は 微高 は 地 栗笠 ŋ 0) 牧 田 上にあり 上之郷 Щ 0 舟 自 付 、ます。 然堤防 大野 下笠は牧田 0 上 ]]]

主であ 0 令を上方さくらい 境 関 から栗笠の 4 原 た高 0 戦 須 0 (城主 新 あ 圦 0 (櫻井)・竜泉寺・せいし まで精を入れ 徳永寿昌が た慶長五年 (一六〇〇) 水が出た時 て堤防をまもれ。 からこ (勢至)・柏尾 は 舟 」という命 付と大野 0 地 0 領



その形成と推移」による ベースに安藤萬寿男作成(以下同じ) 注)明治24年製図2万分の1「高田町」

安藤萬寿男著

舟付・大野の村境から栗笠の新圦までは堤防があったことは西岩道の村むらに出していることから考えると、この当時、(栗笠)・若宮・おしこし(押越)・いしはた(石畑)・ロケ島・明徳・おくら(小倉)・白石・はりの木(飯ノ木)・くりかさ

頃までにはつくられていたようであります。 又、下笠輪中の西側をまもる中堤は、慶安二年(一六四九)

確かであります。

一六三六年の間と考えられます。 一六三六年の間と考えられます。

又 たものです。 四四~一六四八) いますが、これがい の村境に沿って「除」を懸け廻わしていることがわかります。 ると下笠輪中の内でも、 元禄六年(一六九三)の評定所裁許絵図 下笠輪中の中央部から南方にかけて江通りが図示されて に輪中内の悪水を排除するためにつくられ わゆる西八間江であって正保の頃 幕府領であった上之郷村だけは、 絵参照) 〇 六 によ そ

> 六百間 根古地輪中・釜段輪中・小坪輪中などの堤を通り、 三落江・五三川のはじまり)がつくられました。 水しました。 「六百間除」であります。 寛文一一年(一六七一)と翌年にかけて下笠輪中落江 (四七〇〇片) 途中、 下池との間を背割している除がい 程で、 小坪まで江下げし、 この落 津屋川へ排 全長二千 わ Ø 江は 五

## 2、飯ノ木輪中

はじめは飯ノ木・大跡両村だけで懸廻 堤を持つ輪中がついて、滝谷の扇状地の末端にあります。飯ノ木輪中は、飯ノ木村と大跡村と大跡新田とをつつんで

ってとおっこ寸の感回足は桟っていました。れた時、これも堤防で囲みましたが、この堤防はその後取払くられ、次いで、大跡新田が明暦二年(一六五六)に開発さ

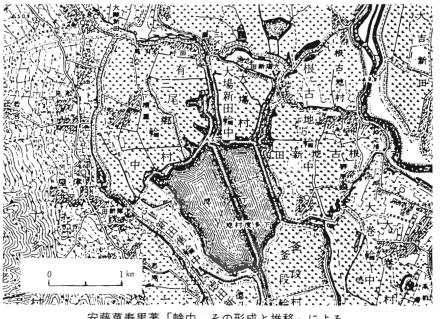
残りをとどめています。工事の際取払われて、現在は大跡の集落の北側だけに昔の名しかし、この懸廻堤も昭和三六年(一九六一)の土地改良われて古い二村の懸廻堤は残っていました。

## 3、有尾輪中

ははっきりしないが、 池へ落すためのもので、この輪中堤がいつ懸廻堤になったか の堤防は飯ノ木輪中や岩道 いう)がつつまれ、 六五〇年頃と考えられます。 堤内には有尾・横屋・ 西側の堤防は津屋川の水を防ぎ、 承応三年 有尾新田 ・西岩道・ · 横屋新田 六五四) ケ島などの悪水を下 より前であって (津屋新 北と東  $\coprod$ とも

里村 安五年 有 (現、 尾 新田 六五二 揖斐郡大 横屋 新田 野 に 町 検 は 地 Œ 保元年 を受けて 0 牧太郎: 助 六四 ます。 など五人が開発 四 13 大野 郡 五二 慶 之の

かり取払われてしまって昔の姿をしのぶことができません。 この 輪中堤も太平洋戦争後の 土 地改良工事によっ て、 す



安藤萬寿男著 「輪中 その形成と推移」による

有 尾 新  $\mathbb{H}$ と横屋 新  $\mathbb{H}$ は 明治 八年に合併 L 血た 村となりました。

#### 根古地 輪

五年 世以 たのは寛永一八年と思われます。 門らも参加して進 内屋甚九郎 場村の三 根 六四 前 古 (一六五二) に成 輪中 地村は中世に開発された村であり 村と大野 が 立した村であります。 に願い ↑根古地: 根古地: に検地を受けてい め、 村 出て、 村の 0 正保二年 村 内 部 根 後に後藤三郎左衛門・ 古 下笠村 草場と荒 地 新 根 六四五) るの 古地  $\mathbb{H}$ 0 地 で根 現 ます 部 0 新 開 田 から成ってい 養老町 古地輪中 に完成し、 発を寛永 は が、 中島惣右 名古屋 大場村も 瑞 が 八 ・ます。 出 0) 衛 年 河 近 大

古地 池 あ 田 宝曆九年 つくっていました。 が多い r) 低 ところで、 つの 湿地であるため、 大場村で一つの輪中、 後に根-根 根 古地 輪中になっ 0 古 (一七五九) で、 地 この 村 古 新 耕作に 地 田 新 大場村だけ 根 大場村 たかは、  $\mathbb{H}$ 古地輪中は、 かし、 の文書によると、 舟で往来しました。 溜水や悪水を落すのに苦しみ、 が 加 高柳新田・大牧村で一 わ 0) で 輪中 この二つの はっきり 0 た輪 輪中をつく Ł 中ができたの 明 度にできたのではな 治 しません。 初年 輪中 根 古 0 0 が 地 村 7 地 でしょう。 つ さらに、 61 X つ合わさっ た時 根古地 から考え 0 輪中 堀 田 P 根 を 新

#### 大場新田 輪中

中の北部に大場新田 の集落があります。 正保二年

場新 有 地 三五郎 内 尾 村 0)  $\coprod$ 地 0 開 内 部 富長惣太夫 を根 0) 発に着手 部を加えて大場新田としました。 古 地新 河  $\mathbb{H}$ ]内屋甚 に 後、 編入し、 慶安五年 九郎 明 が 層二年 ?根古地! (一六五二) 新田、 六五六) とともに大 に大場村 「輪中 その形成と推移」 安藤萬寿男著

#### 6 大牧輪中 (大巻輪·

五

内七兵

後藤三郎左衛門・中島惣右衛門

奥村

新 大牧輪中は寛文元年 中であります。  $\blacksquare$ 大牧輪中は の開 発は不明であり 大牧村は 大牧村・大牧新田と高柳古新田 (一六六一) ´ます。 近世以前 に完成しています。 に開 かか れている村です とから成 る輪

牧新 新田 は (高柳 岐阜県歴史資料館にある近 田とほぼ同 0) 大牧新田にその 新 間 田 12 [との境) は堤のようなもの 時 北 .開発されているのでしょう。 で共に囲まれてい 西 はなく、 南を囲まれてい 世 0 地 図によると、 ・ます。 高柳古新田 高柳 古新田 その 高 0 柳 東 古 は 中 新 堤 両  $\boxplus$ 

#### 7 高 柳 輪

高柳 発された時と考えられ 高 .柳 輪中ができたのは寛文一〇 輪中の中には高柳 高柳 年 新  $\blacksquare$ の二つの集落 六七〇) に高柳新 が あり 田

開

えます。

中は 請 などで収穫は毎年僅か ん低地であるため など非常な苦労をしました。 用水としては掘抜井戸はなく、 伊尾 Ш 通りなどの長い 雨 が降 しかな れば溜水ができ、 、堤防の か )普請や数多くの悪水落の た所でした。 天水にたよっており、 稲は腐ってし その 上この こまう 大

#### 8 釜段輪-

明 開 一種四 発は正保 釜段と駒野新 年(一六五八)でありますが検地は共に寛文一〇年 年 田 0) 六四 村 五 から から始まり、 成る輪中であります。 駒野新田 釜段 開 発は 村 0

と考えられます。 六七○)でありますから釜段輪中がつくられたのは明暦 几 年

二か所は成功して駒野新 0) 五八)に高須藩領の有尾村草場下池・駒野村草場、 草場 尾張藩士藤田大学の子、 開 拓を願い 出ました。 田・釜段村となりました。 森半入(半斎) 下池は 成功しなかっ は明暦四 年 た 大垣藩領 が 他の 六

n が多く、 この輪中は 軒に三、 田はほとんど掘上田で農作業は舟を使って行われ 四艘の笹舟を持っていました。 多芸輪中の中でも最も低い所で、 池沼や堀潰

かし、 今日では土地改良の結果一面の美田となりました。

## 好輪中

応二年 坪新田一村だけの輪中で、 (一六五三) につくられたと考えられます。 小坪新田が開発された年の承 この 村

61

10 北小堤は下笠輪中の村むらが普請することになっています。 ついに実現しなかった「ロヶ島・西岩道・岩道輪中」 (一八六九) の小坪新田明細によれば、

ど高 方からの それで、 込み上げて来る逆水とで常に大きな水害を受けていました。 輪中をもちませんでした。 てまもられていますが、 多芸輪中の中 所の村 明曆二年 水は金草川へ流し、一方、 むらから押し下げて来る大水と、 のほとんどの村は、 (一六五六)に「アホ除」を築いて押越 ただ口ヶ島・西岩道・岩道の三村は そのため大雨の時には、 下笠村三ッ屋と有尾新 それぞれ輪中をもって 下池方面 押越村 から  $\square$ 

> 輪中堤の東部の部分、 との間に築切普請をして、 その結果、 三村は金草川 アホ除によって囲まれた輪中によって の堤防、 込上げ水が来ないようにしました。 下笠輪中の西側堤 飯

守られることになりました。

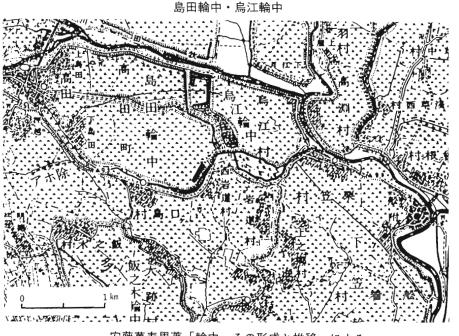
は、 十間 田との 堤) 場所であるからであります。 それは、 堤の外側にある中島集落が水防に当ることになっています。 は、 払ってしまいました。そのため、 の外にあって、 て大水害を受けました。 出ましたが、下笠輪中の反対もあって実現しませんでした。 現在でもアホ除の堤が大水で危うくなった時は、 ところが、その年に津屋川 の神明堂 宝暦九年(一七五九)に、上之郷村除堤 たびたび大水害を受けました。 (約一四○○㍍)ほどの問に除堤をつくってほしいと願 間の築切堤があるため大跡新田が水につかって 中島集落は下笠村の中の一 (現存しています。) から西岩道の南まで七百七 アホ除が切 それで、 れた場合 の堤防 三か村特に岩道と西岩道 せっかく築いた築切堤を取 困り果てた岩道・西岩道 集落であるが、 が切り 一番大きな被害を受け n 三ッ屋と有尾新 (下笠輪中 下笠輪 下笠輪 しまっ ·西側

侵入しないよう厳重 また、 アホ除の堤の高さは、 に定められてい 溜水が押越 ・ます。 0) へは決して

## 島田輪中

れています。 この輪中の 北側を牧田 の輪中は元禄六年 Щ 南側 を金草川がそれぞれ (一六九三) の評定所裁許

防に 絵図では完全に連続 <u>\_</u> た堤になっ 間 堤 7 防があっ は下 -笠輪中 は たことから考えて、 した堤で囲まれています は 0 項で述べたように、 きり しません。 元和年間 ただ、 が、 栗笠村と大 牧 何 年に連 田 Ш 野 0) 五 堤 続 村



安藤萬寿男著「輪中 その形成と推移」による

堤 は あ 防 六二四) が あ たものと考えら つ たことは他 初 め頃にはすでに島 0 れます 資料によって確 慶安二 田輪中 年 かであり Ö) 牧 六四 田 、ます。 な Ш 九 沿 い 堤 は 防

流 道 から侵入する水などが 衬 金草川 0 島 五日 田 「輪中は、 岩道村などにしばしば、 市村方面 は洪水の その から 時 卞 合わ 0 牧 流にある烏江輪中 田 牧 1.800 田 川 から Ш 大水害をあたえました。 7 0 島 0 逆水が 田 み出し水や霞 輪 との 中 はげしく 間 下 笠輪 が >遊水池、 中 て 明がまた上 西岩 両

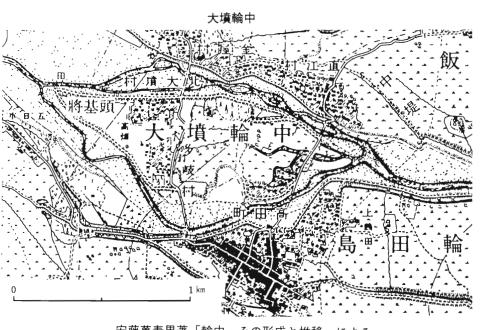
輪中は完全に堤防でつながっています。っていましたが、明治二〇年(一八八七)頃の地図

## 12、烏江輪中

輪中  $\mathbb{H}$ 7 輪中と同じように元禄六年の裁許図では、 0 江 方が島 輪中は が 田 北 は 輪中より 牧 つ完成し 田 Щ 先にできたもの たか 南 は 金草川 は、 はっ で囲まり きり と思われます。 完全な輪中に れ しません。 7 ます。 な

通して 0 頃になくなり 七八五) 村で伊尾川 落し、 0 頃 落 伊 輪中も悪水を排 これ には、 金草川 尾 江を 111 へ落す工事を完成 ました を元文五年頃にできた栗笠・ 、排水することにしました。 江 を伏越して下笠輪中の栗笠村内を通 面 [ 江落 月輪 両 中 除するのに苦しみ、 江之 0 江 悪水を牧田川 落江については第六章 と名付けてい しており、 まし を伏越して烏江 な 大野 お、 元文五年 た 0 江 間 天 朔 80 月 0) 預に 五 明 悪 して・ 年 治 鳥 水 路 輪 t 0 江 几 末 面

には 中と島田輪中とは同じように牧田川と金草川との間 おり、 の輪中になってもよい 輪中であるが



安藤萬寿男著「輪中 その形成と推移」による

と尾張藩領であっ それができなかっ 8 は幕府領でしたが 後に大垣藩預所となっ て た 〜領主が 0) は 元和五年 島田 異っていたためでありましょう。 たのに対 村 は高 (一六一九) 須 烏 江村 領 から幕 からは、 は 江 戸 府 時 領 ずっ

初

#### 13 大墳輪中

近 Ш は養老山 た扇 は上 世 大墳輪中は牧田 からはほぼ現在の流路を流れています。 状地の上をあちこち移動しつつ流下 流 から多くの 地 から平 野 Ш 土砂を運 0) 流 中 n 0) 出る Ш 中島 ぶ荒れ川で、 扇状地の の輪中であります。 上にあります。 牧 て 田 Щ まし 自身がつく )たが、 牧 牧 田  $\square$ Ш

次第に直江の人たちが移住して行った所であります。 集落のことではなく、 れています。(直江村といっても、 流路に分かれ、 ったようですが、 )たが、 直江村のことです。 元禄六年 永禄九年 たびの水害に困りはてて、 この大洪水で高畑村字 将棋頭で南側と北側の二つ (一六九三) (一五六六) 直江村字中瀬でまた一つに合 現在 現在、 は 大墳輪中の東の端の の大洪水までは一本の流路であり 南 頃では、  $\mathcal{O}$ 分派 普通に直江といっ 天明七年《一七八七》 現在牧田 Ш 南の分派川の方が主流であ はなくなって北の 低い 川 Iわさっ 0 所に ている集落 北にある直 あっ たと 分 頃から 派 た昔 ŧ 江 0 b

田 Ш 0) 河道が定まってからは 牧 田 刑 0) 河 刑 敷地の中 だけ だけになり、

南の

河

Ш

敷は住宅地や高

 $\pm$ 

中学

校

校

美津濃養老工

場 分派

0)

敷 Ш

地 0

などになっ

7

13

ます。

大墳輪-に土砂 出来ていて、 をかこむ築捨堤と下流の りますと、 も高さがち 番 高 が積っ 所にある将棋頭と一番低 中 で、 は その当時 がいます。 牧 近世になってからは 左の図のようになっています。このように堤 田川 て川 床が次第に高くなり、 に沿って一・ 0 大墳輪中 元禄六年 方の 直 江村だけを包む築捨堤とから は上流の方の 五段の長さが 61 (一六九三) 直江村字中瀬とでは十片程 層水害が多くなりまし わ 高畑 の裁許絵図によ あります ゆる天井川とな 村 • 大墳: 村



して来て、常に大水害を受防の明いている所から侵入の時、牧田川の水がこの堤が連続していないため出水が

ました。 江間の明き所が築留められ、大墳輪中は完全な一輪中となりくることが許され、北側は寛政九年(一七九七)に大墳・直年(一七〇九)南側の明いている部分十間の所に築留堤をつ

け

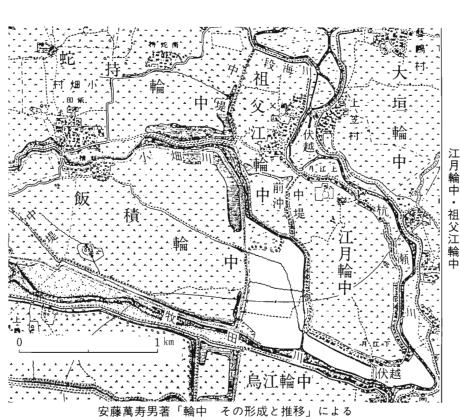
ました。それで、

宝永六

## 14、江月輪中

てい 江月村のも 江 ます 月輪中は、 が、 0 北西部は祖父江輪中と直接に中堤 東は杭港 で接してい 瀬 Щ て川 南は牧日 はあり 田 ´ません。 Щ 西は 小 (この 畑 Ш 中堤は 12 接

かれ、両集落とも輪中堤上に沿って一列に家並がありました。江月輪中は江月村一村だけの輪中で、上江月と下江月に分



—15 —

事 防 瀬 杭 上の Ò) Щ 瀬 沿 時 Ш に全戸 外 沿 r J は昭 側 61 では、 (川に面 が 和二五年 輪中 主に堤防上の輪中内 内に移住しました。 した側) (一九五〇)の杭 に住家が並んでい 側 瀬 牧田 Ш ましたが、 牧 Ш 沿  $\mathbb{H}$ 田川分流 いでは堤 杭 I.

烏江 五年 伊尾川へ落すことにしました。 頃に烏江が金草川を伏越してつくっておいた排水路を通して 江 輪中内 月輪中は低湿地のため悪水を排除するのに苦しみ、 (一七八五) 0 悪水路を通し、 牧田川を伏越して、 さきに、 烏江輪中に悪水を落し、 元文五年 (一七四〇) 天明

## 15、祖父江輪中

考えられます。その開拓は古く、祖父江村は近世以前に成立していたものとには、条里制に関係のある「一之坪」という小字がある程では、条里制に関係のある「一之坪」という小字がある程で祖父江輪中は祖父江村一村からなっています。この輪中内

ことは確かであります。 懸廻堤として書かれているので元禄六年以前に完成しているせんが、元禄六年(一六九三)の評定所裁許絵図には完全な祖父江輪中の懸廻堤がいつ完成したかは明らかではありま

0 れ、 (一八七二) ていったものと考えられます。 祖父江輪中と江月輪中との境になっ その 低い方の 後に )江月輪: 江月 の村明細帳によると江月村のものであることか 輪 中 中が高い方の祖父江輪中より先につくら 0 中 堤 を利 用 しつつ祖父江輪中をつく ている中 堤 が 明 治 五 年

> 越して、 で伊尾川へ落していますが、 たため、 祖父江輪中は 対岸の大垣輪中の上笠村から鵜之森村までの悪水路 悪水の排除 相 Ш に苦しみ、 杭 瀬 川 その築かれた時期 祖父江村字掛圦 小 畑川 に 囲まれた低 は明らかでは で杭瀬川を伏 地 であっ

江新田)を輪中の中に囲いこんでいます。 祖父江輪中は宝永六年(一七○九)の直後に字前沖(祖父

ありません。

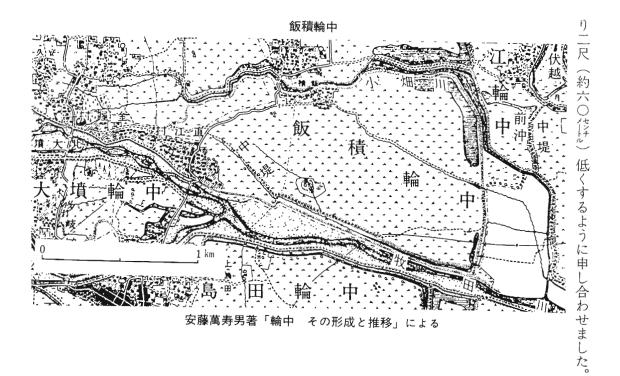
## 16、飯積輪中

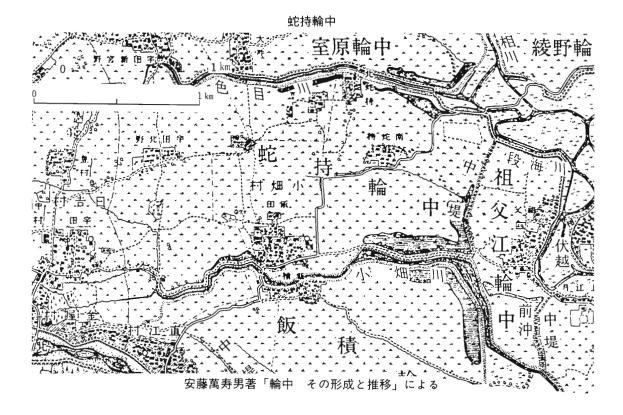
とでは五片程の差があります。 中では最も低い この輪中は牧田川によってつくられた同 所で、この 輪中の中での高い Ш 北側 部 分と の扇 低 状地 61 部 分 0

あります(第五章、三参照)。と金屋の二村(全域ではない)を加えて三村となったようでましたが、その後、宝永六年(一七〇九)頃に直江(北直江)元禄六年(一六九三)当時は飯積村一村だけのものであり

で小畑川に排 中堤と牧田川堤との間を通って流下し、 金屋両村の悪水は、 飯 積村の牧田 水されていました。 Щ 沿 この中堤によって旧 61 0) 旧堤防 は、 中 堤として残 飯 飯 積輪中 積輪中には入らず、 ŋ 0 南 東 直 0 江

村 時 0) 宝永六年(一七〇九)に、この付近の治水工事がなされた 堤防 小畑 ぶより Ш 飯 の飯 田村の新堤は、 少しも高くしない 積・金屋・ 直江三 対岸の飯積・金屋・ ように定めました。 一村の堤防は、 対岸の 直江の堤防よ 祖





## 17、蛇持輪中

西に高 まうばかりであります。」と救いを願い出ています。 小畑 ことはありませんが、 め逆水が押入り、 こみ上げてくるため、 き水などを水源とするので、 で除はあるが堤はありません。 一三年 (一七二八) 色目川 中 東に低 0 北には色目 米も麦も腐ってしまって村はもう亡びてし 川口に近く、 地形で、 その水害にいつも苦しんできました。 牧田 には飯田・蛇持両村から Щ Щ 上流からは大きな水害をおこす 西 からの逆水が小畑川・ そして村を囲う堤防がないた 「の方はど 色目川 南には 牧 小 小 田 畑 畑 Ш 川 Щ 扇 が 流 は 状 (当村: 地 れており 扇 色目川に 状地 0 端 の方 ŋ 0) 湧

ました。 宝永六年(一七○九)笠松郡代辻六郎左衛門による、この ました。また、色目川沿いについては、色目川をつけか 合せました。また、色目川沿いについては、色目川をつけか が岸の飯積輪中提より二尺(約六○代2)低くするように申し が大いについては、色目川をつけか を発きましたが、

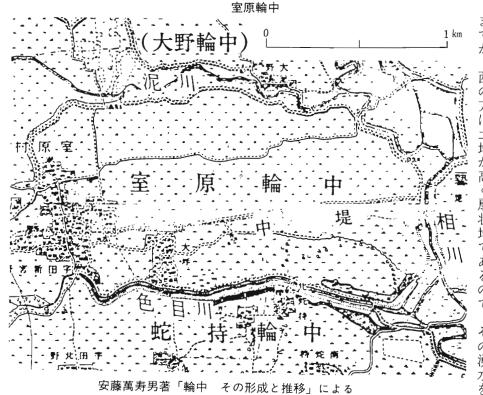
後に なか 飯 つくられたためと思われ 田 たからだとも I堤が たの 対岸の は 飯 田 飯 61 わ 村は尾張藩領であり、 積 n 輪 るが、 中の堤より二尺低くしなければなら ます。 蛇持輪中の 方が 飯 積 飯 村は 積 輪中より 幕府領で

第二章で述べたように、飯田には条里制の名残りの地名が

# 、この付近は、古代から開けていた所と考えられます。

## 18、室原輪-

ますが、西の方は土地が高く扇状地であるので、その湧水を室原輪中は南を色目川、北を泥川、東を相川に囲まれていて、「リー」



のものであります。排除する除はありますが、それも明き所がたくさんある程度

まり、 Ш か 沿 九 には室原 元禄六年 いでは、 北蛇持の集落の北で終っています。 泥川と相川との合流点の下流まで続いています。 の集落の北西部あたりから下流に向って堤防 (一六九三)の評定所裁許絵図によると、 堤防は大坪の集落より少し西のあたりからはじ 泥 Ш 沿

一六〇〇年)と書かれている除のことと思われます。九年(一八三八)の室原村明細帳に色目川通り水除九百間(約に伸び、その北側に沿って排水路がありますが、これは天保現在、室原と大坪との境に、ほとんど一直線の道路が東西

永六年 ていた時代があり、 込んだものと考えられます。 防が現在の堤防であって、 をつけかえる)する工事が行われました。 目川が曲りくねって流れていたため水落ちが悪かっ また、 以 上のことから室原輪中は最初は室原だけを築捨堤で守っ (一七○九)に大坪と宇田・蛇持両村の境に瀬違 飯田輪中の項で述べたように、 後、 色目川側に広がって、 この時に室原輪中が完成しました。 大坪村の田 この時 大坪村も囲い の新しい堤 たので宝 の中を色  $\widehat{\mathbb{H}}$ 

の跡があらわれました。 宝永六年の瀬違以前に色目川が流れていた跡と確認される川昭和四四年(一九六九)から実施された土地改良工事の時

## 19、下池新

お余ありました 体の悪水が流れ込む大きな遊水池となりました。 n に有尾・津屋新田 下池になったのであります。 れたが、その中で土砂が十分に堆積しなかった低湿 一七三一)の調べでは、 (一六五六)に大場新田 に徳田新田、 池の付近は木曽三川から流出した土砂でデルタが形成さ 周囲がぐるっと堤防で囲まれるようになり、 承応元年 ・同二年に根古地新田、 池の周囲は約六段、 (一六五二) というのは正保元年(一六四四 同四年に釜段・ に志津新田 慶安元年 駒野新田 面積は 享保 この地域全 地が (一六四 が開 明曆二 一六年 九 後に



皂莢経塚(釜段)

開発には非常に苦心し、 中止してしまいました。 莢経塚を築いて成功を祈ったりしましたが、 ○○○旨を築いて下池を東と西の二つに分けました。又、息 駒野 六九二)までの間に中除堤(中障子ともいいます)約元には非常に苦心し、延宝元年(一六七三)から元禄五元 お田と釜段村の開発に成功した森半入は、 ついに成功せず 下池 新 約二 田 0)

枝彦太郎は、 を受けて、この時も成功しませんでした。 元禄一二年(一六九九)多芸郡上笠村 大金をつぎこんで一応は完成しましたが、 森半入が不成功に終ったあとを引受けて開発を 現、 大垣 絶えず水害 市 0 玉

村にあずけることにしました。 時 う大金をつかって努力を続けましたが、 続けることが困難になりました。それでも彦太郎は自分一 今度も津屋川の氾濫がひどくて享保七、八年頃にはまた持ち 共に計画を立てなおして努力の末、 で開発を進めることを決意し享保二〇年に金二千七百両とい の技術では、とても困難な事業であったのです。 正徳年間(一七一一~一七一六)に彦太郎は他の人びとと の初め頃に成功し、 ついに下池の開発をあきらめ、 下池新田と名付けました。 このように、 享保(一七一六~一七三 その 津屋川 開 下 発 池 の氾濫が続く 0 0 権 開 利を有尾 しかし 発 は当

をはじめました。 治四三年 平点 -松不殺 一九一〇)に、 が地域 0 有力者の協力を得て、 岐阜県での近代最初 この 0) 干 事業 拓

> したが、思うようにはかどらなかったので、不殺は、 は三五鈴の干拓を完成しました。 う方法に変え、 の蒸気機関による排水機を使って下池の水を排水してしま 大正二年 (一九一三) に川砂を舟で運んで埋立をはじめ 大正五年頃から干拓をはじめ、 大正八年頃に 最新 発 ま

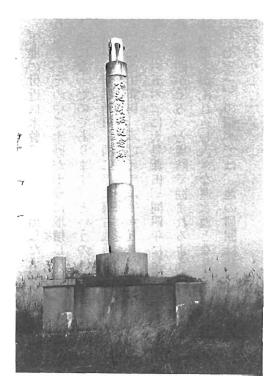
明

その後、

昭和一

〇年

百お余の らの不断 た東部下池も県の協力によって同年に完成しました。 九三五) 森半入や国枝彦太郎らの一生をかけての願いは、 に中堤の西側の西部下池の干拓が完成しました。 の熱意と協力によって二百数十 岐阜県も補助金を出すなどして、 面の美田となりました。 年の後に花開き、 平松不殺



下池干拓記念碑(有尾)

#### 20 柏尾新

元禄郷帳に、 新田として柏尾新 田 四 九石と記しています。

#### 21 鷲巣北畑新田 南畑新田

延宝年間 (一六七三—一六八一) に開発されまし

## 23 つ開発されたかはっきりしません。

若宮新田

22

石畑喜多村新田

寛延] たの原因になります。 せてほしい。 るばかりです。 の開 した。 新 田開 発とはいえ、 年 それに対して、 Ш は多く、 発が その仕事は他村の者にはやらせず、 お上の命令である (一七四九) Ł V3 どうか新田開発は取り止めにして頂きたい。 つも 草場や野方を召上げられては、 畑 他 地も地 誰 」と願い出ています。 からも 村の者にやらせると後日に村のごたご 若宮村は 若宮村は野方の新 から取り止めることができない 味 Ö 望まれてい 悪いところであるため、 「当村は小さな村であり、 田 たとはかぎりません。 開発を命じられま 当村の者にやら 村は難儀 新

天明

七年

七八七)

に行わ

れた押越村

悪水.

吐 圦 (参考)

下

図は、

どの

輪中にも設置されてい

(渋谷保之蔵)によって製図したものであります。 た圦 0 伏替普請 、構造を、 そ 仕 田 30 押越村惠米吐打、供書書請 

押越村悪水吐圦伏替普請仕様書(天明7年)により作成

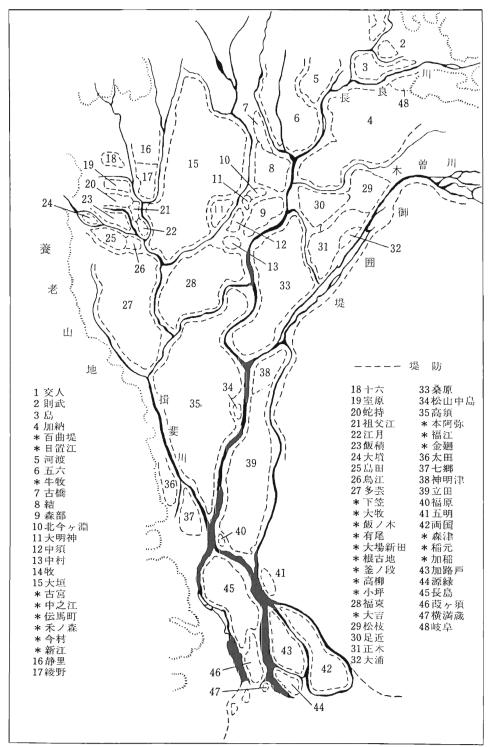


#### 輪中の形成年次区分

安藤萬寿男著「輪中 その形成と推移」による

			1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
年代 区分	揖 斐 川 以 西	長良川~揖斐川間	長良川以東
1600 \$ 1699	○下笠輪中(1615~36) ○根古地輪中(1641頃) ○西輪中(1644頃) ◎七郷輪中(1648前) ◎太田輪中(1650) ◎大垣輪中(1653) ○小坪新田輪中(1653) ○小坪新田輪中(1656頃) ○釜段輪中(1658) ○大牧輪中(1661) ◎多芸輪中(1670) ○綾野輪中(1)(1677前) ◎島田輪中(1693前)⑦烏江輪中(1693前) ◎江月輪中(1693前)◎祖父江輪中(1693前) ○飯積輪中(1)(1693前)	○古高須輪中 (1600~06) ○金廻輪中 (1601~18) ○旧福東輪中(1625) ○本阿弥輪 中(I) (1648) ◎牧輪中 (1650) ○本阿弥輪中 (II) (1657) ◎森部輪中 (1665前) ◎福東輪中 (1667) ◎結(墨侯)輪中(1668)	○長島輪中(I)(1623) ○加路戸輪中(I) (1625) ◎立田輪中(1628) ◎福東輪中(1635) ○日置江輪中(1638) ○見入輪中(1638) ○夏ヶ須輪中(1639) ○森津輪中(I) (1647) ◎神明津輪中(1648前) ◎桑原輪中(1656) ○加稲輪中(1669) ◎正木輪中(1669) ◎正木輪中(1687) ○源緑輪中(I)(1691) ◎泉近輪中(1694前) ◎加納輸中(1696)
1700 \$ 1799	◎飯積輪中(II)(1709) ◎蛇持輪中(1709) ◎室原輪中(1709)	○ 穗積輪中(1705前) ○馬場輪中(1705前) ◎古橋輪中(1705前) ◎高須輪中(1732) ○牛牧輪中(1757) ◎河渡輪中(1764) ○中村輪中(1) (1773前)	○森津縣中(II)(1752) ○積満蔵輪中 (1757) ○加路戸輪中(II) (1758)
1800 ( 1905	◎十六輪中 (1869) ◎静葉輪中 (1875)	<ul> <li>◎開武輪中(1802前)</li> <li>◎島輪中(1831)</li> <li>◎大明神縣中(1839前)</li> <li>◎中須輪中(1840商)</li> <li>◎中村輪中(II)(1841)</li> <li>◎板谷川堤組合(1871)</li> <li>◎北今ヶ渕輪中(1872)</li> <li>◎変人輪中(1880)</li> </ul>	○源緑輪中(II) (1807) ○田代(松枝) 鰤中(1832) ○大浦輪中 (瀑末~明治初) ○両国輪中 (1878~84) ○本曽岬輪中(1890) ◎長島輪中(II) (1905頃)

注》○=内廓輪中、◎=外廓輪中……近世末現在の区分。



輪中分布図 安藤萬寿男著「輪中 その形成と推移」による

- 注1)明治の3川分流工事直前の輪中分布を示す(「輪中」の2字は省略)。
  - 2) \*印は複合輪中内の内廓輪中名を示すが、その範囲の図示は省略。

# 津屋川流路の新しい造成

0) 側 養老山 方へ流下するようになりました。 堤が築かれるようになって、 流出していましたが、 か [地の各谷は、それぞれその山麓に扇状地を形成しつ 現在の沢田・ 桜井・ たびたび洪水を繰り返して来ました。 上方など上の方から次第に片 応の河道が定まり、 飯 ノ木

この水と柏尾谷・滝谷・小倉谷などの谷水や湧 河 間 が 集 水



小倉から上流方向をみた津屋川堤

になっ 現在の津屋川 麓沿 方へ流すよう 谷々の 堤 につれて、 時 を 代が進 67 築 たので、 に片側 水を南 Щ 7 む

> ぱな舟行路となっ の河道がほぼ出来あがりました。 て、 上流にあっ 中世末には津屋 た勢至村の 鉄座 川は、 一の大発展 りっ

もたらしました。

守っています。 規流下して、 した。 藩が飯之木境より鷲之巣村まで、 がつくられ、 尾村までと、 て「永代定」をしています。 はその本田 った大垣藩 明 香二年 堤防は、 (一六五六) に鷲巣・ (戸田)と高須藩(小笠原) 新田 南濃町で揖斐川に合流し、 両藩の協力によって、 小倉村東より津屋、 ほとんど左岸堤のみで、 囲いのための新堤新河ができることに それによれば、 大跡・ 高須藩が鷲之巣村境より 舟見村までの新堤と新堀 ほぼ現在の河道となり が話し合って、 多芸輪中を水害から 飯之木 飯之木より十三・五 当地に領地 小倉の 大垣 かあ 兀 つ Í Ш

# 多芸輪中の成立と範囲

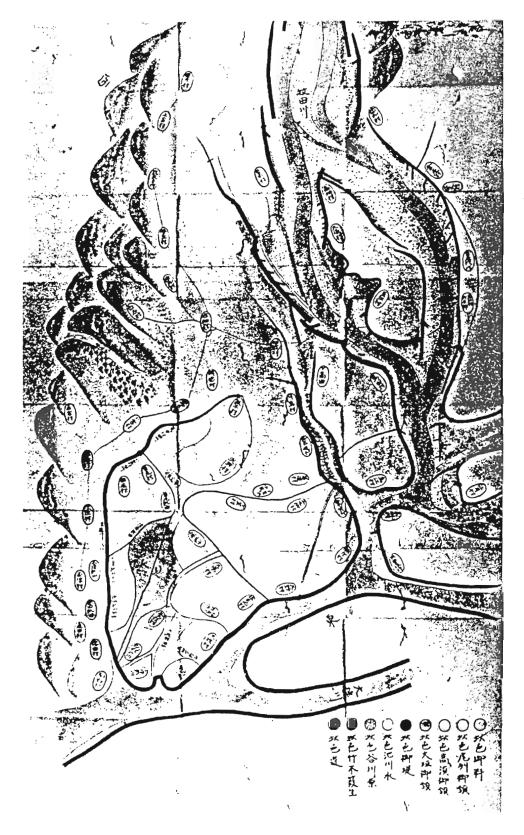
 $\equiv$ 

ぐ時が続きま て下池にそそ の地内を流 大場新田 まって有尾

の北

12

ホ いますが、 入り組んでいて、 いる地域で、 つであります。 除品 万五千石余の大きな輪中でありました。 この輪中の大部分は、 多芸輪中は濃尾平野の多数の輪中のうちで大きな輪中の一 で限られていました。 北西限には堤防はありません。この部分は通 幕府領、 金草川 元文三年 (一七三八) 大垣藩領、 連続した懸廻 堤によって囲まれて 牧田 アホ除は、 Щ 尾張藩 伊尾 Щ では、 金草川 領 津屋川に囲まれて 高 二十九ヶ村 の堤防から西 須藩領などが



屋川 呼ば 除や土手はありません。この間は、 の高さに決められていて、 害から守る目的で作られました。 Ш この除で養老山地の勢至谷から流出する谷水をうけて、 明 南に約六〇〇星の除堤で現在の右岸だけでした。この除は、 P 暦二年に尾張藩、 に流しているからです。 'n ホ 流しています。 除の西南端から、 口ヶ島・西岩道・岩道村や、 したがって、この除は勢至谷請堤防とも 高須藩の立合工事によりできたものです。 飯之木輪中までの六〇〇片の 現在も厳重に維持されています。 除の高さは、 勢至谷より南の谷水は津 下笠村の中島などを水 押越村の宅地 間 は

この 規模な工事を要するものであったためであります。 悪くなるといって反対したことや、 下笠輪中の堤防を借用し形成されました。 しつつ、 年現状となる)は、すでにあった伊尾川沿 高柳輪中の形成は、 その当時、 地域が低いことや、 下笠輪中が形成され、 伊尾川沿いの下笠輪中、 多芸輪中の中では最もおそいものでした。 福東輪中の 根古地輪中は、 対々が、 伊尾川の堤防の構築が 根古地: 下 11 大博川 流の 輪中 0 築捨堤を利用 北部の堤防や 大牧 昭昭 0 水行が 輪 和 中 五. 大

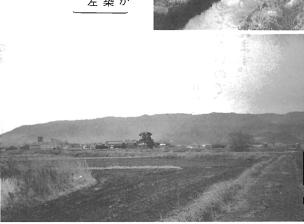
寛文一○年(一六七○)頃でありました。防が初めて結ばれて連続堤となり多芸輪中が形成されたのは、この高柳輪中の形成により、津屋川沿いと伊尾川沿いの堤

多芸輪中とは別に形成されていた島田輪中、烏江輪中や「アー昭和五年に組織された多芸輪中水害予防組合の区域には、

輪中が拡大されました。 大字乙坂(一部)、橋爪 上方 (一部)、 ホ , 除 \_ より高位部の牧田川右岸の平坦部である沢田 五日 市 龍泉寺 (一部)、 多岐(一部)を含めて多芸 部( 石畑 部)、 牧田 部)、



徳永除(内廓輪中堤)瑞穂



【堤)だけであった。 | 場時は右岸堤(写真向って左| 等かれたが、明暦二年造築 | 昭和四十年代に左岸堤が | 明暦二年に作られたアホ除

### 第五章 災害と治水

# 一 洪水の多かった美濃

るようにすることを、治水といいます。た、舟の往来を便利にし、田への用水の引き入れが容易にな川の水の流れを良くして、洪水を起こさないようにし、ま

微高地に住ん野えられて、 L な 所 網 っても、 の揖斐川に相当する)の三大川が相互につながり合い た。 高地に住んでいれば、 の目のように流れていました。人々は、 濃尾平野は土地が低く、 時代が続きました。 微高地といいます)だけを選んで住んでいて堤防などの 至る所に遊水地 度に大水が出るのを防ぐ地 よほどの大洪水でないかぎり安全で その時代は、 その上、 洪水の時に水が、 木曽、 大雨が降って洪水にな その網の目の高 長良、 域) しばらくそこに があったので 伊尾 なが 現 b 在

けるようになりました。 では、 られるようになると、 しかし、 洪水を防ぐことができなくなり、 江戸時 代になって、 遊水地が少なくなり、 新 田開 発が進る しばしば、 当時の低い み、 輪 水害を受 中 が 堤防 つく

堅固な堤防を築いてからは、美濃側でも堤防が増強されは上国境にある木曽川左岸(尾張側)に丈夫な御囲 堤といわれる特に、徳川家康が慶長一六年(一六一一)に美濃と尾張の

この御囲堤は、尾張側は美濃側より三尺(〇、九片)ましたけれども、美濃側に水害が多くなりました。

築いてあったとい

われてい

ます。

す。 工事方法によっては、 事に力を入れました。 苦しみました。従って領主の幕府、 かるように、 今も、 私たちの郷土も巻末の 人間の力では、 堤防の上に水神様が、 牧田川、 何ともならないので、 利害が相反し、 しかし、 津 |屋川 「主な水害と治水工 領地が複雑に入り組んでい 伊尾川 おまつりしてある所がありま 大垣藩、 困難なことでした。 0 堤 一心に神様に 防 事 尾張藩も治水工 が、 を見るとわ 時 々切 おす

## 一 江戸時代の主な洪水

がりした先祖の願

13

がしのばれます。

### 1、牧田川の河道変化

なりました。 棋頭より二派に 永 禄九年(一五六六) 一分かれ、 牧田川 下流 0 直 の大洪水が 江字中瀬で再 あって、 び 高畑 本 0 字將 川

#### 2、枝広の洪水

交通できたと伝えられています。美濃の低地は、残すところなく水没し、岐阜、養老間は船で美濃の低地は、残すところなく水没し、岐阜、養老間は船で慶安三年(一六五○)木曽、長良、伊尾の三大川が出水し

出来、色目の東光寺が流出し、橋爪の篠塚神社の古器物、古大垣では、大垣城が浸水し、養老町では、橋爪に新宮野が

運びこんで生活したと記録されています。が水中に沈み、その村の問屋吹原家の大船に避難し、食物を文書が流されたと言い伝えられています。烏江では、村全部

### 3、津屋川の河道変化

夫々の領主の命令により、大改修をしました。がありました。流域の鷲巣、大跡、飯ノ木、小倉の四ヶ村は明暦二年(一六五六)津屋川の洪水があって、河道の変化

# 4、牧田川、金草川、津屋川の破堤

堤し、全町的に広大な大洪水でした。破堤し、津屋川筋の志津新田、駒野新田、小坪、釜段でも破の堤防が切れ、大坪、蛇持でも破堤し、金草川の口ヶ島でも安永二年(一七七三)七月二二日、牧田川の出水で多芸村

ヶ所切れました。ました。更に、八月二二日には、色目川筋の大坪村では、六ました。更に、八月二二日には、色目川筋の大坪村では、六なお、八月七日に、島田村で破堤、烏江村紙木でも破堤し

しました。で破堤し、また烏江より水押しがあって、下笠輪中へも入水で破堤し、また烏江より水押しがあって、下笠輪中へも入水ました。前月切れた飯田、橋爪も再び切れ、江月では、所々更に八月二八日には、又、色目川沿いの大坪で六ヶ所切れ

### 5、前代未聞の大水

八日になって、木曽三川は洪水となり、慶安三年の枝広の大翌月六日夕方より、強風雨続き、七日夜より暴風雨となり、寛政十年(一七九八)三月三〇日より、天空異状となり、

更に八月一四日夕方から暴風雨により惨害を多くしました。失、人畜の溺死が多く、津屋川筋の津屋新田堤も切れました。水より、六尺(約三片)高く、その流域は堤防決壊、家屋流

#### 三年一種

て、米の収穫は三年に一度だったと言われています。川底も高くなり、六月、七月、八月の雨期は堤防がよく切れ、戸時代は、開発が進むにつれて、遊水地が少なくなり、

#### 6、明治の洪水

如く、 非常に少なくなり、 までは、 明 しかし、 治維新の新時代になっても、 あちこちで破堤、 耕地を荒らし、 木曽川、 明治政府の行った分流工事の竣工により、 長良川、 被害面積も地域的で少面積になりました。 農作物の収穫はなく、 入水があり、 揖斐川の本流と支川流域で隔年の 明 治の三川 死者を出し、 分流工 困窮をしました。 家屋は流 事 水害は の完成

# 三 江戸時代の主要な治水工事

### 1、川普請の種類

① 公儀普請 江戸時代の川普請には次のような種類がありました。

#### ② 御手伝普請

自ら費用を出して行う普請

行わせ、費用は大名に八十哲以上を出させ、幕府は二○哲ほ幕府が計画し、監督して行うが、実際には大名に命令して

#### 被害を受けたので、 2 大垣 養老町関係では、 岡ケ 養老町関係の 牧出 藩 刑 橋爪村 桜井村 五日市村 尾張藩でも領主普請を行っています。 馬踏 内法 高さ 大走り 川普請 畑村 大墳村 ほとんど毎年公儀普請を行っています。 牧 沈枠 金屋村 牧田川 牧田川 田 馬 10.9~18.2 m 踏 Щ さ 9.1~14.5 m 5.4m内外 津屋川 押越村 直江村 御囲堤略図 (建設省 「木曽三川の治水を語る」 より) あほよけ の堤防が特によく破れて

4

各領主が費用を持

0

領主普請

(5) 用 村 百姓自 マが、 自ら行う普請 普請 自分達の費

### て 自ら行う普請

すから、 それを年々先継ぎして今では二百十七間になってしまい の三十三ヶ村は水害のため亡びてしまいますと答えている。 金屋村へ水を通すようにして下さい。と訴えている。 した。そのため五日市村の方へ川水が流れ寄って来てい したという証拠は そこで、よくよく調べてみたところ、 岡 この訴えに対して橋爪村・高畑村・大墳村は 出 ヶ鼻の堤を取払ってしまっては、三ヶ村ならびに水下し ヶ鼻の猿尾は八年前に十六、 そのま、にしておきなさい。 猿尾を取り払ってしまって前からのきまりどおり 切なく、

#### 五 日 市 押 越 両 村 は

2

下高田

島田村

喰違堤付近略図

昔からのま、の猿尾である

岡ヶ鼻の猿尾を先

島田輪中

Ŧi. 六年以前に高畑・ 大墳両村が新しい猿尾を二ヶ所築

#### (1)元禄六年の川除争論

郷村 ヶ島村・西岩道村・船附村・下笠村・大野村・栗笠村 市 村 元禄六年 (一六九三) 押越村・飯木村・大跡村・ 根古地村・ 同新田村、 に、 大場村 牧  $\pm$ 同新田 絵 川右岸の美濃国多芸郡 参照 司 新 村・ 田 村 東岩道村 嶋 田

費用を課

した普請

玉

内の村々に人夫と

3

国役普請

どしか出さない

普 請

#### 1 五日市・ 押越而村 は

た。 定所で裁判を受けることとなり、 村と同郡橋爪村・高畑村・大墳村とが川除のことで幕府の評 次のように判決がありまし 村 大牧 上ノ 五日 

七間の籠刎であっ

たが、

下さいと訴えました。ましたから、この新しく築いた猿尾を取り払ってしまっていたために五日市・押越両村と水下十七か村が水損を受けいたために五日市・押越両村と水下十七か村が水損を受け

の猿尾に間違いありませんと答えている。まりのように修覆したいと申し出た願書があり、古くから八年前に、大垣役人へ隣村直江村が五十間の猿尾を昔のきこの訴えに対して、高畑・大墳の両村は、この猿尾は十

沢田村の下から高畑村の上まで、四百八十間石堤があり、るから五日市・押越両村の百姓の申分はよろしくない。り、又、実際にしらべたところ、昔からの猿尾のようであところが、五日市・押越両村の申分に年数のちがいがあ

ないことであるから、今後はかかわりあってはいけない。ところ、石堤の跡は一切見えず、両村の申す所は、理由の近年大破と五日市・押越両村が申したが、実地にしらべた

3 ておきなさい。 これからは敷籠 満 ましたと押越 うに築留めてしまったことにつき、 水の時に籠石が抜けましたので、 押越·嶋 田両村喰達 嶋 田両 栗石を取払ってしまって八間の所を明け ..村の百姓が申している。それならば 堤八間の所を栗石で水が通らないよ よくよく調べたところ 詰石として寄せて置き

4

祖父江村

荒川

村

久徳村

桧村

直江村

金屋村

江

0

0

門手代多田五平治、 て印を押して両方へ与えて置くから失わないようにしなさい させてよくよく調べさせ、 右の争いの場所をはっきりするため、 ことはできない。 ることは近くの 水吐に障りになる草木取拂いを願いた。 間の川を新たに掘り、 月村・十六村・大坪村が申すには、 とであるから、 水吐のじゃまになるものは取捨てなさい。 村々の治水上悪いからその願を取り上げる 美濃部五右衛門手代師崎武右衛門を出張 川筋の柳薮などを取払うことは大切なこ 今の川筋に生えている柳・ 後々の証拠として絵図に裏書をし 出てい 検使として山川金右衛 高淵村地内に四百三十 るが、 薮その外 新川を掘

元禄六年癸酉六月廿五日 稲 伊賀 御印

松 美濃 御印

能 出雲 御印

北 安房 御印

戸 能登 御印本 紀伊 御印

壱岐

御

0 本多紀伊守正永

寺社奉行

 $\circ$ ř 田能登守忠真

松浦壱岐守棟 寺社奉行

0

寺社奉行

高淵村地内に新川掘りの願について

川・相川・大谷川・小畑川・色目川・泥川沿いの祖父江・荒川・久 水の時は排水が非常に悪かった。 直角に合流している上に烏江村との間が大へん狭いため、大 牧田川と杭 瀬川とは高淵村で合流していますが、 そのため上流である杭瀬

徳・桧・直江 十六・大坪村 金屋・江月・

むっていまし た。それでこ も水損をこう などは、

淵村地内に四 れらの村は高

て排水を良く してほしいと を新しく掘 百三十間の

> とい んの 大へ 願い 村との間は狭くしておいて、 って大反対していた所なのです。 ん良くなりますが、下流の村々にとっては一度にたくさ 出たのです。 水があふれることになるので堤防が持ちこらえなくなる しかし、そのようにすればこれらの 上流の村々は遊水地の役をさせ つまり、 烏江村と高淵 村々は

流の村々をまもったわけであります。

ほとんど (2)「高渕村地内に新川掘りの願について」の関係地図

宝永の大取払い

ので、 元 禄 幕府は宝永元年(一七〇四)に、 二年 (一六九九) から三年間連続で大洪水が 川々の水行をさまた あ た

(明治24年陸地測量部地図)

ろん、 げてい も取り払ってしまい へつき出てい 猿き川尾ぉの るものは 内の (水の る石やは 木 流れる勢いを弱めるために、 全部 葭 ました 杭を使った小さい土手) ・柳などを切り払ってしまうのは 取り払ってしまえと、 P 厳 岸から川 命を出 民家まで しま 0 中

大牧・ 鷲巣 ちろん、 養老町関係では、 他所へ移住しています。 から駒野 蛇持· 猿尾も取 江月 (現 在 払われ、 烏 0) 幕府領の根古地、 江 南濃町)まで、 大牧では、 栗笠などの 尾張領では舟付・大野 祖父江、 村 民家一五軒が取払 マが竹 大垣 柳 一領では、 葭はも わ 12

許図 (3)《口絵》を参考にして下さい。) 宝 永六年の百姓自普請 魔保三年 (一七四一) 0 裁

して、 押越村 ような計画を立て、 父江村 宝永六年(一七〇九)に笠松代官辻六郎左衛門 !! 嶋 だなが自分で費用を出して普請をすることとして次の 飯田村 一田村・ ・蛇持村 直江村 幕府 (今の南直 字田村 許 しを願 ・大坪村からの 江 い 出ています。 金屋村 は大塚 願 飯 (V 積 出 村 に対 村 祖

### 大塚村からの願

中 61 直 江村 の数 ち込んで来て年々大損害を受けます。 どの 水が全く落ちなくなっ 牧 Ш の川  $\square$ 間は土地 Ш 床が年々高くなってしまっ 0 水が落ち込まないようにして下さい 近が低い ので大水の たばかりではなく、 時 たので、 両 は 村 両 村 0) 間 O) に堤 大塚 間 大塚 水 村と を 村 築 が 0

> 北は 寄が立合って水盛りをしたところ、 江村の間九十間(一八片) の根より一丈四寸(約三・二片)も高いので、 の八間の明所の地面と大塚村の も亡びてしまうと考えられる。 一人、大塚村から大工一人を差出し、 の高さをくらべてみることとし、 大塚村のいう通りであり、 直江村堤の高さに取合うように築留めるがよろし に対して、 辻六郎左衛門は次のように決めまし の所は、 この その 押越村 内 ま、では大塚村 直 喰違堤の根は大塚 ため、 南は大塚村古堤の 三か村から庄 江村堤の 嶋田村 押 越 根 村 大塚村 0) から大工 0 喰 直 屋 地 村 面と 違 堤

あ (--)る関係上、 この計 画 次のような願を出しました。 13 対 して押 越 2村と嶋 田村とは 大塚 村 0 川 向 うに

堤ばかりでなく両 るならば、 たします。 この計画では、 押越 若し、 嶋田 [村の堤 どうでも大塚村と直江 押越村と嶋田村との間にある大切な喰違 両 .村が水損を受けないように が全部危険になり、 村との間 大へん迷惑 を築留

1 か 所を取払っ らないようにして下さ 大塚村前にある牧 てしまって押 田川 越村 通り 0 嶋 籠  $\mathbb{H}$ 出 村 か所と竹薮 水 先が強  $\langle$ 林 は

ね

- 2 (3) を引きさがらせて下さい 直江村牧田 Щ 通りの 堤で 出 張 つ ているところ十 Ŧi.
- 喰違堤 0 八間 0 明所を残らず両方の堤なみに築留めて

しまって下さい。

大塚村・直江村の願いの通り新堤ができましても、押越村・このようにして頂ければ、川の形もまがりが少なくなり

この申出に対して辻六郎左衛門は次のように決めました。嶋田村はさほど迷惑にはなりません。

悪いから堤三十九間の長さを内の方へ平均三、四間ほど繰② もっともな申出であり、この所は川幅も狭く、川形もてよろしい。 この申出のとおり、古堤より外の分は、残らず取払っ

り入れるがよろし

二 直江村からは、次のように願い出ました。

に 川 堤 なります。 が込み困っております。 へ築留めてしまうようお願いします。 が 普請をなさっ 昔から明 江村の出屋敷前に それで、 61 てい ては明所 六十五 て 築流堤があり、 押越 少し 間 から一層水が 0) 0 水でもE 明所よ 嶋田 は 両村が願 田 本堤との間六十五間 畑 込み入れるように 築流堤の先から本 屋敷までも水 っているよう

### これに対して辻六郎左衛門は

合うように築留めることにすると決めました。 大分広いから、 江 村の 願い 願のとおり六十五間の明所 出 のとおりまちがいなく、 は両 この所 方 がは川 0 堤 、幅も と

ました。 幕府領金屋村・飯積村・祖父江村、尾張領飯田村・蛇持取りあえず百姓自普請で各村々に懸廻 堤を築くことにしたがあるのでそのま、になっていたが、去年の大洪水ではとがあるのでそのま、になっていたが、去年の大洪水ではとがあるのでそのま、になっていたが、去年の大洪水ではとがあるのでそのま、になっていたが、去年の大洪水ではたがあるのでそのま、になっていたが、ま年の大洪水ではたがあるのでそのま、になっていたが、去年の大洪水ではたがあるのでそのま、になっていたが、ま年の大洪水では、東京領域を屋村・飯積村・祖父江村、尾張領飯田村・蛇持取りあえず百姓自普請で各村々に懸廻 堤を築くことにしたがあるのできた。

7

〇 金屋村

飯積村

(五百二十四間

○宇田村―(六百六十八間)(四百八間)(六十六間

○飯田村−(八百七十間)この堤は根敷が八間から三間半

のもので六か村の懸廻堤の中で一番大きい

(六間―古新田の古堤の切所)

)蛇持村―(四百九十七間) (三百四十間) 大坪村境の五十

0

0

祖父江村

Ī

(百十四間)

(二百八十間)(三百八十二間

間は、築廻さず明けておいて洪水の時水を排

出する

〇大坪村—堤長六百六拾八間

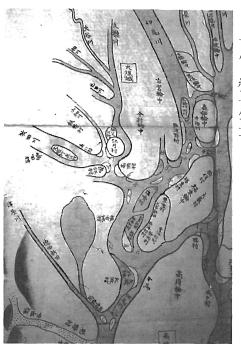
水除築廻し延長 根敷平均三間より三尺まで

馬踏平均一 高 間より二尺まで

筋を変え、長さ千百六十五間をまっすぐの流れとすること でも田畑へあふれましたので、 したが、 なお、 大へん入り組んでいて水落ちが悪く、 色目川は昔から、 大坪村の田所の中を流れていま 隣村宇田村・蛇持村境 平均五尺より二尺まで 少し Ō) 出水 ЛÌ

註 一間=一・八ぱ、 **岩=約三尺三寸** 間 ||六尺、 一尺一十寸

しました。



宝暦治水以前の西南濃水系図 (長谷川千代子蔵)

木曽三大川の全長と流域

長良川 木曽 Ш 0 0) 水源は濃 全長— 水源は長野県西筑摩郡木曽村の鉢伏山です。 約 飛国境の 流域 大日岳です。 面積 約五四七〇平方牍、

> 全長 一二八烷 流域面積 —二四〇〇平方牍、

伊尾 川 0 水源は濃・越国境の白山です。 (明治以後は揖斐川

全長

一一二度

流域

面

積

約

五五〇平方牍

床は木曽・ 長良の 両 Ш より、 四片低い。

#### 3 宝暦治水と郷土

願い出ました。 でいたので、 木曽・長良・ 幕 府の 伊尾の三 力によっ 川 流域の村々は、 て治水の大工事をしてほしいと 毎年水害に苦しん

Ŧi. 横屋村庄屋寺倉孫九郎、 安田弥兵衛、 わ 八が幕府 たし達の郷土でも、 御普請願を出しています。 下笠村庄屋田中宗十郎、 寬保三年 大坪村庄屋日比太兵衛 (一七四三) に総代として 江月村庄屋吹原忠次 舟付村庄屋

た。 の治 や笠松郡代へ願い出るだけでなく、 も洪水が続いたので、 れて木曽・長良・伊尾三川の治水工事をしましたが、 延亨五年 水の役をしていた多良村 (一七四八) に丹羽若狭守が御手伝普請を命ぜ 農民たちは、 (現、 上石津町 江戸幕府まで願い出まし 水行奉行という美濃地 の旗本高木家 その

方

薩摩藩に命じたの じました。 治水工事御手伝役」を薩摩 幕 府は宝暦三年 幕府が濃尾平野の治水工事を遠い は (一七五三) 一二月に 薩摩藩にお金を使わせて、 (現、 鹿児島県) 一濃 日 藩主島津 1本の西 勢 その勢力を 尾 氏 0 州 に命 端 Ш 々 0

した。 た。 果、 す 弱 を総奉行とし か 8 これに土 止 b るため 幕府 む を得ず 意 地 方 でした。 地 0 0 役人七〇名、 悪 の人夫などを加えると二〇〇〇人程になり 命 九 令 13 四七 薩摩藩では に従うことにしました。 幕 府 名が遠 0) 命令に従うかどうかを議 御 手伝方の役人六七名、 V お 薩摩 金 が から美濃 なくて 家老 木 7 出て 0) -平 論 1 来 合計 た時 田 L た結 ま 靱 負

工 良 0 この 費予算は あ る幕 伊 尾三 工事 府 Ш 九 は治水工事にく 0 分流 役 万九千三百 人 計 画にそって実施さ 井沢弥惣兵衛が 両でした。 わ しく、 以 笠松代官にもなっ 前に n たと つく 61 つ わ た木曽 n たこと 最 初 長 0

三七名の

大工

事で

した。

元小 兵内の家に 総 屋 奉 行  $\equiv$ 0 平 事 つきまし 0  $\blacksquare$ 指 靱 义 負 をし は 宝 た 磨四年 本 部 と定めら 七 五 π れ た大牧村 関る 月 0 九 鬼 H 頭 10

栗笠 0) 専了 寺に残ってい る覚帳

百 頭 宝暦四 七千 人 ば か 石 n 年 八千 閨 月 馬にぎにぎし 右 九 其  $\exists$ 0 他 薩 摩藩 0) 諸役 ζ 0 人 伊 -馬三 集院 今 朝か 匹 + 蔵 弓 ら当 平. 鉄 町  $\coprod$ を三 砲 靱 負

渡 と書かれています。

武

具

、諸道具大分お通

ŋ

元是

古に

屋ゃ

大牧

村

兵内

百

両

13

7

明

百 Ē

責任の重大さに対する固 金 0 総 心 奉 行 配 苸 工  $\mathbb{H}$ 事 靱 負は、 0 困 難 3 幕府に対する 13 決意を胸に秘 情 風 俗 0 61 きどお ち がう土 8 て、 ŋ P 地 薩 がて手を下 柄 摩 藩 0) 不安 0) 借

> す べ き 牧 Щ 伊 尾 両 Щ を左 手に 眺 め な が 5 大牧 向 か つ たこ

とでありまし つよう。

衛 分 日日 1+ I 事現 方に b 九 出張 場 鑫 は 小屋 老町関係は三之手に入り、 一之手、 が あ 二之手、 ました。 三之手、 安八 四 1之手 都 大薮 0 几 村 0 I. 区 勘 右 13

r)

(1)第 期 Ι. 事

第 期 Ĭ. 事 は 毎 年 行 0 7 13 る普 通 0 ]][ 普 請 ځ 昨 年 破 損 た

ところの修理 養老 W] 関係 て をしまし は 牧  $\oplus$ Ш 菱 老谷 Щ 柏 尾

I. 事着工と場 所 養 老町 津

屋

刑

鷲巣

Щ

伊

尾

Ш

な

ど

0)

関

係

地

で

行

わ

n 谷

ま

Ш

小

畑

Щ

史より

宝

暦

四

年

月二 七 Н 根 古 地 新 田 枠 之 池

琞 月 Е Ħ

月

六 В 九 郎 右 衛 東

n  $\Box$ 

ם

九

 $\exists$ 

太有 場尾 新新 HI HI 根酒 **杏阿**地弥

九 Н 微屋村 高柳古新田 小 抨 新

 $\mathbb{H}$ 

月  $\overline{\bigcirc}$ 0 H H 高柳 古

新

毌

Ξ

村

上之郷

村

Н 金沢押明旗大 東嶋 屋田越徳/時 岩田 村村村村本村 遊村 杪 小直五 倉江日·大村市白野

村石新村田

五 Н 袓 父 江. 村 飯 積 村

口

ĒĪ



薩摩工事養老町内分布図

同 二五日 有尾村

谷川 i) 続 五月二日には第一期工事は完成しましたが、 砂 留がくずれました。 た雨のために、 養老町関係では、 くずれてしまっ 押 越 直江の普請した所や沢田 た所が少なくなかっ 六 • 七月に降 0) た

#### 一期工事

洗堰工事・逆川洗堰工事の外に、 第二期工事では、 最大の難工事である油島締切工事 川々の洲凌などの工事が P 大持ない

養老町関係では、 直江 祖父江 鳥江・ 栗笠 扮 付 0 鼠掌 ケが

13

行われました。

来上がった工事がこわれてしまったりして、 大雨によって折角、 が度々変更されたり、 幕府の命令で、 工事 出

森台 飯積悪水落先の江桁・洲凌の外、金屋・直江・ どがあります。 鷲巣堤の上置・ 飯 祖父江の北を流れてい 行った牧 現 ノ木の出張切広げ、 元在の相当 大牧 伊尾川・津屋川の 田 小坪新田 Ш Ш 0) 支流で 腹付な 段海 Ш



白石未地区の薩摩工事の石積

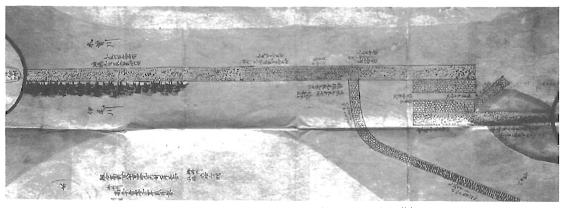
油島締切工事 (現、 千本松原の堤 わめました。

らないことに決まりました。 流点を締切って完全に分流するか、 ておくか、 この工事については、 なかなか決まらず、 木曽川 (含、 宝暦五年一月になって、 締切らなくて一部分あけ 長良川) と伊尾 川 の合 締切

険が増 それは、 う理由でした。 更に、 完全締切りにすると木曽川 木曽川と伊尾川の水上交通が不便になると 沿 11 0) 村 が 出 水 時 に

危

仕事は困難をき



中あけ千本松原締切工事の略図(長谷川千代子蔵)

更に、 喰違

今のように完全

〇年 分流

八八七)

か

たのは、

明治二

曾川

0)

水が伊尾川

流

れ入るようにしました。

この

締切堤は、

後

 $\exists$ 

|堤にやりなお

石でたたんだ土手を築 0 0 間 両 洗 4 ととい 岸 12 大榑川 0) 堤防より低 堤 う 防 と堤防・ 洗堰 0) は I Щ 事

四〇間 堤を突き出し、 間は は 約三六三 () 口をあけておき、 木 油 村から二〇〇間 約 島 ((約六一 新田 は か 桑名郡! ら五 八だ の締 中 間 Ŧi. 木 切 水 川 き、

その 水は、 大榑 荊 伊尾 ЛĪ 流 千本松原 (海津町油島) れこまな

明 明

治政府によって完成

治三六年にかけて、

が、 うやく決まりました。 き四尺 (一・二片) でし 幅二三間 長さ九八間(約一七八片 この堰は、 この洗堰の大きさは 伊 洗堰にするかが決ま この工事も締め切 尾川 宝暦五年一月によ (約四一 に) へ落ちこむ 長良川の 水 水 高 る

量を少なくすると同時に

が 流 定以上に川 水が増えてくると、 その 石 の土手を越えて

これは大榑川を締 0 元 水 水来、 大榑川の入口 部 は 大榑川 れ出るようにしたものです。 大榑川 は に洗堰を築き、 へ入って伊尾川 8 長良川と伊尾川とを結ぶ川で、 切ると、 長良川 長良川 へ流れこんでい 0) 堤 0 が、 水位 防が危険になる 長良川 が低 長 13 ました。 が 時 良 は、は、 增水 줴 0

るのを防 水を減ら 流れこ

n

み、

長良川

0

大榑川

伊

尾

Щ.

するとこの

洗堰を越えて

— 38 —

目的でした。 て堤防の切



大榑川の洗堰設計図 (長谷川千代子蔵)

長良川

0)

水が揖斐川

堰を完全に締切って、

明治政府はこの洗

ました。)

へ流入するのを防ぎ

牧田川、

津屋川へ

良

い影響を与えました。

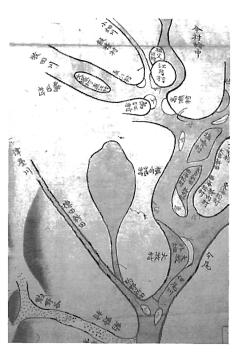
と定めて、

養老町南部

の伊尾川

激流を弱めるので、

水量、 響を受けて、 尾・長良の かし、 水勢の強 大川 その後も 支派川 の影 Vi 伊



(長谷川千代子蔵)

#### 宝暦治水以前の養老町水系図

事は完成し、

幕府の役人の検査も、

五月二二日までに終わり

非常な困

|難にうちかって、

宝暦五年三月二八日までに、

工

なお、

低地にある地域では、

努力、

改善が望まれます。

(5)

工事の完成

大正、

昭

和と永年の治水努力によって改善されてきましたが

養老町関係地域に大きな水害を与えました。

明治、

逆流

えました。 6 薩摩義士の苦難

外国にも、

これほど立派な工事はないであろう。」とほめたた

幕府の役人は「日本の国は申すまでもなく」

ました。

この時、

の監督のもとに行うことは、 遠く離れた土地で、 慣れない土木工事を、 容易なことではありませんで 厳 しい 幕府役

幕府は村々に命令を出して、薩摩藩士の食事は一

汁一

菜

粗末な食事しか出させませんでした。

が病死しました。 その上、 伝染病が出て、 一五七人が病気にかかり、

られました。 摩藩士は五一人に及び、 幕府の役人とのいざこざや工事の責任をとって切腹した薩 合計八四人の方が、 工事の犠牲とな

たが、 は、 大変苦労しました。 工 はじめの予定よりも、 事材料の中で、 後には、 多度山脈の谷川から取るようになり、 最初工事場付近の村々で、 特に難儀したのは、 非常に沢山必要とし、 石と材木でした。 集めていまし 御手伝方は 中には 石

橋爪・ その費用も高くつきました。 五〇段以上も遠い木曽川上流の太田付近から船で運んだ程で、 石畑・竜泉寺の村々から石を買いました。 養老町関係では、 大墳・ 高畑

内 は間に合わないので、 0 木材にも非常に苦労しました。 小倉村・白石村からも買いました。 遠く土岐郡からも買いました。 近くの商人から買うだけで 養老町

のは、 が、 おすと、 は じめ工事全体の予算は、 工事が終わるまでには、 わずか九八九五両だけでした。 約百億円) にもなりました。 実に四十万両 約十万両だと幕府は言い この 内 (現在の金 幕府 が出し 額 ま した 12 た

### 総奉行平田靱負の自刃

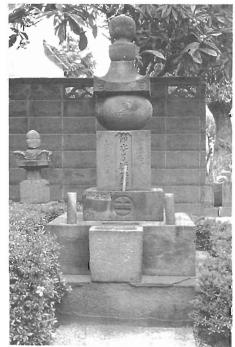
見区鷹司町 路京都伏見に送られ、 多くの藩士を死なせた責任を負って、 平 思いもよらぬ四十万両という大金を使い、 一五日朝、 Ė 靱負の遺体は、 四 元小屋で自刃しました。 大黒寺に葬られました。 その日、 船で下って桑名に上陸し、 年五十二才でした。 平田靱負は宝暦五年五 八〇余名という (現、 京都市伏 陸

薩摩義士の墓 地

b 一四名のお墓があります。 ħ 養老町関係では、 も地域 住民が墓守りをしています。 根古地天照寺に三名、 養老町は一番多く 根 古地浄土三昧 0 方々が亡くな

そ Ō) 他 0) 三重県桑名市寺町 義 士 0) 墓 は次の所 にあります。

海蔵寺 二四名



平田靱負の 藁 (京都市大黒寺)

ī 長寿院

桑名郡多度町 東方 香取 常音寺 長禅寺 五名 名

百 口

īī 岐 阜県海津郡 南濃町  $\blacksquare$ 今尾 太田

円城寺

平 町

安八郡輪之内町大樽 41.84 安八郡輪之内町大樽

常常寺 心巌院

江翁寺 六名

田

ケ鼻狐穴 少林寺 清江寺

羽島市江吉良

同 回 百 п

竹

他に宝 暦治水として、 幕府方で工事責任をとり切 した

0 墓が二ヶ所あり 、ます。

人

羽島市竹鼻 大谷派別院

竹中伝六

内藤十左衛門 岐阜市岩崎 霊松院

又 のお墓もあります。 大榑川洗堰工事成功を祈願して人柱になって入水した人 桝屋伊兵衛 (幕府の水行奉行、多良の高木家々臣) 安八郡輪之内町東大薮 円楽寺

### 義士をおまつりした神社

薩摩堰治水神社―安八郡輪之内町大榑の大榑川洗堰趾に 治水神社 に建てられ、 海津町油島にあって、 あって、 八六名がお祭りしてあります。 昭和六一年建立されました。 昭和一三年五月二四日

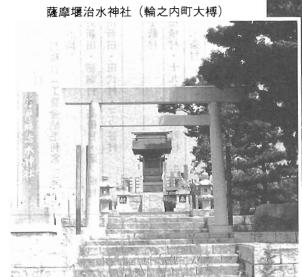
### 江戸時代の主要な御手伝普請

一 文 化 二 年	一八○四 文化元年	一 亨八 和二 年	明和三年 日七六六	宝曆四年	一 延亨五 年
長州藩	落 外 六 流	外 五藩	酒井小濱藩 毛利長州藩	島津薩摩守	丹羽若狭守
			吉川岩国藩		

五年間に一六回

参加大名数

七七家



治水神社(海津町油島)

子信を至り被馬をう 序面版标差す 出るいときりのなんちゃ いえしんとのこのうます ぬるうちんといいのかと 化さるやや 一多打绝艺术 署 传 勢濃

(表紙)

明和三

御両殿様其外態急飛脚を以致啓通候

今七日四時 日御老中御

勢州川々御督請御手伝被仰 御老中御列座之上、今度濃州· 剛道御出伺袪威候処、於遠之間 城可被成由二て、毛利能登守様御

長州藩御手伝普請沙汰控書 (山口県立図書館・文書館蔵)

·州川々御普請御手伝翻用状·州

扣

二ノ手

梨頼母殿御役□

#### 4 長州藩御手伝普請

61 それでも、 技術としては最高のもので、 か 場所が方々に出来ました。 薩 摩藩によって行われ 事業であっ なお 充分ではなく、 たわけです。 た宝暦治水工事 それほどこの地方の まことに立派なものでし 手なおしをしなければならな は そ 0 当 治 時 水はむず )たが、 O) 治 水

四紅 几 入りとなり、 関係では、 月と引続き五度も洪水があって大水害となりました。 H 明 和二年 には烏江村で牧 切れ、 七 月三 八 流 七六五) 月三日 れ た家 日 田 牧 が一 田 Ш 12 には、 は 0 Ш 堤防が切れて家三軒 小 軒、 0) 畑 堤防が大墳村で百三 耕 兀 Ш 通 地 月 ŋ +-• 五 江 月・ 月 町 村 t 0 月・ が流れました。 堤 十間 防 20 八 が 養老町 余が 切 月 n • 九 砂

	金廻村・江内村・油島新田	名 州 郡	桑勢
人	高柳新田・小坪新田大場新田・祖父江村・直江村・飯積村・金屋村・大場新田・祖父江村・直江村・飯積村・根古地新田・跡村・有尾村・有尾新田・根古地村・根古地新田・島田村・五日市村・押越村・白石村・小倉村・大	芸郡	多
	駒野羽根谷押出シ浚工事(金納)		
	安田新田・七右衛門新田・万寿新田本阿弥新田・宮地村・帆引新田・深浜村・安田村・	津郡	石
	亀村・森下村成戸村・外浜村・古中嶋村・石	西郡	海
	岡村·野寺村		
	大森村·西結村		
	下宿村·西橋村		
	車戸村・須賀村・勝村・仏師川村	八郡	安
	中郷村・五反郷村・下大榑村・海松新田・波村・塩喰村・豊喰新田・藻池新田・上大榑新田・南大籔村・楡俣村・福東村・福東新田・本戸村・南		
	十八条村・十七条村		
	別府村・上穂積村・十九条村・前野村・牛牧村	巣 郡	本
	三ツ柳村・小藪村	嶋郡	中
	西小熊村		
	笠松村・徳田新田・田代村・三ツ谷村	栗郡	羽
	日野村・日野新田・細畑村・高田村・蔵ノ前村	見郡	厚
	両・吉川家八五両) 覧山村外十一ヵ村組合(工費金納毛利家一三八六 正木村・長良村・河渡村	県郡	方
	村名	名	郡

長州藩普請場村々

#### 1 明和三年 濃州 勢州 川々御手伝普請

は計 及び若狭小浜藩 県 美濃国 画を立て 毛利氏、 ・伊 勢国の村むらから治水普請を願い 周防岩国藩 明 (現、 和 福井県) 年 (一七六六) (現 酒井氏に御手伝普請を命じ 山口県) に長州芸 吉川氏 萩藩 出 たので幕 (萩の支藩 (現 府 Ш

普 平 域 現 に分け、 役人を決め、元小屋を美濃の笠松に置き、 にわ 在の  $\coprod$ 命を受けた長州藩では、 事費につい 場 町 たり、 所 岐阜市·笠松町 は約千か所 墨俣町・安八町 総勢四七三人で工事にあたりました。 養老町では一 総延長は二八○詩にもなりました。 羽島市・穂積町・巣南町 海津町 七か村が普請を受けております。 総奉行に益田喜次郎を命じ、 南濃町 ・養老町 工事場所を六丁 普 請の 輪之内町 の広 地 域 地 請 は

ては 建設材料 人夫賃・運送費など総工費 0 中 材木だけは幕 府

が負担し、

あとはお手

益田喜次郎肖像 (山口県立図書館蔵) 府の林 まで運ぶ費用 ました。 伝い大名の負担であ 大名の た。 総工費は、 Ш その 負担であり から普請  $\langle$ はお手伝 材木も幕 ゎ ま 所

> 多 なものでありましたが、 すから、 治水工事に従 は 数の わ かりません 人夫が広 その費用は大変 事 ŀγ が、 たので 地 域 日 0) Ų

藩とで、 ました。 負担分の八○裄を負担 お手伝い大名の

 $\Box$ 六日にはじまり、 にはすっ 工 事は明和三年三月 かり 終 六月八 わりま

した。

長州萩藩とその支藩岩国 長州藩士治水顕影碑 内閣総理大臣 佐藤沃報書

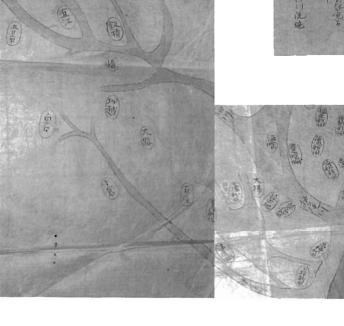
長州藩治水顕彰碑(岐阜市四ツ屋公園、金華橋南東)

藩士が 母しは 名は工事費 事以外の経費もかさんで長州藩は大へん苦しみ、 n に非常な苦しみを受けたので、 0) 13 時とい へんなものであり、 この御手伝普請でも薩摩工事の ました。 |大坂の大商人に頼んで何度も借 直接慣れない 0 割りあてだけのお金を出 今度の工 工事にあたりまし 事とい また、 多数の藩士たちの滞在費など工 61 その お手伝 時と同じように多数の 後の 金をしました。 せばよいことに改め い大名が慣れ たので、 御手伝普請 その苦労は 家老梨羽 からは な 薩 摩工 11 長 仕事 頼た 州

#### 2 文政三年御手伝普請



(山口県立図書館・文書館蔵)濃州・勢州御手伝之図



松下内匠が行い、 担しました。長州藩毛利家記録に、「実際の工事は、美濃郡代 藩は四万一千両余、 年五月二五日に長州藩に対して御手伝普請が命じられ、 てしまってから後に御手伝普請にすることに決定し、 翌年の四月には完成しました。しかし、この工事は、 も多数あり、 に大地震があり、大被害を受けました。堤防がこわれた場所 堤防のこわれた場所を調査させ、工事をさせました。 文政二年(一八一九)六月一二日に美濃・伊勢・近江地方 幕府は治水上急いで修復する必要があるので、 長州藩はその経費だけを負担する。」とあり 周防岩国藩は七千九百六十三両二分を負 文政三 完成し 工事は

詰下流)に顕彰碑が建てられました。され、翌年には岐阜市四ツ屋公園(長良川左岸堤、金華橋南で、昭和四三年(一九六八)に岐阜県長州藩士顕彰会が結成このように岐阜県は長州藩から甚大なご恩を受けているの

金量

### Σ、その他の御手伝普請

安永七年(一七七八) 津屋川通りの鷲巣村・志津新田・

で、鳥取藩松平氏が御手伝普請を命ぜられました。小坪新田・牧田川通りの五日市村・鳥江村の堤防が破れたの

が普請を受けました。 大場・根古地・根古地新田・大牧・高柳新田・ 名に命ぜられました。養老町関係では、 天明三 一年 (一七八三) 小倉藩 (福岡県) 直江 小笠原 小坪新田 ・舟付・ 氏 大野・ 2等五大 の村 Q

化一三年(一八一六)にも、御手伝普請を受けました。受けました。寛政八年(一七九六)文化二年(一八〇五)文の御手伝普請を富山藩(現富山県)松平氏など六大名に命じ寛政元年(一七八九)、幕府は美濃・伊勢の中、三二〇ヶ村



喰違御堤趾の標柱

### 6、押越村喰違場

た標柱が建っています。 高田中学校の運動場南の道路ぎわに、「喰違御堤趾」と書

14)で、その間に堰がありました。いる堤防のことで、押越村の喰違堤は、巾が八間(一四・五喰違堤というのは、堤防が続いていないで喰違いになって

牧田川の水を減らし、堤防の切れるのを防いだのです。位が高くなると、堰を乗り越えた水は、金草川へ流れ込み、この水防法は、牧田川の水が増えてきて、この堰よりも水

れてい 害を受けるようになりました。 (牧田川は、 高畑 ましたが、 大墳・ 古くは、 永禄九年 直江の三村は川中島になって、 高田中学校・美津濃工場の敷地 《一五六六》の大水で、 30 頁上段喰違堤付近略 二つに分 ・つも水 を流 図

#### 7、茶園原堤跡

合体育館の西に残っています。 ようにしてあ 五 牧田 日市 川の堤防が切れても、 村から桜井村の方向にかけて、 t) ました。 現在 は 川下の方へ 取 r) 壊されて、 短い 水が押し込 堤 その一 が築か れてい 部 まない が

所を霞 堤(断続堤)といいます。なっていて、その一部分は重なりあって二重堤になっている(参考)30頁上段の図に見られるように、堤防が切れ切れに

#### ᄱ 明治の美濃の大洪水

から、 養老町でも養老山麓を除き、ことごとく水没しました。 麓までも水がつき、 ました。 大垣城天主閣の石垣まで水がおしよせてきました。その標示 川の堤防が至るところで切れて、 の線は標高九ばです。 明 治二九 屋根まで水がつきました。 木曽川、 年(一八九六)、 揖斐川、 南は伊勢湾に至るまで大海となりました。 養老町の平野部の標高は〇・三片です 長良川の三大川を始め、 七月と九月に二度も大洪水が 北の赤坂から東の金華 各地 Щ あ  $\mathcal{O}$ 0 河 ŋ

水李馬下最之 **送蒙諸型洪** 生生高三 建前佐宁安南狗凡 氏夢:圖字班 堂床上堂苗縣下九月十一月大 明治九中蒙 月 教 消

明治の大洪水を記した天照寺の過去帳

其後九月十日に至り 七月二十一日入水、 県下最も甚し

初め

ている記録によると 寺の過去帳に書かれ

根古地にある天照

此年諸国大洪水本

+

日 大風

が

再び入水、

加るに翌

き 家 は 当国にて二千余戸 は 幸ひに免るるも民 過半 出 当寺

> の大洪水は、 水本堂床上一尺五寸侵入せり。」と記してあります。 流出)、剰 入水後 昭和三四年の水害よりも水位が一・五景ぐら 赤痢病流行死者甚た多し惨状極 れり、 この明治 此

高

かったと推察されます。

となりました。多芸輪中では津 防が約三六〇片にわたって決壊し、 方豪雨は盆をくつがえすような状況で、水防は困難をきわ 揖斐、長良、大榑川はそれぞれ八片、木曽川は五片を越しま となり、木曽川も四片を越す増水で堤防は至るところで損所 Ż, した。従って、洪水は堤防を越すところがでてきました。一 風が強くなり、 を生じました。翌二一日になっても洪水はますます増水し、 この洪水は、 正午になって揖斐、 輪中内へ入水しました。 諸河川は満々と洪水が流れ、 翌二〇日午前七、 明治二九年七月一 長良及び大榑川の水量は、 屋 九日、 Ш 八時頃ますます激しさを加 あちこちの堤防が危険に 筋の徳田新田堤防 西南濃地方は 午後一〇時頃より 七景以上 面 が決 四の泥海

この 屋 が襲来し、 根瓦がとび、 七月洪水の被害復旧ができないままに、 Ħ は 朝から北風が 人々は自然の厳しさに戦慄することになりました。 倒壊する家もでてきました。 吹き、 午後六時頃より天候は悪化 八月三〇日に台風 洪水に加えての

望 中 となり、 午前より 晴を期待 台 洪水となりました。 内 風 か 0) B 水位は 九 病が 七日も夜より連続して降り始め、 実に悲惨を極めました。 していましたが、 更に一一 一一日午前八時まで上昇する一 ふりだし、 日夜の大風水により暗黒の中での 雨 午後より夜半にかけて劇甚 は 予想に反して曇天が 八 日 九日、 九月に入り台風一 0 各 方で、 )日と降: 地の堤防 つづき、 人々は なる 'n 過して 続き輪 が 被 切 雷 絶 n R Е 秋

高 垂 大 揖 德 観 測 地 点  $\mathbf{H}$ 井 垣 奜 Ш 六〇三・ 74 六 Ŧī. 至自 九 JU Ħ. Ŧī. Ľ L 九六 日日 八 儿 八入 日水 至自 四三 九 兀  $\bigcirc$ 以の 五 八 \_\_\_ 後た 一九 欠め 日日  $\mathcal{H}$ 几 六 Ŧī. 八四 -L: 六四 九 六五  $[\Pi]$ 六 -L 九 計 (単位が) 六 Ŧ. E.

西濃地方の通算雨量(養老町史 P 526より)

上、サーレ-bbrb (の t kip / 美北町 D 201 k b )

は多く

0)

死

者さえ出

ま

した。

明治29年美洲	農国の大洪水被害	(のびゆく養老	町P221より)
被害	明治29年7月	明治29年9月	明治29年計
町 村 数	829	649	1,478
入水戸数	11,220	11,040	12,260
流出家屋	919	3,738	4,657
崩壊家屋	4,064	5,377	9,441
死 者	49	158	207
羅 災 者	190,000	270,000	460,000
堤防決壞箇所	2,228	1,058	3,286
堤防決壊間数	61,352	30,445	91.797
道路決壞箇所	3,191	2,344	5,535
道路決壞間数	87,502	4,635	92,137
流失耕地	3,839	_	_
浸 水 耕 地	38,391	37,007	75,399
墜 落 橋 梁	3,515	1,385	4,898

事と小 V > は て被害を大きくしない Ш ます。 大正 が 牧 河  $\blacksquare$ 昭 Ш ᅫ 和 0 と続き、 水落ちをよくする工 津 屋 Ш よう、 現在も水防 牧 田 木 Щ 曽 が 事 工事 小 が 長 畑 良 が 進みました。 Щ 各河川で続けられて 揖斐の三 それぞ この 刑 n 分流工 逆

工

流

この 大洪水の 大きな犠牲のの ち、 長良 Ш が揖 斐川 揖 斐

守る意 数の

識

が

かり立てられ

ました。

作物

0) 度

収

穫は皆無になり、

0

大洪水にあ

つ

た輪中

出稼にいく者、伝統中民の災害復旧は

行商をする者、 は悲惨でした。

漁

業をする者

他

郷

転

住する者も多く出ました。

しかし大多

人

々は災害復旧

にむけてたたか

1,

水防、

治水に輪中を

# 五 昭和三四年の集中豪雨と伊勢湾台風

#### 1、災害の概要

日日 には、 中二六〇 各 録 河 的な集中豪 昭 午前 Щ 和 三四 根 0 ・は悲惨な状態になりました。 古地 0 堤 九 おが泥海となり、 防 時 年 雨がある 地 を 高 内 田 九 層危険にしました。 地内島田 0 牧田川の堤防が一二〇片決壊し、多芸輪 n  $\Xi$ 九 八月 のため 裏の堤防が決壊し 二十九日間にわたって湛水し、 一二日 牧田 一三日午後七時五〇分 Ш から一三日にかけて記 0 水 があ たのをはじ ふれて、

雨が県下一帯に降り、西南濃地方では、この二日間四〇〇汽ニペーにれは活発な前線活動と台風七号の北上に伴う影響で、豪



根古地にある決壊口の碑

出 漏 時 かます、 あ 0 前非 ての台風六号により、 雨量六〇〇行上に達しました。なお八月八 か 根古 され住民は着のみ着のままで周囲の堤防へ避難しました。 頃には堤防が危険になり作業を中止しました。 水箇所の杭打ち、 ŋ ら七〇〇年上に達する豪雨になり、 根 ぶ 三日は、 古地 れのようにあり、 1地より Ш 0) むしろ、 の増水の時 破堤により 消防団 江 ノ橋 南京袋などを持ちより、 土嚢はこびなどにがんばりましたが、 をは には 0) 池辺、 間 堤 西濃山間部で二〇〇メニム前 の牧田 ľ 61 防はゆるんでいました。 め根古地区民各戸に一 つも湧水量が多く 笠郷、 川堤の 広幡と上多度の三 揖斐川 西側には河 堤防の補強工 H 、なっ から 流部 人づつ 間\* 決 田 壊 避難命 てい 九 後 でも 0) H 郷、 「が多く ました。 降 令が 事や、 附 T か 近 1+ が

や耕 この決壊口から侵入した怒濤は激流と化して、輪中内の人家動されましたが、人命だけは幸いにその難を免がれました。 境であったり、 大きな波を誘い てやや減水しはじめましたが、 人の人々がその被害を蒙りました。  $\mathbb{H}$ 0) 被害を大きくし め笠郷地区、 広大な沃野を泥海にしました。 地を一呑みにして、 部 の部落は濁 また、 上多度地区東南 屋根まで没した家屋を根底からゆさぶ ました。 流におかされ、 排水機が水没してその活動ができなか 四日夜半にいたるまで水勢を増し 特に海抜 ñ 部 日朝七号台風による強風 養老町に災害救助法が発 がは自 この洪水も一 L 然排 水 不 0 能 池 ħ 11000 一日に至っ 辺 地区を 特



(岐阜県広報課提供)

理をおこない、 か 機械排水によっても排水が完了するまでには二十余日

ながら耕

地の復旧

につとめました。

離散家族との

同居も始まり、

落ちつきを取

旧

らの

奉仕、

親戚知 1衛隊

人のはげ

ましと救援によっ

住居

0

修 X か

ました。

の救援活動をはじめ、

養老町の

菲

;被災地]

間

か

たりで、

湛水期間が長引き、

農作物に全滅の被害を与えま

昼夜兼行による決壊口

0

仮締切と全機能を発揮して

四年八月 — 三 日

昭 和三 防決

八月一 ĮŲ, 決壊拡大防止、 上流

基沈設

 $\exists$ 沈設、浚渫船 仮締切着工、 中 で土砂推積 聖牛、 猪ぃ 子:

八

Ŧ

土俵積

九月二〇日 八月三〇  $\exists$ 仮締切完了、 水切完了、 天端通 復旧 工事継续 行開 始 続

九月二七 日 伊勢湾台風で再び決壊

月二六日昼ごろ、大きくて強い台風が当地方にとっては コースである紀伊半島 再び水害におののきまし 0 潮岬に上陸するというニュ たが、 水片付け、 家族 0 疎を

開t ス と が

流

n

と今度は先

元の経験

から手早で要領のよい

作業となりました。

三川は増水し、

台風通過後の

一西風が落ちてきたころ、

洪 揖斐

水

方から夜半にかけ

て風雨は強くなり、

木曽・

長良・

最い

悪の

九

#### [堤防決壊後]

泥水の中に没していく母校を目の前 にみて、子供たちは大声をあげて泣 いた。(池辺小学校)

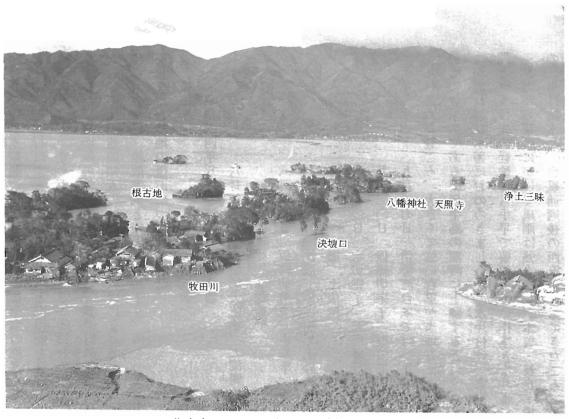


避難小屋(大巻の堤防上)

自宅は泥水の中。やむを得ず堤防の小段 に杭と竹・むしろの囲い、トタン屋根、 原始生活さながらの住民。

救護活動のお陰で、食事時間になると、 おにぎりが届けられて感謝する。

(岐阜県広報課提供)



集中豪雨による決壊口付近(中日新聞提供)

養老町の集中豪雨(第一次)伊勢湾台風(第二次)の一般災害

X		分		第一次災害	第二次災害	合 計
罹災	者	総	数	11,962人	9,805人	
<u>\</u>	死		者		1人	1人
(的被害	負	傷	者	3人	23人	26人
害		計		3人	24人	
	全		堫	33戸	33戸	66戸
住	流		失	17戸	8戸	25戸
家の	*		壞	1,538戸	1,445戸	
被	浸	床	上	23戸	10戸	
害	水	床	下	556戸	275戸	
	合		計	2,167戸	1,771戸	
非 住	家の			2,736戸	237戸	
農	(T)	流埋	失没	70町	42町	112₩7
業	田	冠	水	2,024町	1.715町	
	加	流埋	出没	5冊丁	2冊丁	7四5
被	XIII	冠	水	163町	129年[	
害	合		計	2,262町	1,888町	
農作物	勿被	害金	額	894,700千円	185,000千円	1,079,700千円
林業	苗		畑	200坪	400坪	600坪
被害	林被	害金	物質	15,000千円	10,000千円	25,000千円
水産	漁		具	200千円	400千円	600千円
水 産 被 害	水被	害 金	物質	25,000千円	5,000千円	30,000千円
その他	生の	産被	品害	2,495千円	500 千·円	

出する大災害でした。これが伊勢湾台風による大災害です。 潮が海岸堤に打ちつけ、 は 災害救助法が発動されて、 この 旧 災害救助法の発動 堤を乗り越え、 時、 - 三重県・愛知県の伊勢湾岸一帯は最高七㍍位の高 仮堤防を崩し、 九月二七日午前三時二五分、養老町に 至るところで破堤 国 県、 再び決壊しました。 町 'の救援活動が行われま 死傷者さえ続

て堤防決壊の状況をみてみよう。 ここで元根古地区長・ 郷土史家児玉定氏の記録を中心にし した。

### 〔集中豪雨による根古地決壊〕

時には二三五代はとなる。台風の影響で夜に入って雨量も激 増加も大したことなく、午前六時は一七八代れとなり、 〇代はの増水となり、 しく、六時より七時の間に五○ケヒド、七時より八時の間に一一 昭和三四年八月一二日大雨警報発令される。牧田 かくして、一三日の朝の六時の水位は実に七六二だだとな 家族全員各自に必死の努力にて水片付けをなす。 ついに三は五〇作にの警戒水位となる。 、午後六 水位は

面 刻 0 低地部四か所より堤防を越えて川水が入る。 刻増して、一三日午前三時には七八八代学となり、 堤防

より とのことにつき調査をなす。 午後三時すぎ、 漏 水が あり、 例年の状態より流水が多量につき見てほ 杉野まつえ宅付近、 午前八時 とくに内堀いく宅は朝 頃 内堀いく宅に退

避の指令をなす。

— 51 —

Ш

の水

この時分の水位の状況をつぎの表によってみてみよう。

В	時	爵	天候	水	位	備	考
12	午往	变 9	雨	460	)cm		
		10	11	570	) //		
		11	n	602	2 "		
		12	11	625	5 "		
13	午前	í 1	酮	64]	Lem		
		2	n	657	7 11		
		3	11	692	2 11		
		4	n	768	3 "		
		5	ij	762	2 11		
		6	"	750	) "		
		7	,,	750	) !!		
		8	"	750	) #		
		9	"	750	) "		
		10	"	752	2 11		
		11	盘	756	5 <i>11</i>		
		12	"	758	3 "		
	午往	矣]	l!	765	, i		
		2	,,	775	5 "		
		3	"	788	3 11	退避	命令
		4	JI	805	) <sup>13</sup>	4 か削 土俵を り あ	つく
		5	"	805	j <i>''</i>	披高	水位
	6	25	"	815	5 //	最高	水位
	7	20	"	793	j "	堤防法はじ	
		8	"	不	詳	村民	退避
		9	11	不	詳		
		10	雨	53	30		
		11	"	53	36		
		12	"	40	00		
			1	1		1	

この水害の状況はつぎのようである。 水害区域 池辺、笠郷、上多度三郷、

広幡、

高田の一

部

田畑の冠水 二六〇〇余へクタール

流失家屋数 — 七

全壞家屋数 

半壊家屋数 一五三八

その他床上浸水家屋数 二三

にムシロをはった仮小屋に避難し、家財道具との雑居をはじ 水害直後の一 四日、一五日、被災の住民や家畜は、 堤防上

め、そして一日も早い復旧を待った。

二台を急派した。 県災害救助 隊は米三○俵を放出、また飲料水のため給水車 陸上自衛隊は、 あちこちに点在している被

な姿をした稲田があらわれ、村人を驚かす結果となる。

青きところなき、見るもあわれ

ぐしゃぐしゃに折れくさり、 排水機運転が進むにつれて、ぽつぽつと茶褐色や茶黒色で、 解掃除をして、その修理のできたところより運転を開始した。 として、乾燥して使用することとし、ジーゼルエンジンは分 瑞穂の七か所の排水機が水につかり、排水できない状態であ を投げ入れ、逃げ遅れた約二〇〇人を救助した。 った。そこでモーターは、至急運転をする必要上、応急処置 も舟で大場・小坪・大巻へいった次第である。 輪中の水は、五三、十三か村、六か村、釜段、小坪、大巻、 村内は、もちろん通行不可能であり、十日あまり経過して

木舟一一隻

災者のために鉄舟三○隻、モーターボート二隻、

くなったりして見る影もなき姿である。 らわれるに至る。 さ一四~一七片の池 る。 九月一〇日ころには田も畑も宅地も洪水前の状態に復す。 大巻の蓮根田も、 畑より高いくらい 地元根古地も 仮締切のサンドポンプの水が波打っている有様である。 流出家屋の跡は大穴があいたり、 田 みな枯れて種蓮根まで駄目とのことであ 面があらわれるにつれて、二十町歩以上 (落堀)となり、 の砂丘状を呈した荒地 また一帯は泥海のごと 堤防決壊地近辺は深 (砂入り) 周囲が高 があ

県の指示によって午後六時、 排水機の運転を中止する。

# 〔伊勢湾台風による根古地決壊〕

次の表のごとく二七日午前一時四二分、 住民は、ただ呆然として、 ソクも電灯もなく、 黙々として小舟の中に仮眠するもの 自失の有様である。 再度堤防決壊をな 二七日は

> 堤防 上のリ ヤカ 0 荷物 の間 に一夜をあかすもの、 個人個人

思い思い 0) 仮睡をとる。

害時と同様に自衛隊をはじめ、各方面の救助を受けた。 二七日養老町に災害救助法が発動せられ、 八月一三日

白米の現物支給を受けたので、 堤防の斜 面に急製のカマ ŀ,

を築き共同炊事も行った。

排水機の運転は、

仮締切のできた一〇月一

〇日現在で、

五.

三排水機と十三か村排水機のみであった。 この水害の被害はつぎのようである。

流失家屋数

全壊家屋数 <u>=</u>

半壊家屋数 匹匹 五.

その他床上

浸水家屋数 Ó

В	時間	天候	水 位	備 考
9月26	午後1	曇	412cm	
	2	小雨	421 "	
	3	н	427 "	
	4	曇	435 "	北 強 風
	5	雨	440 "	n
	6	"	447 "	"
	7	"	485 "	台 風
	8	"	503 "	n
	9	"	602 "	"
	10	"	692 "	"
	11	"	768 "	風、西方に 廻る
	12	11	785 "	"
27	午前1	小雨	825 "	"
	1 . 42	,,	831 "	堤防決壊始 む
	1 . 50	,,	834 "	
	2	細雨	820 "	
	3	小雨	810 "	
	4	"	760 "	
	5	雲	710 "	西北強風
	6	"	650 "	
	7	晴	520 "	
	8	"	410 "	西北軟風
	9	,,	408 "	
	10	,,	402 "	
	11	n	406 "	
	12	"	414 "	

#### (1)

. 伊勢湾台風の進路 数字はその時々の気圧 (ミリバール)

b の第  $\Xi$ と湛水 馬 れ 前 力、 にみ 二室戸 た昭 防 総 九 台風 除能 個 排 水 所 和 量 による災害から、 = 力の増大をみた。 兀 毎 九 秒三万四六五五立方は、 年 基の排 0 集中 水機 ां が 排 設置され 水 伊 機 勢 湾 0 新 台風 設 総 排 総馬 ま 水 整 为三五 面積 た三 備 が Ŧī. は 兀 か 年

排

水

計

兀

九

六

#### 960 0 1 時 6高⊞ -37 9500 24時 〇長野 〇 金沢 〇松本 945 23時〇高山 945 €22時 〇飯田 〇岐阜 静岡 〇名古屋 Ò 35° 大阪 940 20時 930

伊勢湾台風の経路図 (のびゆく養老町P224より)

137

138

#### (1)か ら の 復 睴

害

救

助

避 難 所 0 設 備 及 収容 学 校、 公民館、 寺院 野 外 澼

34

六日より一〇月三一 〇六一名でした。 所 2 が 炊き 出地四 ケ所収容延 し給与…… 日まで三五日間、 人員一二万九〇六一名でした。 消 防 団 婦 間、給食延人員は人会等の奉仕活動で 九月二

二万

- より 部 他に大垣 遣を受け、 隊 3 の給水セッ 飲料水の供給…… 月一 市 0 九月二七日から一 散水車、 〇日まで ト三台 借上 应 几 タン 長期湛  $\exists$ 0 〇月三一日まで三四 · ク 車 三輪車、 間 給水しました。 水の 台、 ため、 ドラム缶等機 ダンプ 自衛隊 カ 豊川  $\exists$ 1 一二台の 械器具に 間 実施 茨城 派
- 給されました。 家の全壊又は流失 (4) 被 服 寝具等 住 0 必需 家 0 # 밂 壊床上浸水に区分されて配 の給与……被害程度に より、 分支 住
- 県立 地 南 (5) 北 |岐阜病院医療班 に 医療 救護…… 班ずつ配置されました。 0 九月二七日、 派遣を受け、 早朝 〇月三一日まで、 に 日 赤医療班、 午 後 決 壊
- が び 1) 教 寄 (6) 贈されました。 科書が支給され、 力 0 映 用品及び教科 面スター から、 早 書の給与…… 期 笠郷、 開校、 池 迈小 学習活動が 被災小中学生の学用品 0 両被災校にピア 行われ T 及

災害発生 設 が 住 7 宅 建 応急仮設住宅の設置 建作品 前 E 玉 有林 五坪、 0) 五 割価 木材 建 格で受けました。 0 設 払下げ 費一  $\bigcirc$ ・全壊、 方円 仮設住宅 貸に流 与』出 与よ出の 戸 別間二ケ年) この被災者の内、 当 十三石 年) 二三 仮

**7**18時

135

136°

#### (2)農林対策

共に、 1 多芸輪中 ただちに排 ては、 地 の復旧 ·地域内に流入 町営又は県営委託事業 水にか 0 戸 か ŋ  $\bigcirc$ た土砂、 H 〇月一 牧田 Щ 五日に排水完了しま 約七五万立方以 0 池沼埋立による干 仮締切工事完了と 排

事業と合わせて実施しました。 農地、

農業用施設の復旧

湛水排除事業 農業用施設 農 水 機 地 二六ヶ所 九 ケ所 三一八千円 九九五千円 九二〇千円 五 九 于 Щ

六ヶ所 二九〇千 一六二千円 由

五五ケ所

農業用施設

農

地

小災害

天災融資法の適用と資金枠の拡大 延 六一七件

3

作農維持創設資金 六〇、 八〇一千円

4

伊勢湾台風災害 集中豪雨災害 二九二件 〇九四: 件 二六、七五〇千円 O Æ 七三〇千円

(害対策米穀の売渡 農家一五六二戸にもち二五四俵、 うるち一五六四

(5)

#### 仮設住宅 (根古地)

全壊・流出世帯のために応急仮設住宅(五 坪約10万円)が建てられた。



医療救護活動

県立病院・保健所・日赤岐阜支部の救護班 も災害地を巡回し医療救助を行ない、体の故 障を訴える人たちに感謝された。

(岐阜県広報課提供)

俵を売り渡しました。 代金支払いは翌年払い。

#### (3)救農土木事業の実施

被災農家の田 ・畑・道・水路などの復旧と農家の現金収

入を得るために行われました。

耕地整備事業 (区画整理)

多芸輪中	地区名
一、罕光町	面積
型"、约00千円	事業量
三量、000千円	補助金
補助率 吾%	備考

#### 埋立干拓事業

多芸輪中	地区名
<b></b>	面積
三圆、三克千円	事業量
忠、三八千円	補助金
補助率 県費三%	備考

#### (4) 多芸輪中の復興計画

農業の近代化と養鶏振興

1

- 共同利用農機具の購入
- 鶏共同飼育管理所四ケ所設置
- 稚蚕共同飼育所、 作業場設置
- 2 簡易水道の布設

水源四ヶ所、給水戸数一三〇〇戸、人口七四〇〇人の

給水が実施されました。

3 公営住宅の建築

五戸連棟の鉄筋コンクリートづくり三階の住宅三 棟雪

> (根古地、 田 を建築しました。

水害に備えて一 階は共同作業場、二階・三階は住宅

になっている。

#### (5) 土木関係

国庫災害工事 道路、 橋梁 五件 一、六四三千円

仮締切 件、一、 二〇〇千円

町単災害工事 道路、 橋梁 二五件 一七二千円

砂防

九件 こが、四〇三千円

河川 水防

> 七八九千円

二件 五、一三〇千円

(6)文教関係

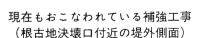
二二八三円をもって復旧し、 小中学校及び公民館の建物と備品は、 災害以前の姿に戻すことが 総額三〇〇六万 **—** 56 —

できました。

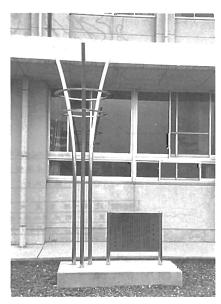
一、突发一、三三人	大川屋0,000	一九、九〇三、五〇〇	三四、八四、八二八	小計
三八三人	<b>公园</b> 0、000	[	一、一六、三八	補助対象外
た 四	U000 JENT	<	一、三西、玉西	其の他九校
四周(三十二	· 东①丸、000	五、〇四四、九〇〇	七、10五、六三	笠郷中学校
110一、四山先	、世紀表、000	五、五八二、七〇〇	七、五七〇、一七九	笠郷小学校
<b>芦七、三属</b> 町	三0000年	五、元五、八〇〇円	七、七四、二二二四	池辺小学校
町一般財源	質	国庫補助金	事業費総計	融 備 名

天端 に つ は、 為、 は て、 牧 応急給食施設 笠中給食施設 上小給食施設 笠小給食施設 小 笠 池小給食施設 根 伊 設 総 小 小 畑 郷 辺 0 古地破 特に堤防の 腹 田 勢 他 公 公 備 另湾台風 備えを堅くしました。 1 幅を厚く二段式にし、 Ш 一館 民 民 計 民 計 計 積 部で溢水したので、 0) 名 館 辅 堤 堤の災害に鑑み、 強を行いました。 防の嵩上がおこなわ 根古地破堤復旧 事業費総計 天端に石積みや (01周、大10 (分)、云 盖 \$10,040 108,110 六三、0全 至0,000 元1、01五 **公**、0至0円 0110 **18** 729 ==0 110 三式、100 图代 100 益 三天、八00 七九四、 庫補助 吾、六00 昭 昭 元、50日 更に根古地 高柳より 後の牧田川 現 コン 和 吾 和五二年に更に下流部 元在では、 金 五 n ク 又、 年 ij 町 下流 九 や鳥江地 430 큯 元0,000円 \*0,000 明治年 月 堤防を強固 1 0 工事 償 水 -代の堤 防壁 区に 日 町  $\mathcal{O}$ Ord , Oity , 蓋 完光、 野(0 され、 芸芸 丟 (本)、野( 140,000 画,010 既, 医四 をつ 0 お 防 堤

比 べて一般的に二点ぐらいは高くなっています。 決壊口を含め鳥江まで 水害時 にする 防 7

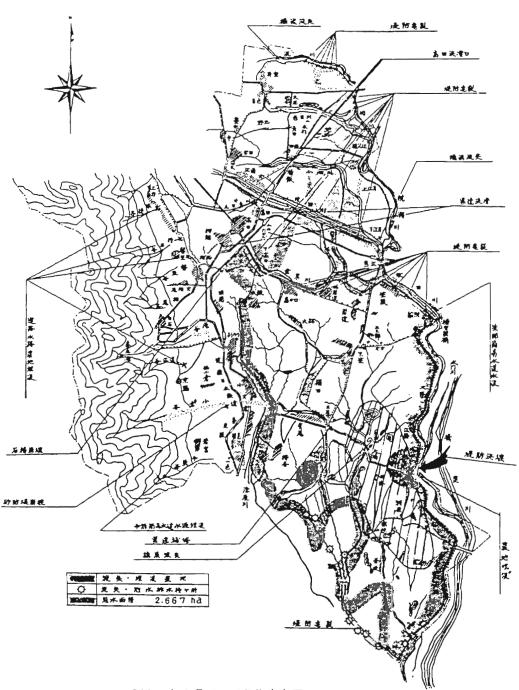






集中豪雨と伊勢湾台風の水位標 (東部中学校)

#### 養老町災害状況図



昭和34年8月12・13日集中豪雨 並に伊勢湾台風による災害

# 第六章 近世までの用排水

にも大へん苦労しました。共に、全地域が輪中に含まれているため、用水、排水の対策共に、全地域が輪中に含まれているため、用水、排水の対策当地域は洪水による大川の被害に対処する治水の問題と

#### 一 用 水

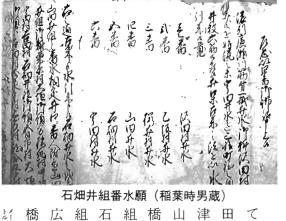
#### 1、番水と水論

を作っ 多く、 くと水は枯れて、 水はすぐ地 中内 たり、 つも用水の不足に悩まされてきました。 0) 上がの 中へ浸透してしまう上に、 隣村や川 地域では、 稲作に必要な水を確保するため、 向 いの村と争うこともありました。 扇状地の特質として耕土は 水路は不完全で漏水も 日照り 長い 浅 が 水

易に取 れました。 に差し支えないよう呑水溝の三間 を立てるならば、 水を新田へ引きたいと頼んだところ、 流域は谷水が豊富な上に、 天保九年(一八三八) 水することができました。 牧田川上流地 余り水は残らず取ってよいとの証文が渡さ 域の非常な水不足に比べて、 石畑村の与三右衛門は、 Ш 0 水も樋門を開けば比 五、 津屋村からは、 四五ば) 下に別 今熊谷の余 飲料水 2較的容 津屋 の溝 Ш

享保六年(一七二一)西岩道、栗笠、船付、東岩道、上之

郷の五 栗笠、 払うなど、各村の村役人が願い ので、 を用水としてい 村へも迷惑をかけないようにし、 うこと。順水(上から順に川を堰きとめて水を引くこと) 不足となり、 めの堰)を取払い下三ケ村へ水を下げるようにする。 あるので、 の日割どおりにかからないときは、 島田 船付、 ケ村は、 両岩道村へ一番水をかけ、 村の悪水を番水にと願 上之郷へ、三分通りは西岩道、 口ケ島村懸圦の下で高田 ましたが、この年は 高 田 川(金草川)及び押越、 出て許されています。 雨が降れば早速井留 い出ています。 相方立合の上よく話し合 照り続きで上の村 早速井留 川を築留めてしまっ 島田 東岩道とし、 (水を引くた 七分通りを 両 耐の悪水 他の村 マが水 を取 右



組合) Щ 橋 津 組 石 て用水としていたの 田 町 牧田川 合) 畑 爪 田井水 村井水、 井水、 石畑村井水 中 宇田村井水などで、 竜泉寺、 から水を取り入れ (栗原-現垂井町 乙坂村 宇田、 桜井村井水、 上方の各村 豊の (五日市 (現上石 は、 各村 沢

瀬

][[

筋

牧田

Ш

0

現広

瀬



元禄時代旧多芸、上石津両郡村落図 (養老郡志より)

f) ました。 享保九年(一七二 願 い出た文書によれ 匹 石畑 # 組 加盟の四村

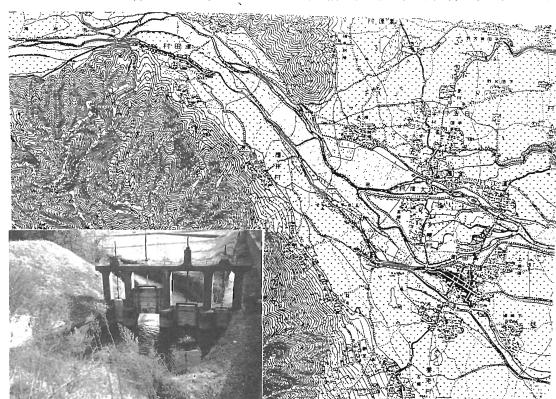
昔のとおり番水で水を引かしていただきたいと願い出て なり、 井井 との 不足し、 ようになっ く山 水口  $\Box$ 右の 田井組と に番人を置い 几 組 番 順 は 田 石畑井 除序に定 が 水のきめも止まってしまいました。 Ш 桜井両: 井 Ш 田 沢 Щ 組 H 井水取水口 間 田 田 、組の高千百余石は天水を待たなければならない「井水の下に堰留めを作ったため、 もり水もなく から 井水 O) 村井 井水 御百姓は農業を続けることができませんので、 まいました。 井論があり、 て水を引いてきました n 水 下に堰留めを作っ 0) もり水を引いていましたが、 の下に定められ、 石畑 弐番 五 番 井 このため少しの照りでも用 組 その結果沢田 乙坂村井 石 は 畑 村井水 山田井組 が、 水 Щ + と番水をきめ 石畑井組 田井組と石 六番 桜井両: 年前沢田 桜 今度は桜 は 井 田 井 止 加井 水の 村 村 村 水が む Ł 井 ま 組 取 井 水 水

限を左のようにき 延享四年 役所の承認も得ています。 年 七四七) め 石 畑 石畑井組で 竜泉寺、 は 上方の各村役人が連 加盟 各村の井高 と刻

畑井組井高并刻限定之覚

兀

三番二日三夜 H  $\Box$ 夜 夜 高五百弐拾八 百弐拾六石 百五拾四 石 石 余 余 上方村 龍泉寺村 石 畑村



現在も利用されている用水路(沢田の村東)

広瀬川筋(明治24年陸地測量部 測図)

五番半 番 平 В Ė

大畔 高五拾石余 高弐拾五石余

桜

并村

橋 爪

村

組

樋に改築した。

明治三九年(一

九〇六)一二月三日、

石 加井

五 Ξ 市

村

上. 七拾七石余

高

已

夜

とさこさ谷の新堀埋 内済証文、  $\mathbb{H}$ 宝曆元年 井 その 組 七八五) 他 の井水堀堰場所に 養老町史には、 (一七五 文政七年 石畑井組六ケ村の内部で起きた番水の 一立ての願書などを載せてい (一八二四) 橋爪村他八ケ村から小山 安永九年 つい ての論争の内済証文、 山田 (一七八〇) 宇 H 両 ます。 井水の [溝筋 石畑 天明 0 もつれの 井 普請定、 井 組 水堀 五年

Ļ

L

## 筰樋 (ささら Ų 集水暗渠

小なる箱樋を伏せ引水 天正八年 業の欄に左のとおり記 出をしていますが 利組合は中部建設局 七)三月、 昭和四二年 います。「本用 その後寛 河川法による届 〇 五八 石畑井組 永 九 水は  $\bigcirc$ 事 水

**筰樋を埋め、** 

小樋を大

一六三四〕

Щ

底に

た水 用

を樋

管の

取

機の操作



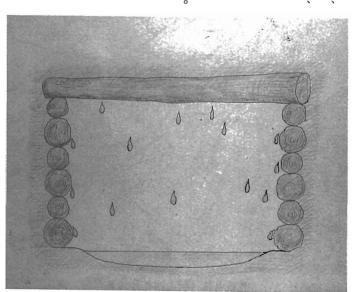
現在の筰樋からの取入口(沢田の村東)

して 事審議 方自治法第 水施設の管理については、 水利組合を設置した。 四 事業の施行に当っては、 たが、 の際、 従来の作 暗渠をコンクリ 五日市部落は水利権を破棄した。大正一三年(一 七四条により、 昭 和三四年以降は石畑井組独立の水利組合とな 大正一 村長 昭和三三年 水利委員会を開催して協議決定 〇年 (町長) (一九二一) ト集水暗渠に改築した。 (一九五八) 迄は地 が水利委員を選任 暗渠改良工

用

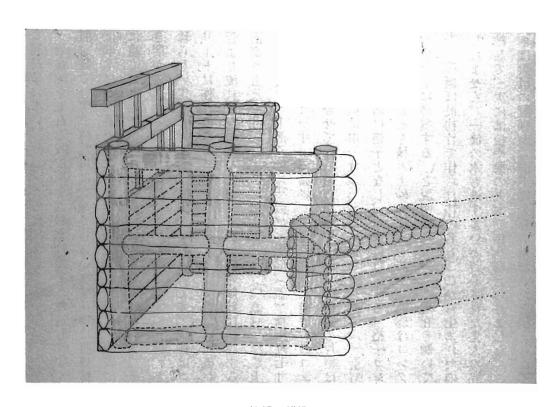
ともに変りな か か 事業としては んが また一 が 11 61 区域 がいい 面積 貫

河川 集水暗渠を利 は 水方法として を行っている。 から 河 Щ 敷の が取

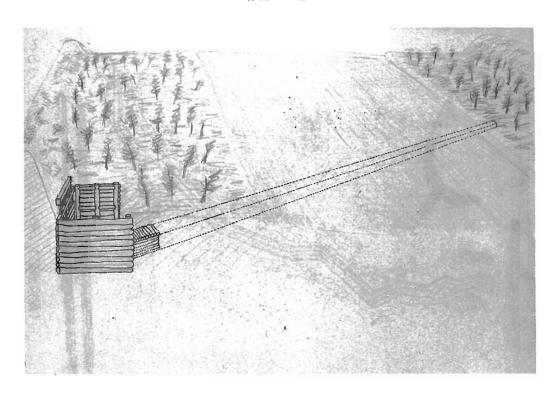


して水稲栽培

筰樋の断面



筰樋の構造

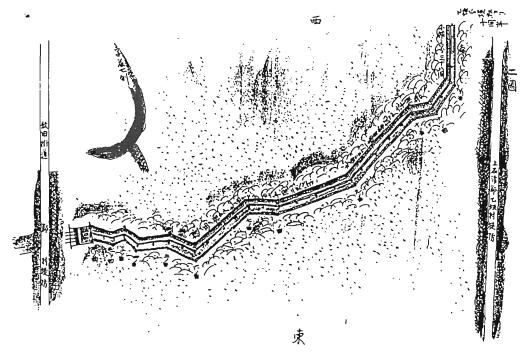


筰樋の全体図 (山幡数男教示による)

水利紛争はない。」により取り入れて居り、他の水利権者との間にも特記すべき

すが、 ①三以)縦二尺一寸(O、益以)厚さ八寸(O、盂以)のコンクリ きは大垣の殿様から御下賜金をいただいたと伝えられていま 結晶で、次には桧や栗の丸太で作り変えられました。このと す。筰樋は最初竹で作られ筰の名もここから生まれたのか 窓を四ケ所あけ格子となし、川底に敷設する。 管より流れに左岸寄りに向って四五度の傾斜に敷設する。 珍らしい工法を考案し、施工しているのです。 照が続くとすぐ枯れ川になってしまいます。 しれません。一滴の水も逃すまいと苦心された先人の智恵の 寸(0、尺點)下部八寸(0、齒點)上部(蓋)横六尺七寸(三、 面高さ五尺一寸、(一、壼髯) 巾二尺一寸(0、盍髯)厚さ上部六 リートに作り直されていますが、「その長さ四五四・五旨、 き間から落ちる伏流水を集めて用水路に流す「筰樋」という は取水口が一番下流にあったため苦労も大きく、河底に四 ート板を組合せて作る。しかし中心部一○○㍍の片側は、 に組んだ丸太で作った長さ数百片のトンネルを築き、 ンクリート板に巾一寸(0′00㍍)長さ一尺八寸(0′壼㍍)の 板を平に舗塡する。」と説明されていて、 トの前は転石を積み土砂の流入を防ぐ、 扇状地を流れる牧田川上流の水は地中へ浸透しやすく、 大正末期現在のコンクリート製に作り直されるまで、 底部はコンクリ 現在も働いてい 特に石畑村井水 現在はコン 格子コンクリ ・その コ H

るので、その一部を紹介します。(稲葉弘蔵)牧田川の伏流水を集めつづけました。幸いに、図が残ってい



堀幅一 丈三尺 深三尺組洪水ノ 跡

渕瀬変換スル砂特別高低アリ

其ケ所ニ随ヒ一丈内外モ堀揚ルヲ

好トス大同小異所々ニアリ

立作栗材 長四尺 伐口四寸ノ杭

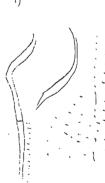
末口ヲ三角ニ尖シ堀 ノ両脇ニ打モノナリ

ナスモノナリ 木ノ長短不同 桁ハ末口四寸ノ檜材ヲ以鎌継

中桁杭同上

蓋筰檜真直ナルヲ撰ミ 長

杭中桁ノ上ニ並ベノスルモノナリ 丈一尺末口四寸ノ材ヲ以両 脇



木材の継手の 容易に引き離れないようにしたもの。 方の 材の継手の末端

(広辞苑)

が逆に広がっていて、

註

鎌 継

三図

押ユルモノナリ樋口ハ石籠ニテ押ル 甲蓋ノ筰ユルガザル為ニ柴石等ニテ

四図

大雨洪水ノセツ自然ニ石砂ヲ流シ込

堀口埋モ レテ原、 ノ砂河ト成モノナリ

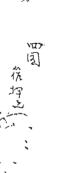
樋口 ノ押エ 籠 顕然

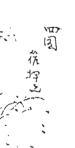
北堤防 上石津郡乙坂村分

南 堤防

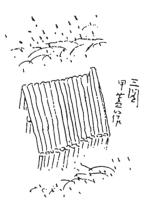
何郡何

村哉











中に、 が、 も流 せきとめ水の自然流入による用水取り入れに頼っていました められた水が流域住民の生命の綱として田 ましたが、 る木で組んだ井堰を設けるなど水の取り入れには色々工夫し 石を敷き積んだり、 2昼夜の でも灌漑用 牧田 直さなければなりませんでした。こうして粒々辛苦の末集 水 栗石や砕石などを詰めたもの。 日. 量が時として充分でなく、これらから取水してい 川以外に用水源として利用された金草川 外にも取水の 別 B なく続け 照りで水位が低くなると、 洪水の度にこわれたり、 水は不足になりがちでした。ここらでは、 られ ため多くの井堰が作られていました。 蛇篭」(竹で円く細長く粗く編んだ篭 ました。 初期 流されたりして新しく作 は電 それこそ命がけの勤労 や 「いのこ」と呼ばれ 骨車を、 畑を潤おしました。 小畑川など 寛文頃 川を る地 大

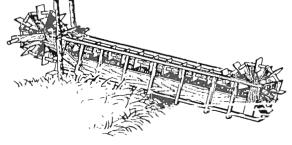
が

b

は足踏水車を用いて水を汲み上げたのです。特に多く用い

から るまで続きました。 られた足踏水連 ていましたが、 用の 水口の方にかけ、 は、 この苦労は昭和になって機械用水が普及す 竹を二本立てて水車を結 人がその上に乗って踏む び 0 け 仕掛 Щ にな や 池

ていただいた民具の中にその部品 ぶ遺品として養老町の民俗資料収蔵庫に大切に保管されてい 竜骨車は 「りゅうこし」とも呼ばれ、 があり、 笠郷地区から寄贈 先祖のご苦労を偲



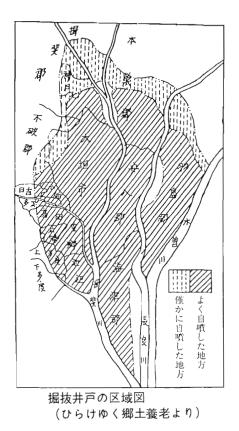
竜骨車 世界大百科事典(平凡社)より



足踏水車 大垣輪中調査報告書より

## 3 掘抜井戸と株井戸 (ほりぬきいど、 かぶいど)

北方、 地方一帯にひろがり、 たといわれていますが、この技術が輪中に導入されたのは寛 掘抜井戸は天明二年(一七八二)大垣の蒟 ているため、 粘土層と粘土層との間に、 水層となっています。 た。 い水が、 礫 「南濃 一七八九~一八〇一)頃とみられ、 井戸は大たい北は浅く、 西方の山麓から地中に入った水が、 砂、 豊富にしかも簡単に自噴するため、 帯の輪中地域は沖積平野で、 井戸を掘ると地下水は自然に地上にわき出ます。 粘土などが幾重となく層をなし、 この層は北方から南方に傾斜しており 全国でも有名な自噴水の地域になりま 水を通す砂利層が幾重もあって帯 南にいくにつれて深くなり 清浄で夏冷たく冬暖 地下数百片の深さま 弱屋文七が考案し 絶えず地下を流 水を通さない たちまち西濃



に役立ちました。 分かれ、 大別して「浅井戸」と百間掘りとも言われた「深井戸」とに 生活用水として重宝されましたが、 灌漑用にも大い

定を結びました。この制度を「株井戸制」といい、 樋門の費用を負担させたり、 てしまいます。 い井戸は掘ることが出来ませんでした。 新らしく、 掘抜井戸所有者には鑑札を渡し、 然し上郷での掘抜井戸の普及は、 (悪水)をいっそう溢れさせ、 みだりに井戸を掘らない。 排水機の無かった時代、 井戸の本数を制限するなどの約 稲やその他の作物を腐ら 井戸の現場に標木を置く。 土地の低い 下の村々は上の村に 例えば下笠輪中では、 下郷にたまり 許しのな

水

==; もし隠し井戸が発見されれば相当に処分され、 めること。 また直

=

Œ 必要上どうしても井戸を掘りたい時は、 定まっ た金額を支

抜井戸は二十七株 などを決めています。 天保一一年(一八四〇) 上之郷村の掘

之郷村二十七株と 大野村二株

六月、

ありました。

(一八六五)

笠村三十二株、

舟付村十七株、

(ロケ島) 掘抜井戸

<del>- 67 --</del>

駒野新 計十一の 報告されていますが、 保年度 田 無株背き井戸が発見され、 規定を相守るよう、 現南濃町) 釜之段各村庄屋宛に詫び状を入れてい このとき別に栗笠村に十、 下笠輪中各村役人から小坪 直ちに埋めると共に、 下笠村 新田 天

一、在来井戸の その翌月、 改めて次の申し合わせをきめました。 十年毎に改替する。 、持主へ 鑑札を渡す。 舟付、 栗笠、 下笠の四ヶ村は違反の 但し井戸一つにつき鑑 ない 札

毎年正月中 四ケ村立会の上背き井戸 がない か 巡回吟 味

井戸 水を別の所へ引い 背き井 届 改 け出ること。 埋 8 戸 順 めこむこと。 があっ つに 村の節、 つき年々銀 た場合は、 たり、 出勤料 右の 金子は輪中で預っておくこと。 分水したりする場合も必ず庄屋 匁ずつ負担する。 過料金三両を出させ、 雑用代の内金として渡すこと この お金は 輪中立会

四

三

Ŧ,

の村々でも井戸は制限され

例えば有尾村で井戸

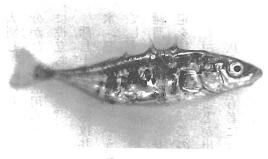
は三本

株井戸鑑札 (笠郷小学校蔵) ました。 水は川水を用 は許されず、 江などでも同様井戸 大場村では掘抜井戸 江月 生. 活用 祖父 7

は制限されていました。

### 河間 かが

トヨ科、 端で自然に湧き出ているのが河間で、 和四〇年まで年貢三俵を払ってい される外、 地下帯水層を造っ 相川などの水は した。例えば、 ていました。 西濃地方には、 イトヨの一 巣を作る珍らしい魚「ハリヨ」(とげうお類) 飯 扇状地 別に 田村では字田 ています。 ^と湧く清水は用水としても貴重な存在で 亜種) 河間 の所で深く地中に浸みこんで、 などもい と呼ばれる泉があります。 この最も浅いものが扇状地 村の河間から用水をとり、 ました。 て、 洗いものなどに利 つも美しい水 河 間は 町 西部 が湧 牧 0)  $\mathbb{H}$ 昭 地 用 末 Ш





美しい水が湧いていた河間 (小倉)

域に多く出ていました。

#### 5 悪水の 利

た。 島田 上流の松の木  $\mathcal{O}$ もらうことは好都合でした。 水に非常に困っていましたので、下流でこの悪水を利用して たいという場合もありました。 いられていました。 ましたが、 僅かな期間だけで、 何れも現大字高田内の小字)で年々溜りがひどく、 両村の悪水から用水を取っていました。 多芸輪中の中でも比較的上の方に所在してい 中内の悪水は他 船付、 そのためには少なからぬ代米と、 東岩道 中 起、 ただ悪水を下地の方で用水として利用 2の輪中を通過させて貰って落されていき あとは悪水として滞ってしまうのでし 道仙、 西岩道などの各村は、 然しこの水の需要も田植期ごろ 治郎三、 前掲享保六年文書にあるよう 蒲原、 厳しい この島田悪水は、 丑墳、 金草川と押越 た上之郷 五郎右起 制約が強 その排

#### 6 水番

け の番でも油断をしていると、 先きに入れようとする人がいるので、 ればならない苦労もありました。 個 々の 田 へも水を入れるには順番がありました。 水口をとめてしまって自分の田 夜も寝ずに番をしな 然し 取 水

### 7 雨乞い

61 歌を記し、 田村五社神社 郡志、 の記録には、 町史にも収録されて、 寛政二年 (一七九〇) 古老の中には今も 0) 雨

> れています。 は細々として枯れてゆ 歌を覚えておられる方もありますが、 く田畑を前に必死に祈る思いがこめ 昊天が続き、 でん 用水

も細々と宇田樋の水も絶えくへに、 つ、さりとては又あめが下、 雨を乞う、 姓のなげきいかばかり、 寛政二ついぬの年、 寛政二年雨乞歌」 無理もこまりの雨乞に日のもとなれば照りもし (養老郡志による) みな月半ばに旱りあがり、 ながのひでりがくるしさに氏神様 神も感応ましまして、 多くの田畑は枯

れい Щ

たみ、

田

0 水

百

(--)

はや に黒雲たちおおい、 神 i) 時 ければごりしょうで、 ちより神さまへ、 13 みは日にまさり、 絶えきりて、 は めぐりて田畑まで、 々ふりしきる、 青々生いしげる。 めぐみぞありがたき。 ふりしも御当社の、 田畑 氏子う うるお 雨乞か のい 雨は 空 作 Y可事



五社神社(宇田)

田

細々と、

えだえに、

雲まい下り、

お慈悲の雨は千早振る。

俄かに黒

らず、 1+  $(\Xi)$ や又ふる雨 氏子のなげきをあわれみて、 てたまわる神慮なり。 弦に寛政 は 成の かはりかみもたえ、 おすずみさま(住吉神社 年、 六月半ばに照り上り、 龍神たちも納受あり、 雨をいの りのかしわ手に、 0 みさらしを 棚織ちかう雨 雨乞すり S

法螺太鼓、 あ 神 (六) 御 (五) 御名を幟にかきおさめ、 l, (四) も次第に細くなり、 色めきて、 13 あり わ たみ苦にせまり、 Ł 前へ れみて、 御受納ましくくて、 追々雨をたまわれど、 段々ひでりがつづく故、 なる神月の半ばより、きょうまで雨のふらざるに、 て田 雨乞えば、 五穀のみのりもます~~に、 畑まで、たつやみどりも青々と、臥したる千草も 神のめぐみは遠からず、 神の恵みの一雨をしっ 氏子救いの神慮にて、 作りの 氏神様へ雨を乞う、 氏子集りひびくくに、 龍神たちもしろしめし、 いたみも多き故、 地のうるおいも日にかわき、 作りのい ぬれてかえろよ神 ぽり願い奉る。 たみいやまさり、 其ことわざに龍 利生の雨や折 神の恵みを祈りけり。 雨をね 々願う雨乞を 氏子の Q 0) が 作 難儀 井水 に湿っている 五社 神の、 'n 庭。 0 0)

らせたまえと神様 ひでりがつづく故、 は これ~~ごらんぜ御らんなれ、 なげきは日にまし夜にせ たませな、 作りも青々生 へ、おして願いし雨乞も、 多くの 氏子の まり、 l, 田 茂 難儀 畑 ŋ か かへ 吹きくる風も心して、 12 雨のねがい 人の心ものびやかに、 りみて、 たみ、 0 雨乞いそめて 幟 しっぽり一 の数と諸共 通り、 長

祈

নীয়

I)

(-L')

きょう迄に、 れてかえらんうれしさに。 最早七日 一の願 納 め 長の日 照もきょうば か ŋ

\$2

氏子すくいの一雨を、是非しっぽりと願うなり。 恐れず下とかみ、 (八) 七日のあめも乞いおさめ、 はるかに似たれど神力、 又もやねがう雨乞は、 なうして外はなし 神 :慮も

絶間、 お屋根 といのるなり、 誓のい やしなうてだてなく、 (+)をしたいし人心、たとえん方もなき雨を、 (九) 「上方の雨乞 ぬ天地の変化なり、 んこと、何とながめていらりょうぞ、 がつほのしみづに黒雲さがり、 諸神の加護や天とうの、 とてもかくても御利生の、 いまだにつづく長ひでり、 日にまし日照のつづく故、 なしに、 に金紋かがやけり、 なびかり、こうばくじゅ大の一 神力応護 まず神前を見奉れば、 五日の風や十日 是迄精々作りたて、 0) 龍神たちも寄り集って、 雨たまわるや、 慈悲仁愛のめぐみにて、 数多の河水たえきりて、 あらん限りぞ願うなり。 作りのいたみかぎりなく、 清水をまきあげ 0 迚も此上凡力の、 やしろの作りは瓦破 雨を、 雨が、 今しばらくに枯れ 此神様へ雨乞すれ ふらし 下てる日 空に黒雲 雨ふらす。 めたまえ 元来弘 のひ 及ば 作 雨

3 稲 しい土地であっ 作の用 上方村 . 0) 綱としていた番水も少くなると村中の者が神 水も不足し、 (五日市 て 村  $\exists$ 西 それこそまことに死活問 北 早り続きになると飲 附 近 帯の 扇 状 料 地 水はもとより、 は 題 昔か 社 でした。 ら水に乏 の境内に

身延山法主寂照院日乾上人が祈雨された霊場の事です。 見大菩薩をお祀りしましたが、 の神 そのお礼に宮山に何百という灯篭を大の字形につけ、 らも見物人がわんさとおしかけ、 りをやめて村中の者が日中に宮ごもりをするようになりまし に祀る弁天さんまで登り祈願をこめました。後年はこの 集って一心に雨乞いをしました。 こうして村人の祈願 治 語がものすごく並んだということです。 御 五年 編笠姿で踊りあかしたといいます。この日は近郷 (一八八二) 村中の男が大幟をおしたて、 が神に通じ十分の雨をいただくと、 養老公園に妙見堂が建立され、 此所は寛永三年 踊りの中心の境内には奉納 いよく 深刻さを増すと神 (養老町史より) 上方山 (一六二六) 老若男 頂上 Щ 妙 か 登

は甚だ盛んであったとのこと ため竹生島弁財天の影像を 爪厳島神社は文久三年 祭礼当日は井組 人々が参集し、 岡山頂上に安置され 祭式 七ケ 八六三) 八月二六日

勧請し、

村各村の ました。

様で、 字田などにも祀られてい 厳島神社は外に 神伊 弁天さんと慕われ、 都伎島神は水の神 上方、 ・ます 瑞穂 今



白鳥神社 (上方)



厳島神社 (橋爪)



弁天さま(宇田)

も年々お祭りが続けられています。

をお供えして村人全員がお籠りをしました。 雨乞いには代表が山 幣を納めると、 乞いの祈願をし、 も雨が降るまでお祈りは続けられました。 ていてこれを受けとり、 で帰ってくると、 る人が選ば 揖斐郡の 多度神 0 社 れ 山奥の夜叉ケ池の龍神も篤く信仰されていました。 の雨乞い 三人~五人が一組となって第 一般村民も全部集まって必死に祈願しました。 途中三~四ケ所のお宮に次 金銀黒の御幣を頂き、 頭の池から神水をいただいて帰り、これ は I) 十五人~二十人の、 レーして最後の組 これを捧げて駈 七日でも八日で の組が待ちうけ が村の氏神へ御 組が神社 丈夫でよく け で 足

事を休んで喜こびを分かち合いました。 待望の雨が降ると、「雨喜こび」と言って、 雨乞いは村全体 村中一せいに仕 0 大

#### 夜叉姫伝説

(安八郡神戸町発行)

多く

滞

稲 0 の

などを

腐ら

せ

産

力を低

心水と

う

は

輪

中

0  $\sigma$ 

中に降

水などによる水が不必要に

悪

水

停滞

要因

\_ と そ

影

不

甪

0 溜

水をさすのです。

な

ぜ 生

悪

溜

るかといえば、 下させる場合に、

その昔、美濃の国神戸 (現在の安八郡神戸町) に郡司 安八太夫という長者(石原伝兵衛氏の先祖)がいてたく さんの田んぼをもっていた。

ある年、大変な日照りがつづき安八太夫をはじめ多く の村人たちは空を眺めて途方に暮れていた。信心のあつ い太夫は、これを救おうと毎日お宮にお参りして願いを かけていたところ、ある日、かわききった田んぼで、ふ と、小さなへびに出あった。太夫は、このへびにむかっ 「お前が雨を降らせてくれたならどんな願いもかなえ よう」と一人ごとを言って家へ帰った。太夫が家に帰る と不思議に待ちに待った雨が降りだした。

雨は一日中降りつづき、田んぼにたっぷりと水がたまり 農作物はみんな生き返った。村人たちは小おどりして喜 び合った。その喜びも束の間、雨の翌日、へびは、山伏 姿になって現われ太夫の三人娘のうち中の娘を嫁にとつ れて揖斐川をのぼっていった。泣きながらつけた紅、お しろい、水鏡にうつった不びんな夜叉姫の面影を太夫は 忘れることができなかった。

その後、安八太夫は、たびたび夜叉ヶ池を尋ね、龍神 となった夜叉姫の姿をしのぶのであった。

こうしたことがあってから、日照りがつづくと村人た ちは、紅、おしろいを土産に、龍の池、夜叉ヶ池に祈り をささげるならわしとなった。

いまも美しい伝説として語り伝えられています。

が 0

げ

b

n が

ます。

先ず

加

0

原 0 水

として

降

水

P

河

뱹

外 あ

13

堀

抜

井

戸

0

普

及

か 惠

あ 水

r) 増

、ます。

堀 大 排 が

抜井戸

は は 難

生活に

水 0

0)

供

給

増加すること、

=

悪水

除

が

困

なっ

たこと



夜叉ケ池

七 役

九

四 収

詫な

証

札き

が

有之候

以上

^

入

史に

8

b 0)

れ

7

6 文

ます。

村 町

酒

井

藤

右

衛門

八月二日

郡

奉

行

(FI)

をあげ た が 13 0 行事ですの 必要で、 をするに

> 兀 脇 家に は 郡奉 行 か b 0) F 乞許 口 申 渡 状 が 残 z n 7 Vì ます。

で、 12 親 か た寛政 類 0 そ Ł たこと 連署 0 寄 年 が 会 7 誾 13 顥 上方 え雨乞仕 村 度之旨 龍

泉

寺

村

照

毛

相

申

故

弁

才 申

天

願 В

之

趣

聞 付

届

候 立

此

段 痛

双方え御

渡

切な行

事

出

席しな

なり、 人

排 水

游 水 井 出 13 次 も大 13 地 戸 る 水 0 輪 0 役 中 制 は ん役立 度が 悪水 割を果たし、 堤 0) ない 出 ٤ なっ ちま 来まし ときに 7 水害 たがが 低 は 部 0) 後背低 程度をやわらげ 集中することとなり、 昼夜をわかたずどん人 湿地 などの ましたが 低 地 前 帯 揭 輪 が 0

竜 脇 富

夫所

が繰り返され、 くしなければならなくなり、 及ぼします。 重なって河床を非常に高くし、 になり、 が築かれると、 例えば牧田川沿いの そこへ牧田 大雨 そこで水害を防ぐためにはどうしても堤防を高 河床は益々高くなり、 0 時 には河川に Щ 河 などのように流れ出た土砂 水は輪中の外だけ 土砂の堆積と堤防のかさ上げと 水が溢れて少なからぬ水害を 所謂「天井川」になって 今の南直江)では、 危険は増加する一 か流 が年々れ 方で 牧田 しま 積み

渋し かえ、 年 稲みな腐って大へ 高くなって年 村は両方に牧 もつかってし 様になった水に幾 物は腐り、 業を続けることも難 川の水害がひどく、 人々は非常に困 は 間なく、 い状態で、 一七八七)には、 米が非常に高価 ています。

天明七

年 か

> 祭りでも太鼓もたたけない位遠慮していました。 米はとれず、「 する者が多くなり、 と痛切に訴え出ています。その後現 りと、道ぐろなりとも拝借して小屋掛けをさせて頂きたい 人の切なる願いでした。 祖父江村でも排水は困難で、 その上 念になって高渕を喰い抜きたい」というの 住む家もありません。 南を本郷 悪水を通させて貰う上笠村 北を新 一年おきか、 在 屋敷とい の牧田川 それで堤防 一年おきにし の北岸に移 ました。 0 が古 上な か

よう」 蛇持村でも、「十年に一度ぐらいはよい年もあるので我慢 と言われ、 悪水の被害に耐えてきました。

か言い は激 回堤 ためた「鍋ー 大きい輪中では、 しい

またその

Ш Ш

底 をか

田

高七十

右

0 絶 が

更に当

Z

水害

除 (よげ

分別月

屋

敷は池

F 作

ま

て農

入れ 防ぐと共 は出来ませんでした。「除の草は刈らないようにした」 を目的としていました。そこで同一輪中内で高さの違 さについて堅く約定を交し、 じて圦樋を設け排水していましたが、 袂に小石をいれて行き、 られて 形態の輪中堤は外水に対し、 伝えられています。 対立の原因となりました。 おり 除 はがね」と呼ば 昭 0 和五 高さをも決めてい 所 々に内除、 年の洪水で決壌 除の中心部は粘土と石灰で堅くか 除の上へそっと落して通っ 勝手に高くも、 れる芯が作られていて、 除は同 小土手を築廻し、 まし 上と下の村では、 この た。 寸 輪中 前 小堤は除とい 低くもすること 0) 鋼は本堤 内の内水処 杭 瀬川 必要に応 漏水を う村で 除の高 堤が、 防にも わ

]]] ļ 内配輪中

外廓輪中と内廓輪中のモデル、 この小堤 が除と呼ばれる (安藤萬寿男著「輪中」より)

鋼 のおかげで助かっ (一七〇九) たのも記憶に新らしいことです。 大塚村と直江村は、 牧田 Щ Ш 底

時には村の中へ水が入ってくるので、

牧田川

沿 ば

出ました。

高くなり、

大塚村に多い

湧

水が排水できない

かり

か 0)

には

宝永六年

又大坪村も色目川 土地が低い上に牧田川に近いので、 れるので水落ちをよくしてほしいと願い 六ケ村を囲う堤を作っていただきたいと願い 飯 が 積 油りく 祖父江、 、ねって、 飯田、 Щ 少しの出 の水行をよくして貰う 飯 積 出ました。 水でも悪水 字 田 出ました。 O) 六ケ村は が

は

き多芸郡内八ケ村が十五ケ条の協約を結びましたが、

上設計し

百姓自普請

による工事を許可

しました。

その この 整し

屋両村は内法一尺五寸

(0、四五以)

の樋管を伏せ、切り落した

解決できました。

飯

積村は内法一尺二寸(0、景景)、

直江、

金

笠松代官所はよく調

查、

た

ときは笠松の役

人が仲に立ってくれて、

表沙汰にならず

が水除堤を飯積側

元禄五年 厳しく、

六九二)七月四日の洪水で、

金屋、

直

江

面

村

7

へ切落したことから紛争が起きました。

これらの工事につい

いに堤を築 出 水の 、大坪村、 その他細い点まできめていますが、 修 飯田堤防は三ケ村御 分もない .覆できるまで二尺(0、六片)低くしておくこと。 が、 蛇持村の瀬替えは、 役人も署名しています。 高さは室原堤より低くしておくこと。 堤 飯 **城積輪中** 村の中を通すならば何 堤 特に除の高さについ が不丈夫であ るの 0)

申



鼻橋附近の除

除も夫々分担して築き直 て樋管を開き、 水を通すよう約束しました。 今後洪水の際には双方から出

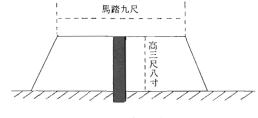
## 定杭 (じょうぐい)

てい た約 除が取り へ水が流れこみます。この対立の に述べましたが、 ません)。 ます 東が ました(内四本は堀り 接した村にとって最大の その中の二本には左の文字が彫りこまれています。 壊されましたが、 「定杭」です。 残る 縦 七七年人、 高ければ上の村に湛水し、 本は高速道路の下になったの 横 最近土地改良の際、 出されて多芸公民館に保管され そこには五本の定杭 四から 関心 和解調停のために慣行され は除の高さであることは 角の石柱で、 低ければ下 直江、 が埋 か行方が 高さは 飯 めこまれ 積間 わ 村 0

床 除 高 ]]| 相 南 成  $\mathbb{H}$ 時 面 ヨリ 其田 高三尺八寸 血  $\exists$ 1) 量 出 萬 馬ば 踏光田 九尺



除から掘り出された定杭 (多芸公民館蔵)



さの基準は直江

高くも、

高さを示し

これ

上図石柱の上面

か

除

除と定杭(直江)

落としました。

根古地新田

根古地水越定杭①

(水越定:

同定杭②

定杭

落江

が、

その後根

古地

開墾を願

は寛永

八年

さまで、 れました。 にある第二 まで水が来ると、 村との間に約定が を設け、 の東方に 土を除くとき 水を新田 除の上部の 根古地 の定杭の この上点 「水越定 村境 八幡 結ば 7 側

わ れ



根古地水越定杭

根古地定杭②

(宝暦九年―一七五九、約定)高さがよくわかるように、除の中に板が敷いてありました。

しています。 住屋が仲に立って話し合い、双方納得の上内済証文を取り交り及び悪水落が論争となり、祖父江、綾野(現大垣市)両村明和八年(一七七一)大坪村、室原村境の江通り、用水掛

坪村ヨリ修覆可致候、其節室原村役人立合可申事リ差留番人付置可致候、尤右差留場所後年損シ候節ハ、大当時之道ヨリ七寸五分低ニ定杭致置、出水之節ハ大坪村ヨー五寸之所、七分三分ト相極差留、高堀底ヨリ壱尺七寸五分、室原村吉十郎屋敷前江通ニ差留之儀、堀底ヨリ道迄深弐尺

村境の道路に圦があっ

たり、

舗装すると高くなるというので

い最近までタール舗装のままになっていた所もあります。

をはさんでの堤の高さについても色々制約がありました。

ける場合なども、

その高さは昔の除の高さに整備されます。

その高さは水利慣行として今も生きており、

新しく道路をつ

定杭はなくても除の高さは両村で十分協議してきめられ、

今では杭はありませんが、定杭という文字の残る貴重な文

例

川をは、

小畑川の飯

積

(幕領)

側は、

飯田

(尾

州領

側より

堤を一尺(0、三に)高くする特権があったということです。





現在も除の働きをしている宇田、飯田境附近の道路

# 4、悪水落江(あくすいおちえ)

が 拓; 水のため、 明 かれ、 弐腹の落圦を伏せました。 暦二年 また西岩道村ら六ケ村の込水及び押越 新しく有尾村堤から下笠村堤三ツ屋前へ新堰を築 (一六五六) 大跡村・ 飯 ノ木村・小倉村草場 心村より 0 新 落 田

ほよげ」で、 口ヶ島村、 堤まで新除堤、 越 村からの落水囲いとしては、 同 新田 西岩道村、 この除堤のおかげで押越村の一部 新江堀を築きました。この新除堤が前掲の「あ 飯ノ木村などの村々は水上の山水や悪水か 下笠村堤外、 東岩道村、 石畑村境 ら守られました。 から押越村の 上之郷村堤外 (字除下)と 大

斐川 は ~ 0 新堀割が築かれました。 には多芸輪中島田村悪水 五ケ村を含んでいますが ひとりでには川 土地より高い の輪中をとりまく金草 延宝四年 ますので、 牧田川、 笠輪中は上之郷、 は川 舟付、 0 (一六七六) 方が輪 伊尾 所を流 輪中 栗笠の 頂 中内 流 'n 揖 下 水 n 12



現在の五三落江(池辺地区)

新田 江とい その中には トメ 南濃町)、 います。 屋川へ排水することにしました。小坪村まで下ると川の水位 出ることが出来ません。 の方が低くなって水は自然に落ちました。 水は根古地、 (小笠原貞信) の落江を築いて小坪村まで落して行き、 釜之段古堤新田 下笠、 根古地新田、 今は五三落江と呼ばれて輪中の水を落しつづけて 釜段、 大野、 の役人の立会の上、 小坪各輪中の境に全長二千六百間(約罕00 栗笠、 の村々は、 根古地、 寛文一一年 舟付、 駒野新田 尾州様 大場新田、 八通の約定を結びました。 (一六七一) (徳川光友) これを下笠輪中落 (現南濃町)、小坪 樋門を築いて津 釜段、 下笠輪中 徳田(現 高須

一、亀ケ池 と 落江に水が滞 根古地新田 から 小 坪 0 新田 との協約 ているときは下笠輪中の 新圦 ハまでの 江ぇ 浚ら え藻苅りを行 人たちで浚えるこ また

えること(下笠輪中内の申合せ)も一切せず、なん時によらず水は滞りなく落ちるように浚のは一切しないこと。また魚取りなど水の滞るようなこと、排水路内を田畑にしないことは勿論、柳、まこもなど植も

て気をつけること(釜段村、徳田村との協約) 笠輪中で修理し、また大水の場合には充分に堤防を見廻っ一、釜段輪中の人々が迷惑しないように、その落江について下

修復が遅れるときは釜段への悪水落を認めない(同)一、大水で堤防が破損したときは水引次第すぐに修復すること、

中内の申合せ)
一、大水のさいは人足を繰り出し、すぐさま防ぐこと(下笠輪

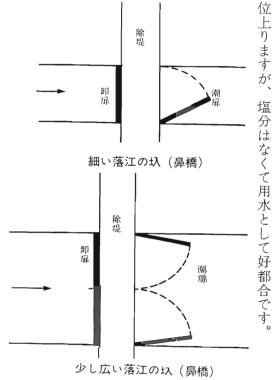
新田 笠輪中 引起米五 ため、 められていました。 があっても、 反九畝拾五歩 築いたためつぶれ ました。例えば釜之段新田へ納めた地代については、 など細い点まで取りきめています。 右の江 大場新田悪水落 石 永 Q 九斗五升、 毎月一 Н 筋 (約六○≧)つぶれていました。 損 除堤の敷地を立会って改めたところ、 た上地 水損 月二〇日以前に必ず納めること」とき 但し反当壱石ずつ下笠輪中より釜之段 根古地新田悪水落江は一 0) 風損 地代は年 早い 江筋、 r) 々下笠輪中 洪 除堤、 水、 この江代米、 から納 所に落ちる 風 圦樋などを の被害) 「濃州下 田畑五 めてい

又必要に応じて用水も取ることが出来て大いに働いています。養老町内には外にも沢山の落江があり、現在も排水のため、

## 5、圦樋(いりひ)

年ぐらいで伏替えしなければなりませんでした。 多くして、 0 うになっています。 にも多くの 水圧に対しても力が弱く 用 水の取入口と落江 これに耐えるよう工夫され 圦 樋が設け 然し昔は木製で耐久力が弱く、 一の末端・ られ、 大きい 必要に応じて扉を開閉出来るよ 悪水の 江川 ました。 出口 0 樋門 は 勿論 は門 而も洪水時 樋の 大体三十 除や落 江

きます。 論逆水を利用 開閉しますが、 に備えて「潮扉」も設けてありました。 を引き入れることが出来ました。下流の方では満潮時 圦樋は逆水を防ぐと共に、 満潮 による逆流は下笠の方までも来て、 して用水を取りたいときは開いておくこともで 逆流の来る時は潮扉が自動的に閉 必要なときは門扉を閉じて 上からの水は卸 水位は じます。 0 扉で 逆流 用水 トメルー 勿





樋門が四つある圦 (鼻橋)

型的 ましたが、 「月の輪」 土手で囲まれ、 い逆流の来た時などに備 なもの ました。 と姿を消 に設けられ と呼 が 金草川にその つ残ってい 現在では次 ば してしま 洪水や た圦 れる円形 樋は 激

ŋ

ます。



鼻橋の樋門① 卸扉のある上流側



潮扉のある下流側





記念のため残されていた蛇柱(大跡の北)

### 6 切り 割り、 落垣、 蛇柱

の圦が集まっ

てい

ました。

池附近の鼻橋には六

艘

だけに る飯 昭 飯 和 八年 .昔の面影を留めています。 木輪中堤がありましたが、 木の 村東から大跡を経て、 今は取払われて大跡の 下笠堤外八剱の 南方に達す 北

さずに通れるよう堤防の一 に水が入らないようにするため、 その時の 切り割り て通したので、 」は道路が堤防と交差するとき、 蛇柱 九三三) 堤の北側 が記念の 県道が出来たとき、 部を切断したところを言います。 が ため最近まで残されてい ここに「落垣」 出水したとき、 この 堤防を乗り を作り 輪中 南 側の大跡 -堤を切 ´まし まし



う十分な措置が必要でした。 開 ぎと新田 古地 めこむ溝を彫 悪水落にも障害を生じない 発者は新田内は勿論上流村 寛永一八年 新田 用排水事業推 が開発されましたが、 開 発 につづき、 つ (一六四一)の た柱 進の主体 が蛇柱で 次ぎ次 です。 ょ 根 々

大垣領、 奉行説 又左衛門に対して、 示が与えられています。 示すことの出来ない所も多くありました。 田 文左 高須領などが入り組んでいて、 衛門 から釜之段新 堤、 所が多芸輪中には、 悪水落ち等の施設について詳細な指 田 万治 の開 元年 発主佐 領主としての施 (一六五八) 幕領、 野紹益、 尾張 大垣 本阿 策を 領 弥

又左衛門に対し、 根古地 '排水障害が起きたとして、釜之段中堤を切り落とすという 寛文元年 お またこの よび 新田三ケ 尾 (一六六一) 揖斐川洪水によって、 州 村は排水すすまず、 領 開 下 高須領有尾村、 笠 発に際しての約定を守るよう要求しまし 舟付、 栗笠、 有尾新田、 釜之段新 大野 0 田 下笠輪中四 横屋村 開発の 大場、 本阿 根 [ケ村 部 古 地

鎖して水が入らない 板をは ば 切 六七 事件 に領主のちがう村々の排水などの問題については、 人 から五味所左衛門ら二人、 が立ち会い、 がありました。 前 掲 八通の約定が結ばれましたが、 証文に裏書きし、 このことがもとになって寛文一一 高須藩から脇屋金左衛門 証印 してい ・ます。 この時 関係村 このよう などの は尾張藩 年 マ 役

うにするための設備で、

垣

はそこへ

板をはめこめ

を閉

株井戸の約定も別で、 しかし同じ下笠輪中でも上之郷村だけ 領主の違うことが大きな壁でした。 は加盟しておらず、 維持修復にも当っていました。

が主体的に交渉し、

協議して協定を結び、

自らの

力で普請

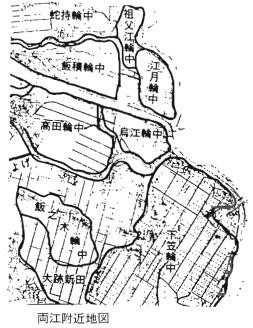
### 8 伏越樋 (ふせこしひ)

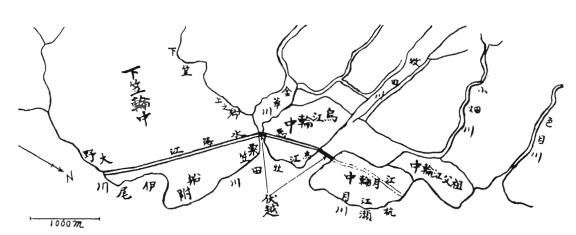
す。 側を小畑川 たとみられ、 をもつ輪中で、 一四~一六四四)に開発されています。 この懸廻堤は天明四年(一七八四) 両江悪水落江」―江月輪中は北側を相 に これより百五十年程前 西 南側を牧田川に 汇 は堤を境にして祖父江輪中に接してい |廻まれていて完全な懸 江月は寛永年間 以前には完成して 頂 杭 瀬川に、 心廻 堤 堤 ま 西

校 畑 ፲፲ があります。 西 0) 側 遊水地 0) 向野地区には約三〇万平方景の が あ りました。 今は築堤されて県立大垣 牧 田 Щ 杭 瀬 Щ 農業高 小

して、 百姓共四 して水落御普請 濃 州徇行記に 田実らず、 五人の工夫を以て、 0 は、 事 過 を願 半は真菰生なりし 此 村は ふとい 前 牧田川に伏越樋を自普請 廉な 、ども、 は水落あしく、 が、 叶な 村民艱難 はざるにより、 卑湿 にたへず 0 地 頭。 に

功績 伏越し、 舟 屋権左衛門、 豊饒の地となれり。 伊尾川へ落す企画を幾多の困難を克服して完遂した江月村庄 担ではなく、 ありました。 此普請は天明四辰年成就す。其以来江月村水落よくなり終に 付村の地を借て掘割、 込 へほりつき、 付、 蛇持輪中 は 悪水落江を烏江村の地を借て掘割、 偉 大野、 大とい 長い排水路を掘割ったこの工事は、 同定吉、 下笠各村の間に取交わされた証文が中央公民館 三二〇〇紅の遠方の大野村まで悪水を導いて、 百姓が自費で行う自普請としては実に大工事で それより両村立合にて金草川を伏越、 わねばなりません。 〕と記されています。二つの川底に水筒を 高田輪 庄屋代治兵衛、 大野村の北にて伊尾川へ悪水を落せり。 幸に江月、 百姓代市兵衛ら四 末は烏江の水落江 幕府や藩主の負 烏江、 両江附近地図 栗笠、 (のびゆく養老町より)





通

両江悪水落江略図

野村境まで、 栗笠村西堤より大 通りを通し、 仕り度き旨熟談 0) 通 烏江村悪水落江 一七四四)出来 へ悪水落候様 一七 匹 伊尾

します。 ので重要事項を抜粋 に所蔵されています

悪水落江筋証文之事

江月村悪水

滞り、

年来水損に及び候

に付、

牧田川

村北御堤に有り来

0

用水樋場所替

水筒伏越し、

烏江 通に

其所二重堤

高さ本堤同様築立

夫れより烏江

村地内に江筋を掘

(大野分) 金草川 牧田川 伊尾川 (下笠輪中) (鳥江輪中) (江月輪中) (舟付分 (栗笠分) 伏越 伏越 両江悪水落江概略図

略

### 略

略 略

樽二十宛、 き事。 に江月 間の杭木五百本、松明五百挺、五百束、三十枚閉の莚六枚、長 出水手当として前 所に付、 所杁近所に小屋建置、 難所出来の節囲方少も差支無き様 明き俵六千枚、 烏江両村より手当致すべ 右二ケ所共小屋に詰置 々定の通り右両 右小屋一ケ 六枚、長二 二十尋繩 油

右江通より上之田面悪水落滞 之細江堀立置候、 水引取差支申候二付、 同様急度差出シ可申候事 此 禿地 両 代米前 側巾四尺 扩 条 用

> 一、除堤番両人附け置き、給米江月、 一、烏江、 ち、 八合以上に相成候は、早速杁戸差塞ぎ申すべき事。 江月両村 悪水落方の儀、 烏江両村より相渡し、常 除堤八合目に限り定杭を打

栗笠村西堤圦亭

一層舟附村、

大野村境目の堤杁扇界、

右 |両所 双方納得の上、

永代相定め候條数の事。

共堤外二重堤、

本堤より三尺低ニ築立て申候。

以来杁伏替

え掛廻堤修復共永代烏江,

中広致す間鋪候事。代鳥江、江月両村より致すべく候、

伏替えの節杁高

略

見届け次第下笠輪中の障りに相成らざる様致すべく候。 りに相成らざる様致すべく候。 見廻らせ、 等閑に致し置き候は、見届次第下笠輪中村々より杁戸差 洩水これなき様急度相守り、 若し等閑に致し置き候は 下笠輪中悪水の障 若 Z

## 略

略

塞ぎ申すべき事。

右之條数相互に永代遠乱申す間鋪候、 若遠乱の儀これあり候

水河穴或我好地提力見一周本面 湖泽之水代女光生经数本 行凡川通上西水為抗性及至及要侵 任子中かり 五江祖東京江西を画 地内にはから後ずから日本様く大村村ならて 行行村死水があるまる水は異ない (養老町蔵) 両江悪水落江証文 べく候、

處件の如し。 天明五年

巳十一月

大言村西及人院に次和湖けるける

判証文双方に所持致 の証文共急度相守り申す 年中(一七四一~一七四 ぎ申すべく候、 はゞ下笠輪中村々より 一七七二~一七八一) 証文並びに安永年中 烏江両村悪水落差塞 後々年の為、 勿論寬保 江

定 吉 (II)

同断

同村庄屋代 治兵衛

同 村百姓代

以下烏江、

栗笠、

舟付、

大野、

下笠村各庄屋などの署名は

(EI) (FI)

市兵衛

略す。 拙者共取 噯 双方納得熟談の上相定候処相遠御座

右の趣、

町

中嶋惣右衛門印

大巻村

江月伏越樋門のあったと

足立元左衛門印

末々迄双方共凌乱 表 書 究の 通 ŋ

為め我等印形せし むる者也。 仕る間敷候、 その

丁未年七月天明七

の如し。 なく候、 仍奥印件

海\* 松\* 村 現輪之内

この工事の要点は

①牧田川通りに新規に改めて水筒を伏越し、

江月輪中の悪水

は烏江に対し江代米を支払っていた。) を烏江地内へ落す。 でに元文五年(一七四〇)に伏越工事が出来ていて、 (注 烏江、 江月との間には、 江月

②烏江村に有来りの用水樋を場所替えをする。

③烏江村地内に江筋を新しく掘る。

④栗笠西堤より大野村まで寛保年中(一七四一~一

七四四

⑤更にこの除堤の両側に巾四尺の細江を掘立てて、 に作られていた烏江悪水落除堤を丈夫に築直す。 栗笠、

大野村の用水引取、 悪水落を良くした。

ということであります。

方法は、 兀 江一一二戸、一○七人、江月七八戸、一○二人。経費の賦課 棄されました。組合区域土地反別は、烏江六二町二反一畝三 間にも新しく約定が結ばれて、 月を組合区域とする普通水利組合が設置され、 明治四五年(一九一二)に高田町大字烏江及小畑村大字江 の割で上の江月の方が負担割合を多く負担しました。 江月五六町二反五畝二九歩であり、 地価、 反別割により烏江は四 従来の契約及び慣行一切が廃 戸数、 一六、 江月は五八八 又笠郷村との 組合員は、

丁未年七月

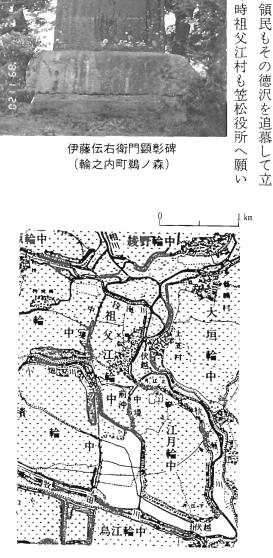
村上只右印

- 83 **-**--

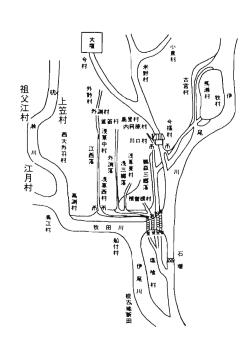
舟

派な顕彰碑を建 てました。 その 時祖父江村も笠松役所

伊藤伝右衛門顕彰碑 (輪之内町鵜ノ森)



祖父江輪中地図 安藤萬寿男作成 |輪中―その形成と推移より。



天明 4 年伏越工事 細川通夫原図 大垣輪中調査報告書より

が、

主は彼

0

功績を追賞し、

願

工事に対する一

部

の誤解や批判の責任をとって自刃しました

伊藤伝右衛門は

地村対岸へ放流するようになりました。

に任ぜられ、

鵜ノ

森に大規模な工事が行われ、

)たが、

模様替え工事が翌五年

(一七八五)

完成し、

根

古

藩財政再建政策により、

郡

奉行伊藤伝右衛門が

伏越樋御用

掛

度は失敗

で大垣輪中では、

天明四年

(一七八四)

大垣藩主戸田氏教

(三、台00余年)に及ぶ堤防によって守られていました。

ノ坪という小字名があり、

その開発は

相当古

13 制

と思われ

祖父江村と伏越

樋

祖父江

村には条里

0

名

残

ŋ

0

相川 数多く

> 瀬 川

畑川

などに取囲まれた低地で

あ

たた ます

0) 杭

)悪水吐

樋

長い悪水落江を必要とし、

出て、 村を通し うようになりました。 同 て貰っ 村字掛圦で杭 て悪 水路を延 この 瀬 川を伏越し、 工 事の 長 Ļ ため、 この 大垣 時 鵜 0) 輪中に入り、 1 庄 森 屋 落させ Я 瀬彦兵衛 て費 上笠

は 明 治二 私 財をすべて費し尽くしたとい 年 祖 父江 村 明 細 帳 0 部 を 転写 わ n 7 て当 V3 ます 時 0 百 村 0

様

子をう か がってみましょう。

水影 路 長四 百 間

一悪水 一悪水野路 長千五: 拾 1六間

路 長六拾六間

地 敷堀弐巾深巾 口間壱三九 弐四迄間尺尺 間間深よ 半四り 尺

同同 小断是 除 ノヽ 大垣 長百三拾弐間 御 領 分多芸 郡 但 上笠村借 両 側 馬高 三四 江料差遣 尺尺 舖 弐間 申 候

堀堤同 断 地 米差 遣 申 候

一上 同社 江海右 長四拾

敷ほ ŋ 口 六尺 六尺

同 断 借 地

一同 同村地内石 長三百五 拾八間三尺

右

同

袓 父江村 7・上笠 村 弐大 村 組 合二御 舗堀 七尺壱 丈壱! 座 候 尺

同同 長四百三拾 八

祖 父江 上 笠 · 大外羽三ケ村 組 合 Ξ 御 座 候

艘 長八間

内 法 横四 尺尺

一 西 大穀地 樋内 是 袓 艘 父江 長 拾五 上笠、 間 多芸島、 入方村 内 法 組 合ニ 横高 九四 御 尺尺 座 五 候

湿部

に目

立っ

て反当収量

が

減

少

農民の中には

他鄉

に出 め

ぎに

出て

「亡失田

となる所も多く

なっ

てきたため

始

B

1

たと思われます。

大垣

輪中調查報告書

(大垣市教育委員会発

是 ハ大垣領村々拾六ケ村組合ニ 御 座

> 一以一壱艘四村地内三艘樋 長 拾 五 間

内法 横高 九七 尺尺

右 同

大約川 大利川 越ノ通 樋森

伊

長三拾壱 間

内 法 横高 弐七

間尺

右 拾六ケ村組合ニ 御 座 候

下に埋 設です。 りました。 間 註 (約奏、四片)といえば、 め 高さ七尺(三、三片) 伏越 サイフォ 極 は 厚 ン 0 V > 働 檜 きで悪水を川の向こう岸へ通 0 横 板 当時としては相当な大工事であ で四 間 =面を囲 **高**以)で長さが三 つ た水筒 を川 す施 底 0

#### 9 堀田 (ほ ŋ *†*=

形の 掘 とによっ ました。 えつけた稲が収穫する前 掘 輪中 堀 0 上げ 高 た部  $\mathbb{H}$ 部の 開 Ö) 61 耕 て水田を高くすることが考えられました。 そこで水田 低湿地域では、 発 田 分に短冊形 地 田 0) を建せ この両方をまとめ を掘り下げ、 ができました。 江戸 全部を耕地として利用することをあ 0) 堀 が残 大量 時代後半、 に腐ってしまうことがたび その ح ŋ 0) Ź 0) 土 たまり 一を他 堀 積み上げられた部 水腐場などと呼 堀 が 水 田 0 掘 部分に積み重ねるこ (悪水) と呼ば り潰れ」 0 n にまし で耕 その ため、 ば 分に長方 n る低 地は 結果 きら あ 植 ŋ





堀田②(横屋)

之儀、 行 地主などの主唱によって作り始められ て明和元年 も高所なみに作物がとれるよう自普請で溝明け 候得ば 西大外羽、 仰付願書」を載せています。 出ています。 には、 低所之分、 上笠の各村( 天保一〇年(一八三九)の「低地不農付溝明普請 (一七六四) と述べ、 大垣輪中より低い高須輪中では、 近年深溜り水にて・・・別紙墨引之通溝明 (何れも現大垣市)名主から、「私共村 に堀田が作られています。 高地と低地の悪水を別々にし、 養老町に隣接している多芸島 た堀  $\mathbb{H}$ は をしたい旨 帆引新田に 恐らく 0 四〇 低所

した。

更に毎年藻刈や「長じょれん」と呼ばれる特殊な器具

間

12

· の 田

が潰れる上、

その作業は寒風の吹き荒れる冬の

鍬やじょれんなど簡単な器具のみを使っ

ての難作業で

立型) とができます。 泥は肥料として有効で、ここにも先人の苦労と智恵を偲ぶこ 活に大切な蛋白源となりました。 かな美しい水郷であり、 と呼ばれて、 掘られ、その一方の端は江川につづいて櫛形となり、「田舟型」 0 堀田が出来ました。 もありましたが、 舟がなくては農業は出来ませんでした。 舟で自由に往来できました。外から見ればのど 小舟は他地区での荷車、 川魚や淡水貝がよく獲れて、 大部分は整然と並んだクリーク状に 堀は細長い池状に孤立したもの 刈られた藻や掘上げられ 今の軽トラックに当 輪中生 (<u>孤</u>

量を確保するため堀田は次第に増え、

養老町でも東部に

定の収 は多

を使って泥上げをしなければなりません。それでも



舟での農作業(横屋)



WINT TO STATE OF THE PARTY OF T	
鷲 白 鳥 室 大 西 蛇 祖 江 上 栗	下大船大釜根根大大田有明大路野附卷段古古場場村——————————————————————————————————

石村 **灶村** 跡新田 附村 巻村 尾村|三間半農業船三十四、 果村 原村─三間三尺農業船十 捋村—三間三尺耕作船拾八 笠村——四間船中五、 笠村—三間耕作船百七十 野村—三間有税船三、無税船六十 段村—三間以下船百十 立地新田 p地村—五十石鵜飼船一、四間未満五十六 71—三間以下有稅船三、同無稅船七十五 石道村—三間三尺藻草船二十 7村—長五間以下四十 \郷村—三間無税船八 物新田— 场村—三間三尺農業船五十一 Ҳ [二十] ──三間半耕作船二十一、四間一尺渡船二、人[二十] ──五拾一石瀬越船三三間半漁船十二 - 二間笹船二百十七 | 一四間四ツ乗船一、五間鵜飼船一、 —民有船舶八 —五拾石積 -四間船六 三間船十二、四間般七 四年多芸郡各町村略誌による各村の民有船舶数は、 —三間三尺耕作船四 | 三間農業船百四十六 | 四間三尺五寸四ツ乗船一、 長三間三尺農業船三十五 三間船七 三間四ツ乗船二四間鵜飼船八、 同漁猟船二 戸数 11 " " " ij IJ " " " " 11 " 11 11 11 三二六 二六九 二四七 ——七 九三 九四 — 五 三四 〇四 四八 三四 五九 五 五 七一 六六 九四 二八 九四 八九

"

良によってことごとく姿を消し、 水郷の風物詩として私たちの瞼に残る堀田も、 作業用の舟であったと思われ、 部港関係の船、 漁船、 渡船などを除いて大部分が堀田農 堀田の多い所は小舟も多く、 一面の美田となりました。 昭和の土地改 三四





(「のびゆく養老町」より)広がる美田―船附上空から見た現在の養老町

### 第 七 章 明 治以降の治水と用 排 水

### 治 水

令が、 それが活動する形を取るようになったことです。 布等もあり、 制をとる法令、 出 よって制度化されたものを県や市町村の自治体が、 水時 治水行政を江戸時代と比較すると、大きな進歩は、 明 治から現代の治水 水害を防ぐ等、 次々と出され、 の水防組の法令や、 それによって地方自治体や関係住民が一 即ち、 又 大きな変化と進歩をしました。 水利土功会や水害予防組合に関する法 西洋文化を取り入れる明治新政 改正されてきた。或は河川 輪中を守るために市町村が共同体 したがって 組織 体とな 法の公 法令に 化 権

発達は、 が堅牢か 量の 陳情を行 なくなり、 治水情報の提供、 あることが明確になって、 械 土砂運搬等が容易になったこと、 中を守るための治水責任が国・県・ 化時代を迎え、 治水工事に必要な護岸、 その反面 水害予防の充実をはかるようになりました。 治水事業の実施 トラッ 地 域 住 江戸時代のような自普請等は殆ど ク等により治水工事に必要な大 民は行政当局と一体になって、 ダ 時には、 L, 又コンクリート工 水路 市町村または組合に 行政当局と交渉、 樋門等の 建設 事 Ò

> 地帯の問題もおおむね解決するに至りました。 どに停滞する悪水を以前より早く、 易となり、 下水を汲み上げて干害を防ぎ、 尚 治水工事に精巧なポンプを使用して、 更に用排水にポンプを常設使用 排水機は、 かつ完全に排除 海抜ゼロ して、 河底工事等 揚 トイルー 水機 地帯な 低湿 は が 地

## 水防組織と治水事業

### (1)水防制 度の 創設

なりました。 0 防組織をそのまま生かし、 間に広い 明 治維新 範 後 井 0 各地方の農民は、 0) 層強固な連帯意識で責任を考えるように 出水時 に備えました。 IB 慣によっ て、 そして、 自主的な水

但シ防ギ難キ候節ハ 出来ノ節 「出水ノ節ハ五合目以上、 次に、それらの具体的な事例を養老町史で見ますと、 ハ該村太鼓鳴リ 該村鐘鳴ラシ次第、 次第、 輪中村々互ニ見廻り、 輪中人員ヲ以テ相防ギ申 引 拂 ノ事 苦難ノ所

第四大区八ノ小区

飯  $\mathbb{H}$ 村

蛇持村

祖父江村

よく

右の古文書によって、 その当 時 0 状況 が わ かります。

### (2)水防組織編 成の法 制化

から水理工師を迎えて、 明 治新政府になっ てからは、 指導を受ける程でありました。 治水行 政に積極 的で、 オラン

容易になりました。

では、水防組織について、次のような通 牒を発しました。遅遅としていました。一〇年頃から漸く軌道に乗り、岐阜県かし、新政権の初期においては、中央、地方の行政は、まだ

す。その規則の主たる内容は左の通りであります。た。これが、明治以降「水防組」の基礎となったのでありま早速立案し制定して、その年に許可を受けるよう指示しまし早速立案し制定して、その年に許可を受けるよう指示しまして、明治一一年(一八七八)に「水防規則」及び「水防組編成明治一一年(一八七八)に「水防規則」及び「水防組編成

- ① 水防組は、その地域を管轄している警察の監督を受け
- ③ 器具庫を置き、水防資材を備蓄する。(郷倉と同一)② 水防組には組頭、副組頭、小頭、什長等の役を置く。
- ④ 水害、破堤の危険が迫った時は従来の活動と同じ。
- ⑥ 水防活動には組合費で、又、死傷者は公費で償う。

この、見川及がkゟ且扇戈列川こよる蹇老丁見などとなっています。

その年の四月までに編成するように添え書きがあるので、 村それぞれ水防組を編 0 水防組設立資料は残っ 規則及び水防組 成 てはい したと思われます。 編 成例則による養老町内当時の村 ませんが、 この 布達 の末尾に 各 Q

されました。これは水坊活動に深い関係があります。明治二九年(一八九六)には河川保護のために河川法が公

時代はだんだんさがって、大正五年(一九一六)になると、布されました。これは水防活動に深い関係があります。

水防の徹底をはかりました。 右の標題の通 牒で強力な指導を行い、それによって各町村の「水防ニ関スル施設ヲ完備シ水害予防方」

るものがかなりあるのではないでしょうか。 防倉庫など、その当時の堤防に、定められた間隔で残ってい定める」等内容がきびしく、命令的でありました。現在の水・千間(約一八一八½)毎に設置する」「材料、器具は知事がありますが、「水防倉庫など、堤防延長五百間(約九〇〇½)その内容は概ね明治一一年の水防編成例則のときと同じで

切警防団員が行うことになりました。九三九)には警防団令」が公布され、水防、警防のことは一九三九)には警防団令」が公布され、水防、警防のことは一その後、昭和に入って、臨戦体勢になると、「昭和一四年(一

廃止となり旧へかえります。 昭和二〇年(一九四五)には、終戦となり、警防団も自然

合併町村等のことについては、ここでは省略します。導され、わが地方においても大きな養老町が誕生しました。昭和二九年(一九五四)には全国的な規模で町村合併が指

## 現在の水防活動

になるので、ここでは省略します。

この規則及

水防

組

編

成例則

は何回

も改正されますが繁雑

養老町の現在の水防活動は、昭和二四年六月四日(法律一

もらい 詳 l, ます。 細 町 長は毎年水防計画をたてて、 に公布された「水防法」によって組織され、 つい ますが、 次に、 ては その組織と活動について略記しておきます。 右内容の重要事項を二、 「養老町水防計画書」(毎年作成)を参照して 町内水防体制を整えます。 三あげておきます。 活動して

- 課長)総務班長(総務課長) 情報水防班長(建設団長) 総務班長(総務課長) 情報水防班長(建設
- なければならない。(同法一七条) ぜられた場合は、直ちにこれに協力し、水防に従事しの 住民の義務 水防管理者、消防機関の長から出動を命
- て組織し、区長が統率する。は、養老町区防災組織設置要綱に基づく防災隊によっは、養老町区防災組織設置要綱に基づく防災隊によっま、
- れた計画に従い出動せしめ、警戒配置につかせる。自衛水防隊又は、消防機関をして、あらかじめ定めら④ 出動 水防本部長は、次の⑴、⑴の時、水防監視員、
- (イ)、河川水位が警戒水位に達したとき。
- を要すると認めたとき。四、気象予報、洪水予報、水防警報等により消防団出動

ります。手当法」という冊子を発行して、応急手当の方法を教えてお手当法」という冊子を発行して、応急手当の方法を教えてお以上は重要事項のみでありますが、なおこの外、「水防応急

## 水防倉庫

て各町村は必置になっています。大正五年の「水防ニ関スル施設ヲ完備シ水害予防方」によっ水防倉庫のことを一般に諸色庫とも呼んでいます。前述の

本町においては、洪水に備えて、水防倉庫を堤防長さ約一条行二間(約三、六片)であります。建物はほとんどが平屋中には一六棟の水防倉庫があります。建物はほとんどが平屋中には一六棟の水防倉庫があります。建物はほとんどが平屋中には一六棟の水防倉庫があります。多芸輪中では二七棟、喜多輪本町においては、洪水に備えて、水防倉庫を堤防長さ約一

① 杭木(長さ二片以上)一〇〇本以上常備資材器具は概ね左のようなものであります。

- 杭木(長さ三足以上) 五〇本以上)
- ② 空俵四〇〇俵、麻袋(ビニール袋)、かます(ビニール
- ③ 松割木 (一、三〇代光廻り)二〇個



水防倉庫 (津屋川堤防上)

4 むしろ 作業灯 六。手提灯 六。石箕 掛矢 一〇。たこ槌 三〇
に。シャベル 一〇枚。 もっこ 鋸 三。まさかり Ξį 0 ੍ਹ 縄 カーバイト 十字鍬 もっこ棒 八〇點。 四。 照明 マニラロ 五〇點。 じょれ 垣。 灯 槌

# ③ 水利土功会の設立と法令

たい松

==00°

火皿

八条に水利土功の法的根拠が設けられました。 更に区町村会法を時治一三年(一八八〇)に公布し、 区町村会を組織させ(明治一二年四月、岐阜県町村会規則)、 に新政府は、 公費の分担或は用排水の共同問題もあります。 なる事項、 県では前述の水防組の編成とは別に、 又この 小規模町村の合併を行いました。そして町村に 事業の隣接町村との共同 治水事 体制の必要性、 そのような時 業の緊急必要 その第 又

に成立したものであって次の性格を持っています。く形成された組織であります。そして、一定の法的基礎の上とは、輪中が代表的事例で、明治期の水防共同体として新しその条文は、ここでは省略しますが、この条文の水利土功

- 2、水利土功会の設立は町村会決議を要します。1、水利土功会は輪中だけでなく用排水も含みます。
- 組織されませんでした。ところが、この法は町村の実情に合しかし、この法が出来ても水利土功会は実際にはなかなか3、水利土功会は知事の裁定を受けることになっています。

うよう、次のように改正されていきます。

- 称が初めて出てきます。 
  ① 明治一七年(一八八四)の改正では「水利土功会」の名
- 2 悪水などに関する土地保護のためのものであります。 通水利組合とが含まれております。「普通水利組合」は、 根拠であった区町村会法が廃止されました。 三年、 明治二一年の市 水利組合条例が生れ、 制 町 村制の公布で、 この中に水害予防組合と普 水利土功会成立 代って、 明 治 0
- て、以前のものは、この法令に基いて再編成されます。
  ④ 明治四一年(一九〇八)には「水利組合法」が公布された。これは水害予防に重大な関係をもつものであります。
  ③ 明治二九年(一八九六)には「河川法」が公布されまし

# (4) 養老町内の水利土功会の発足

# [多芸輪中堤防組合水利土功会] の設立

津屋川· く述べるかわりに規約の一部を載せて考えることにします。 水樋、 います。その総論は船付村外二五か村の連合となっています。 三) には、 するため、 各村が加入しました。 多芸輪中は早くから治水のための堤防保護、 そして明治二〇年 大榑川 洗 堰あるいは、 金草川堤防組合水利土功会」が設立され、 水利土功会の組織を考えて、 多芸輪中水利土功連合会議案が提出され成立 (一八八七) 水利土功会の内容について、 その他の問題について共同 に「多芸輪中揖斐川 明 治一六年 <u>-</u> 十 七の  $\blacksquare$ (一八八八 くわ 川以 牧 解決 用悪 田 南 Ш

「規約」

第一条、船付村外、二拾五ケ村連合トス(笠郷村・池辺村・

広幡村・三郷村・上多度村ノ内鷲巣・小倉)

数ニ課ス。 ニ課ス、十分ノ四・五コレヲ段別ニ課ス。十分ノ一コレヲ戸第二条、経費の負担法ハ次ノ如シ。十分ノ四・五コレ地価

第八条、堤防修繕ノ節、土取場所ハ自村他村ノ別ナク掛リ第四条、堤塘事務所ハ下笠ノ内三ツ屋ニ設置スルモノトス。

第二五条、水防ニ関スル事務ハ同心協力、此連合規約ヲ遵宅地ノ外ハ如何ナル地所タリトモ之ヲ拒ムヲ得ズ。

守シ、利害 休 戚ヲ共ニスルモノトス。

もとになって、明治二一年(一八八八)には、次の水利土功右の多芸輪中堤防組合水利土功会が設立されると、これが(この外、分担区域が詳細に割当てしてありますが省略する)

# (下笠輪中堤防組合水利土功会)

会が発足しました。

目的は堤防補強や用水、悪水除

〔元多芸郡五日市村及同郡竜泉寺村地内牧田川請茶園原堤防

## 組合連合村会〕

芸輪中に加入している全村の外、鷲巣・押越の全部が加入しめに広範囲の関係村が参加し結成されました。たとえば、多水時には右岸から濁水が氾濫したため、これを喰い止めるた牧田川はこの付近では扇状地を形成して流下していて、洪

たなどであります。

# (5) 町内の水害予防組合の設立

水害予防組合と名称がかわるの

は

明

治

一三年(一八八〇)

の水利土功会が同二三年(一八九〇)に水害予防組合と法改

正になるからであります。

# 〔多芸輪中水害予防組合〕の設立

組合に編成改称しました。会が、明治三一年(一八九八)に同区域を多芸輪中水害予防明治二〇年(一八八七)設立の多芸輪中堤防組合水利土功

## [両江普通水利組合] の設立

明治四五年(一九一二)に設立、範囲は江月・祖父江輪中

で、悪水排除を目的としています。

# [喜多輪中水害予防組合]の設立 (大正七年)

であります。この地方は、牧田川・杭瀬川・相川・大谷川・喜多とは、多芸郡の牧田川の北部地方の村を総称する名称

泥川・色目川・小畑川が流れています。水害予防のために、

で輪中を守らなければならない必要に迫られてできました。飯積・祖父江・江月・蛇持・室原(合原村)の各輪中が共同

## 「牧田川南北輪中の水争」

おいて南北二川に分かれ、約一点の下流の直江村中瀬で又、おいて南北二川に分かれ、約一点の下流の直江村中瀬で又、牧田川は、永禄九年(一五六六)の大洪水に高畑 将棋頭に

合流するようになりました。

年々出水のため、

明治三〇年

(一八九七)

頃には、

南北両

上 のは当然で、 るようになり Ш とも川 喜多輪中 底 が 水害予防組合を設立しました。 河北においては、 ました。 同高となり、 将棋頭の維持修 将 棋 大正七年 (一九一八) 頭は 板一 繕 枚で水勢が変えら 0 たびに問題が に対抗 定起る n

に、次のような和解調停がなされました。 九三二)に川南の石畑樋管組合と川北の山田樋管組合との間、大三二)に川南の石畑樋管組合と川北の山田樋管組合との間の出動によりこれを鎮撫して、無事に双方が解散しています。の出動によりこれを鎮撫して、無事に双方が解散しています。この水争いは南北輪中対抗となる激しさを増し、大正八年この水争いは南北輪中対抗となる激しさを増し、大正八年

- ① 牧田川筋当時者、関係水利問題に関し、旧弊を打破す
- 2 堰止分水工事の 乙坂地内に分水場がつくられ南北公平に分水されるよう なっ 水利の円滑 て問 題 は解決されました。) と 関係 実現を期す。(これは後年、 地域の福利を増進するため、 牧田川左岸の 牧 田 Щ

配二 トメー b 杭 い :瀬川堤相川堤を大垣輪中堤の高さは望めなくとも綾野分ぐ 喜多輪中水害予防組合の設立当初の第二の大きな狙 割ということでありました。 江月は一 0 高さにしたい。 五以、 馬踏幅一・八片、 (一) 紅低いから) 表勾配 構造では直高一一・三 割五分、 61 襄勾 は

狭 窄部拡張工事は多年の懸案であったが、反対もあって長年となる。 組合設立の第三の目的は、 高渕抜工事でありました。 高渕

や期限の延期によって、見通しがつかなくなりました。大正一〇年(一九二一)に関東大震災が起きて、予算の削減、この工事は、この組合が結成されてから推進されましたが、放置されてきました。しかし、この実現は地区の願いでした。

## (五三組合)

の三字にて、目的は、同地区の悪水抜きでありました。字と池辺村根古地・根古地新田・大場(外駒野新田の一部)ました。区域は笠郷村船付・栗笠・大野・下笠・上之郷の五ました。区域は笠郷村船付・栗笠・大野・下笠・上之郷の五大正八年(一九一九)四月、五三普通水利組合が設立され

## 〔瀬田水害予防組合〕

係範囲を広めた組合を設立しました。金も多くを要するので、喜多輪中水害予防組合とは別に、関密和三年に設立。輪中に関する治水工事は広域に関係し資

川合流地点より下流改修工事の費用の内、 荒崎・ 立替えようとする、 (これは当時の古文書に明記してあります) 目的 範囲は牧田 合原・綾里・静里の各村、 この場合は一 川以北の日吉・多芸・小畑の各村・不破郡表佐 起債の必要上設立されたも 般の組合と性質 高田町の九か町村です。 が異り、 金三〇万円を 牧田 のであります。 Ш 杭 時 瀬

## 〔水利組合の解消〕

村 が 々、 合併して養老町 昭 和二九年 皆同一の町内となり、 (一九五四) が誕生しまし また牧田川の水をめぐる南 た。 月三 多芸輪 Ħ 高田町以下 中 と喜多 九か 輪 中 北 町 0 両 各 村

意義 的解消をしました。 岸 0 が 村 なくなり 々 対立も解 芸 消してきましたので、 喜多両 輪中組合は 手続きを経 両 組 合が存続 発展 する

#### 養 南 水防事務組合〕 0) 設

大水害の後、 昭 和 四 年 強力な広域 (一九五 九 水防 0) 集中 組 織 の必要が生じ、 雨と伊勢湾台風による、 養南水防

0

維持管

理に関する事

務であります。

務

組

合が

結

成されることになりました。

	養老町旧日吉村(字大畔を除く)	養老町旧多芸村(牧田以北)	養老町旧小畑村	養老町旧高田町(牧田川堤以北)	養老町旧多芸村(牧田川以南)	南濃・海津・輪之内町の一部旧上多度村・旧笠郷村旧池辺村・旧広幡村と田広幡村	同石畑	養老町竜泉寺	上石津村乙坂字中島市・橋爪字大畔番光町沢田・桜井・上方・五日	区域	
<u>n</u> E.	五	四五	五〇	七六	七六	五七	二六	七六	一二七円	(一反歩につき	
〇、九〇	0, 110	〇、九〇	1, 00	〇、四六	〇、四六	高田○、八三	〇、四六	〇、四六	〇、四六円	(千円につき) る家屋の評価 る家屋の評価	

養南水防組合の区域及び分担金割合表

が 審 昭 議 和 議決され Ŧi. 年 司 三六年 九 六() 月に発足しま 一二月 0 町 議会にお ては、

規

約

水防 町 を以っ この組合は、 0 ため て組織 これ 養老町 らの 組 河 合の共同 上石 ĴΪ の堤防に伏設 津 処理する事 町 南濃 してあ 町 務は、 海 る極常の次の 津 町 河 之内 樋門 Щ

金草 牧田 泥 Ш 川  $\mathcal{O}$ Ш 右岸・ 0 0) 両岸· 両 岸 色目川 勢至谷請 相 川 0) 両岸 右岸·揖斐川 五日 小 畑 Ш 市 Щ 0 の右 両 0) 而 岸 岸。 岸 津屋 杭 瀬 Ш Ш 0 右岸 左

#### 養南 水 防組合の 解 散

それぞ 行政 が この な 組 組 n 0 織 合 0 で、 0 強 町村で事務を引継ぎました。 は 昭 化 和四 や、 昭和三六年 八年 水防! 寸 日組織の (一九六一) 九七三)三月三一 確立した今日では に設置されました 日付で解散 余り必 が

#### (6)木曽三川工事のうち揖斐川 多芸輪中・ 喜多輪中に関係 と牧田 する明治 Ш の の 分流 大治 工事 水 事

ランダから 水理工 明 新 政府 師 水理工師六人を招き、 1. は ル ン以下六人と工手四 治水事業の近代的 治水指導 推 人は、 進 のために、 0) 明 依頼をしました。 治五 先進[ 年 玉 オ

に三十一歳で来朝、 担当することになりました。 (一八四三~ 九一三) 同三六年 四等工 このデ・ (一九〇三) 師は、 木曽三 レ ] 六月に勲 ケ は ]]] 明治 0 改修工 六年 二等に叙 九月 事 を

七二)

から逐

次来朝し、

その中

一人人

ヨハネス

デ・

1



デ・レーケ技師銅像 の銅像は、木曽三川治水100周年 船頭平河川公園

せられて帰国してい の治水指導に当りました。 ます。 0 間三十 年間主として木曽三

三川 デ 工事計 I 画にたずさわりました。 ケの調査 彼は明治一一 年 から同三三年まで木曽

治一一年 (一八七八)でした。 「彼は三月二日今尾の宿舎を出 烏江村を通り、 波村に止 大巻に至り、 束輪中 レー 宿 (現輪之内町) ケー た。 大垣輪中と水門川を検分し、 行は、 翌 日 牧田川上流並に養老谷を検分した。 は揖斐川筋を北に上り 大榑川を検分し、 附近の実地調査に着手したの 岐阜県治水史の視察日程による 松内村渡しをこえ 福束村を経て難 神戸 13 帰路 止 宿 は は 明

に同公園の説教所 デ ケ養老公園 (真宗大谷派) 13 泊 に宿泊したことが同所日 る 明 治 几 年 Ė 月三〇 誌 В

にあります。 でしょうか。 これは山 (親しみを覚えます。 谷の砂防視察に来て泊

つ

たので

は

な

木曽川

だ

彼

は同 の完

海部郡立田村)に多くの方々の募金 により建立されました。 この結論は、

Ш なかっ か それは彼の死後十六年目に薩摩藩の宝暦治水工事によって計 期間中巡視して、 美濃郡代兼帯を命ぜられた井沢弥惣兵衛為永は、 結論に達したわけであります。 画 六年まで調査を続けたところ、木曽・長良 けを分流しようとするものでありました。 分流が必要な結論に達したのであります。 っ が実現しました。 明治一一年四月に上申したデ・レーケの たが、 たの この井沢流の三川分流の治水計 か、 外人技師 享保二〇年(一七三五)幕府勘 三大川分流治水策を幕府に献策 当時のことで、 0 デ・ レ 完全分流とまではい ケもやはり その後、 画が古今に誤 献策は 揖斐三川

定

役よ

ŋ

Ŧī. 吟味

か月在任

しまし

た。

では、 でを第二工区として、 流をよくするため河 1 木曽川三川分流計画が明治一 牧田川 揖斐川筋、 と津屋 現、 道 川に関係するもの 安八町結附近から現、 この間は河道が不規則であるか の付替えを主とする。 九年に出来上がっ O) みを取りあげ 輪之内町 たが、 松内 、ます。 ま 水

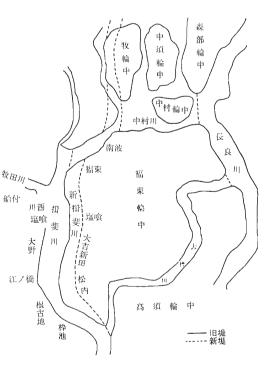
防に 水路に専用させる。 を開き左岸堤防 当てて、 揖斐川と牧田 福束から今尾までの現 を新 築し 川 の合流する附近では、 現川 (当時) Щ 敷は牧田 の左岸堤 福束輪中に ]][ 防を右岸 水門 新 Щ Ш

ŋ

かな

最後は、

0



揖斐川下流改修略図 (輪之内町史第四編 近現代 P 337より)

して下部では、 羽根谷等の溪流及び多芸輪中の 工事区の中 大榑川を遮断し、 また第三工区においては、 部では、 河 幅を広めるため 高須輪中に新川を設け、 大榑川に福束輪中 悪水放流 左堤を引堤する。 大巻堤外地に 0 0 用に供する。 悪水を収容させる。 旧 川敷は津 新水路を開 屋 か Ш

3

が網の 流 曾 民は、 この 水を妨げ 長良両 É 頃 この三川 0 Ш ようにつながっ 幕 氾 0) 政時代から度々の水害に悩まされてい 濫の 濁水 流域 原 が 地方が東高西 因となってい 西の揖斐川に流れ込み、 ているため、 低 た。 の地形であるうえ、 三川完全分流は地 豪雨の際、 その支流 東方の · た地 三川 まで 域 木 住 域

等が計画の概要であります。

的に対処したので、 Ł した。一方明治新政府も地方の窮 状と熱意にこたえて、 八十有余の輪中を結集して、 イ かかるような大改修が順調に進んだのであります。 一八八〇)に「治水改修有志社」を結成しました。 工事の状況 総計費約儿七五万円

(明治四四年まで)

極

加納輪中を代表する山田省三郎が中心になって、

明治一三年

工

その後

国や県へ改修促進を働きかけま

住民の長い間の悲願でありました。

ō)

時

西南濃有志代表達は、福束輪中代表片野万右

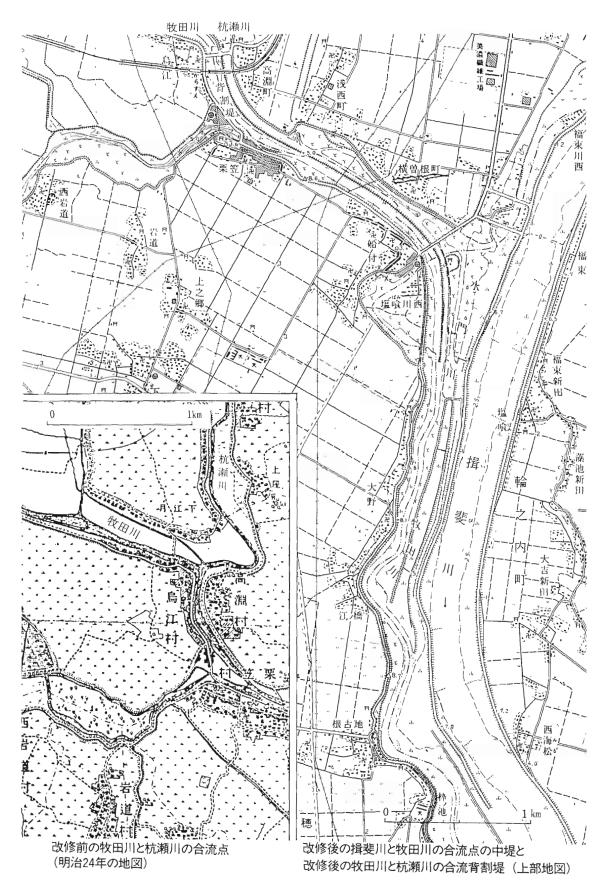
揖斐川の付替堤防が牧田川合流の分流堤となる。

築し、 根古地下まで現川敷は牧 とにしました。(上図参照 を真直ぐにするため、 1 現川 場所 (当時) 揖斐川と牧田 の左岸堤を揖斐川 福束輪中内に新川  $\mathbb{H}$ Щ 川の合流する付近で揖斐川の と水門川 0 堤防にあて、 を開 水路に専用させるこ き、 左岸堤を新 福束から 河道

2 堤防の長さ 松内— -塩喰間約五、 五〇〇台

として行いました。 に三川分流と直接関係のない揖斐川筋の松木から上流 3 工事期間 明 治三三 年 九〇〇) ~三八年の六年間 0 工 事

成戸 兀 分流工事のあらましは、 月二二日 すなわちこの工事は木曽三川工事 の堤防 上で三川 時 の総理大臣山県有朋を迎えて、 分流 明治三三年に終って、 0 成功式を行いました。 **の** 環ではあるが、 当時の吉里村 竣工 その後 式 は同 三川 引 年



続きこの工事を行ったのであります。

収が必要でした。 土地買収 買収面積は約百八十町歩(一七八二〇6) 福東輪中内に川替えをするため、 農地の買

題が解決したことは不幸中の幸いでした。 (一八九六) 七月に大水害が起きて驚き、 当時福束輪中民の買収反対があって困 つ たが明 挙にこの買収問 治二九 年

担分五三万円弱、 (一八八七) ~三五年までの国費が三四三万円、 6 その内、 工事の難行 経費について この工事分の費用は調べられませんでした。 愛知、 堤防新築工事は 三川分流工事全体の経費は明治二〇年 三重県合せて総計四三一万円であっ 地盤軟弱で打杭等に困 岐阜県費負

難をきわめました。 改修の効果



木曽三川分流碑 (長良川左岸堤の成戸)

うになりました。 延ばされ、 牧田川との合流点が背割堤によって約三○○○片下流へ引き 豪雨の時でも牧田川 の流水の停滞が緩和されるよ

輪中 尚 住民に多くの犠牲が払われています。 この改修工事には、 多く土地収用があって、 特に福

## 津屋川と揖斐川の合流点引下げの導流堤工事

0 ました。 川であります。 津 屋川は養老谷に発源し、 小坪 (現在養老町) 養老山麓を南流する約一 で揖斐川に合流 

流点を引下げる必要がありました。 て高水位に達し破堤の原因となっているので、 ぐ機能を果しています。ところが、 五〇〇町歩 堤防の殆どは、 揖斐川が増水し、 (約二四七五鈴) その左岸のみ築かれています。 逆流して、 の耕地を保護し同川の氾濫を防 自川の増水と合せて、 この川は一旦豪雨となる 揖斐川 多芸輪 0 極め 中二

れて同三三年(一九〇〇)に取りかかり同三五年に完了しま 工区に含まれていますが、 この津屋川改修は前述の明治一九年に三川分流計画の第三 三川分流の主工事でないため、

須輪中の中を開削して、 の構築でありました(地図は次頁を参照)。 まで四四三間(約八○○↓)の合流点引下げ、 この改修工事は、 高柳 真直にするため津屋川 (現養老町) から福 揖斐川は新たに高 岡 新堤 の分流を兼ね 現 海 (背割堤 津 町

#### 揖斐川と津屋川の合流点引下げの導流堤(背割堤)を示す地図



た。 て、 高柳 わめたのです。 これは揖 から福岡までを、 その後は、 斐川 0 本流 明 揖斐川 治三 0 五年 付替堤防となり新築の その 0) 逆水が大いに緩和されまし 右岸堤としての構築をし 月漸く完成しました。 ために ま 困 た。 n 難

功記念碑」 「揖斐川改修工事成

背割堤の起点に

標題 碑

津屋川と揖斐川

合

流

工事は明治に完成 薩摩藩三川 分流

IJ.

堤防による締切りと、 は、 暦治水工事が実施さ n Ш 井沢惣兵衛為永の三 三五)頃の幕府役 ました。 分流案にそって宝 享保二〇年 油 島 の喰い その中、 違

1 246

喜びでしょう。

工事完成の地元民

0)

たってい

・ます。

この

0

建設者不

萌 0)

が

におおむね完成させました。 招いた。 明 る計画をたてました。 れには、 治になって、 荊 洗堰による締切でした。 その担当技師デ・レーケは同じ三川分流を完全にす 斬新な技術を必要とするので、 政府は木曽三川 政府はこれを明治二〇年~三三年まで 併し氾濫は減りませんでした。 の大改修を計画しました。 オランダから技師 を

Щ

事も含まれていたことを忘れてはなりません。 Ш 施されたことになります。 や津 によって薩摩義士の着手した三川分流工事が完全に 屋 川の合流点を下げて、 この中に揖斐川の支流である牧 流水をよくするため導水堤  $\mathbb{H}$ 実

## (7)多芸輪中・喜多輪中に関係する昭和の大治水事業

#### (--) 牧田川の )大改修

で牧田川に杭瀬川が合流しており、 合流し、 田 Ш 狭さく部となっていました。 0 烏江 高渕付近は河床勾配が急に緩くなるところ さらに金草川・ 小 畑 Щ

さく部の拡張工事を強く願ってい は は関係輪中や地元民の意見が合わないなどの事情から、 力工事の一つであったと言われていましたが、この工事だけ 何もなされなかった。 宝暦治水の際この鳥江・ そのため 高渕付近の狭さく部 ました。 地 元民は か ね が 拡張工事 ね この ずは主 結局

勾配が急なる上、 方 牧田 荊 。 の 烏江狭さく部等の 烏江から上流の沢田 ために以前 西端広 瀬橋までは河 から水害が繰 床

> 返され、 連帯で治水を考えるようになりました。 害から人命財産等を守るために、 毎年大きな被害を受けていました。 より広い範囲 人々は、 より その水 強 固

破郡 併し、 予防組合が大正 の時、 等の積極的 事の促進を図りました。 合の最終目的は牧田川と杭瀬川の合流点の改修工事でした。 なり牧田川南北の水利・水害の論争が絶えませんでした。こ 七年七月、 されましたが、 び同郡竜泉寺村地内牧田川請茶園原堤防組合連合村会が 既に明治二〇年(一八八七)に、多芸輪中 前述のように牧田川と杭瀬川合流点、 の関係村を加えて、 牧田川・金草川) この工事はもっと広い地域に関係するので、 前述の牧田 大正二年 な協力もしようとしました。 その後にも明治二九年 七 年 川以北に輪中連合組織である喜多輪中水害 (一九一三) 一〇月と相次ぐ大水害が 堤防水利土功会や元多芸郡五日 又 九一八) 瀬田水害予防組合を昭和三年に設立 要請により に結成されました。 (一八九六) Í. 事費の 及び、 (揖斐川 その下流 九月、 新たに不 時立替え この組 市 組 村 津 重 及 屋

委員となって、 らは、 これらの組合組織の協力のもとに昭和六年(一九三一)か 牧田川下 さらに積 流改修促進委員会がつくられ次 極的な活動を始 めました。 0) 人達がその

大久保精 東島卯八 佐藤豊次郎 (大垣) 郎 日 (小畑) 吉) 佐竹直太郎 松永金吾 野文五郎 (高田) (笠郷) (上多度) 石原敏夫 (下多度) 西脇光次郎 山 田貞策 多 池

辺 野津乙吉 (多芸) 西脇哲次 (広幡) 谷金吾 (船付)

ら上流、 この委員 高渕の牧田川と杭瀬川合流点から下流は国が行い、ここか この工事に取りかかるまでにこぎつけました。 会の 広瀬橋まで約八段は県が行うことになりました。 度 重なる陳情は遂に効を奏して、 昭和 八 年 か

## 牧田川下流工事

牧田川の左岸の高渕 下は揖 .斐川合流点に至る約八牍であります。 右岸の烏江地先が牧田川 改修境界線

笠郷村船付地先の狭さく部を引堤して、 工する。 堤により分流し、合流点を二八五○以下流に付替える。 そのため高渕地先の狭さく部は川幅を拡張し、 主工事は 付替えることとし、 次にその主要工事の概要を記します。 牧田川に合流していた杭 牧 田川と杭瀬川合流点の分流工事であります。 これに必要な護岸及び付帶工事を施 瀬川には新川を開削し背割 屈曲部は新川を開削 また同地先に なお

ため、 削を完成し、 より工事に着手し鋭意工事の促進に努め、 ににいにいにいい 八五〇景間で新川 その区域は本川改修上流端より新杭瀬川の合流点に至る二、 杭 瀬 ①掘削及び浚 渫工事 川の新川開削のために掘削及び浚渫工事を施行しました。 高水敷も併 両法はどれ 牧田川を新川につけ替えたが、 も 0 せて掘削するもので、 断面 割勾配とし、 は牧田川で敷幅三〇片 牧田川の河積並びに新川付替及び なお必要な河積を与える 昭 船付地先 和八年四月下流部 その後、 杭瀬川は二 太平洋 新川掘

戦争によって一時中止の止むなきに至りました。

たが、 川の通水を見ました。 が再開され、 心な援助を得て、 輪中並びに大垣市は、 昭 和二〇年終 地元民よく協力して昭和二四年二月には、 当時物資の不足、 戦になると、 幾度となく陳情しました。 牧田川改修促進会を結成し、 地元多芸輪中・喜多輪中・ 経済の不安定な時でありまし その結果、 漸く新杭 地元の熱 大垣

を昭和九年 全部完成したのは、 機械併用 この掘削及び浚渫総土量一、 ②牧田川右岸の築堤工事 掘 削土砂は築堤敷地に捨土し一部は低湿地に捨土しました。 機械はドラグライン及び五屯機関車を使用して、 (一九三四) 五月に着手し同 同二九年(一九五四)三月でありました。 船付地先の狭さく部の引堤工事 八〇〇立方はで人力と 四年三月竣工 延



事の浚渫船 鈴木芳郎提供) (室原

この延長約六四〇片下流 新堤築造は同 地先の新川付替えに伴う 同一八年三月に竣工 長三三〇ぱでした。 堤は同一二年七月碧工 Į 船付及び輪之内町塩 烏江地先狭さく 司 一〇年八月竣工 四年八月 延 喰り 引

部の竣工は同二六年一二月でありました。

をあげ、地元民の感謝の的となったと聞いています。より牧田川の異状出水にも事なきを得て、改修が非常な効果を完了しました。これについては、同二八年の十三号台風に同二七年三月には金草川樋門の竣工と同時に金草川締切り

瀬川 年に再び着工し同二九年三月に漸く竣工しました。この全長 年二月から工事に着手し、 0 0) Ш ③ 旧 通水に支障がないようになったがその後休工し、 幅 瀬 七〇灯でありました。 Щ 拡張並びに杭瀬川合流点の下流への付替並びに上流端 牧田川左岸の築堤工事 屈曲部矯正のため新堤を築造するもので、 同一五年までに大体完了し、 高渕地先、 牧田 川最狭さく部 昭 同二七 和 新杭

比にあげ、 上流部一一三〇片間は天端幅を五、 するもので、 ていた杭 ④牧田川 下流へ付替えるため延長二八五〇片の背割堤を築造 減川は、 法勾配は全部二割にしました。 天端の高さは、 杭瀬川の背割工事 新川を開削して、 牧田川計画高水位より一景高く 高渕地先の牧田川に合流 五以に拡め、 在来の合流点を締切り分 高さ一、 五

害は全く除かれました。年三月でありました。これによって、牧田川の逆流による水年三月でありました。これによって、牧田川の逆流による水かくして、昭和九年三月着工して全部竣工したのは同二五

を建立しました。(次頁写真参照) 瀬田水害予防組合は翌年に牧田川・杭瀬川分流竣工記念碑





牧団川・杭瀬川背割堤

◎牧田川下流改修の成果了しました。

したが昭和二五年から着工し、

同二七年 (一九五二) 頃に完

れで当初計画による左岸の護岸工事は一応完成しました。れ延長一、〇六二㍍を昭和二七年三月に完成させました。

同じく右岸の護岸工事は左岸と同様に戦争中休工してい

氾濫のおそれが少なくなりました。り、増水時においても牧田川・杭瀬川においてよく疎通し、よって、その一八五〇以下流で牧田川と合流させたことによ牧田川と杭瀬川の合流点の狭さく部の川幅拡張と背割堤に

◎牧田下流改修の障害

横曽根用水付替と揚水場の新設 牧田川の左岸に取水口を

⑤その後、

牧田

川下流の左岸の

高

低

水の

) 護岸工

事

は続け

6

#### 分流竣工記念碑



安田為三郎

工事に関係した 輪中組合役員

川口 和田武次 佐竹惣六 桑原 鈴木治左ェ門

た横曽根は、 より 低 背割堤により杭 VA ため、 取 水が出来なくなっ 瀬 汌 と分流され、 早野一馬 高木貞三 たの 川地 新 杭 村上

に 瀬 ₺

取

水

 $\Box$ 

を設けて支障なきようにしました。

Ш つ

は

牧田

川

て

VЭ 旧

路を開 船付 たが、 を持ち、 たため牧田川 瀬川 同 ようにしました。 で、 付 一五年三月でした。 牧田 栗笠地区約二 削 用 水付替 平 床 して、 約八〇片の開 水量の多い Щ 止 かを設い 0 改修により、 在来の 平 本用水は従来、 時 五〇町 流量 け 水路に取 新 水路を経て、 は 金 杭 が 草川 瀬川 殆どなくなり、 杭瀬川合流点が下 歩(二五〇段) 昭 付け 和 より 、導入し 牧田川 既設 兀 樋管により て、 年 延 0 右岸栗笠地 か の伏越樋管を利用しませる。 長四 をかんがい L 九 が 流に付替えられ 兀 堤内に導き、 いに支障  $\bigcirc$ 九 四 先に して 新 が 取  $\Box$ 

沢田 大橋三二良

古老曰く、

「昭和八年頃

牧

 $\blacksquare$ 

川

の改修工

が 始まっ

た

川 0)

堤

一隻。

そしてダンベイとい

る。

堤の

側では線路でト

口

ッコを押

牧

田

莊

流改修余話

時瀬 戦争の 中兜の 銭 五 をのせる長さ四-立って見ていると、 士の 牧田 、る光景が見られた。当時農家の人が働きにいった。人夫賃は 屯の機関車が泥を運んでい 田 事中 円 金屋 水害予防組合長故鈴木治左工 所有物であったであろう。 鉢 Щ が出土した。 -に兜が 杭瀬川 八〇銭 Ш 原の合戦で敗 五間、 出 合流点の の段階があっ 向 土 の方に浚渫船が これは関 巾九尺の舟数隻が仕事をしていた。又一方では

][[

底浚渫

たと聞いている。

門 されてい ら贈られたので現在鈴木家に保管 高渕抜き工事完成祝として組合



뿈 軍

n

た西

出土した兜

が 司 結成されてから始まっ 七 高渕抜工事功労者 (室原 年間 年 か 住 5 組合責任者として、 戦 同 2組合長、 争中は中止、 このエ た国 佐竹惣六 事は昭 終 0 事 手弁当で現場へ 戦 子業であ 後) (祖父江: 和三年 同二五年三月完成まで 瀬田 住 た が、 自 司 水害予防 転車で通 事 鈴木治左 務 長 組

は 13 杭

月一六日に分流竣工記念碑を建てるまで奉仕されました。て、人夫を集める等の世話をされました。そして同二六年七

### 1、牧田川上流工事

|間の工事が始まりました。||昭和八年より、牧田川上流の烏江地先から広瀬橋まで約八

の改修は には土砂 の改修まで存続しました。 と直江を残し、 朝 増水す 田 高畑字 将棋頭より北と南の二派川に分かれ中洲に大墳をはないがら Ш は永禄九年 れば 関係住民の 小石が堆積して、 直江字中瀬に至り 破堤の危険にさらされているのでした。 (一五六六) 永年 この の願いでもありました。 沿岸の耕 間 の大洪水で本川 合流 度 地面より高くなって、 Q 洪水にあって、 Щ となっ 0) 流路 て を変 Щ 今回 底

増補 その主なる工 完全に終 て工事は中 工事を大々的に行い ようやくこの工事に着手 わ 又南北 つ 断 事量は左の通りであります。 たの 両 は昭 堤外耕 終戦後また再開される等、 ました。 和四〇年 地 0) 進行中 牧 第 田 Ш 九六五) に 用 に南派川を締切 水を統 太平洋戦争 となりました。 工事が長引い L その が起こっ ŋ || 両堤 他 0

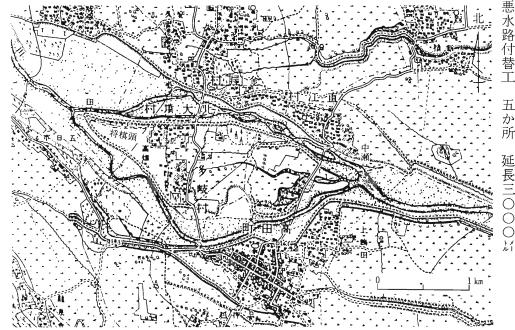
\* 堤 左岸七一六五片 右岸四五五四片

工 六〇〇1 法 護 岸 護岸根固 延 長 七 四 Ξ 延長一 四 トメー 四四 八四 水 制 工 幅三 延 長 六

床固工 二四か所 横堤 一六か所 橋梁 多芸橋 (昭和

九年架替)延長一四五片 巾 四・五片

悪水路付替工 五か所 延長三〇〇〇以 用水統一工事 左岸水路二二六九以 右岸一四一六



昔の牧田川 将棋頭で南北二派川に分かれ、直江の中瀬でまた一筋となる。(明治24年地図)

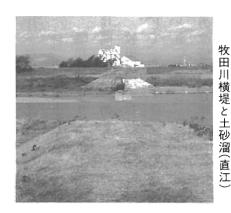
#### 工事の概要

流路が乱れていたので次のように工事が進められました。 河 底勾配が急 (二〇〇分の一~三〇〇分の一)で土砂多く

- 1 在 0 将棋頭で二川に分かれている南川河道を締切り、 南岸堤を補強しました。 特に現
- 2 Ш 底を掘り下げ流水をよくしました。
- 3 4 上流にはコンクリー ムや横堤をつくり、 卜護岸、 川底を固め土砂の流失を防ぐ等。 蛇かごを設置し川岸のくず

れを防ぎました。

(5) を南北公平に分け、 牧田川用水解決のため、 水争いをなくしました。 広瀬ダムをつくり、 牧田川用水



九月一

牧田川(直江付近)

⑤の用水工事は当時としては、 最高の工法であったとい

ます。

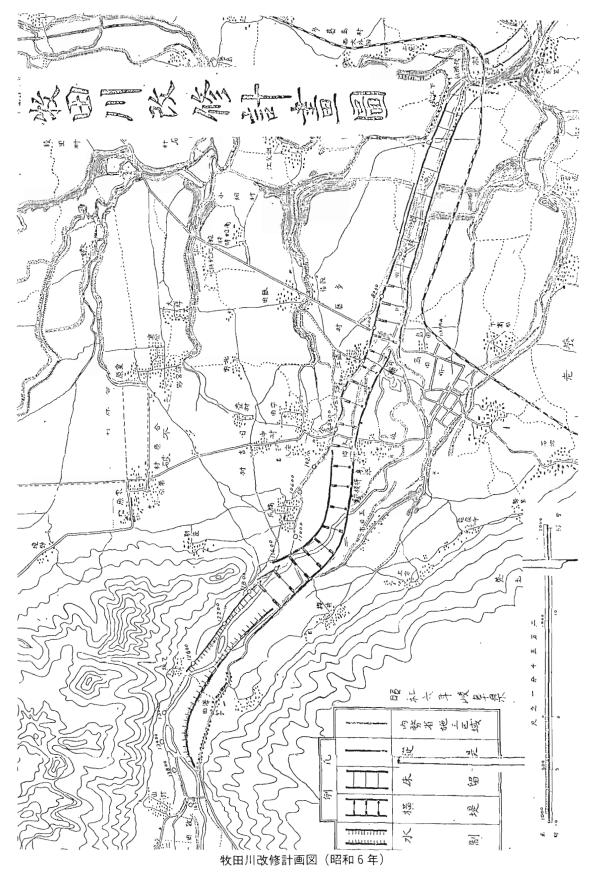
住民の多年の念願でしたので完成の喜びは一入ではありませ んでした。 以上牧田川改修工事の概要でありますが、 この改修は 地 域

度も重ねて、漸く着工の運びとなり、この推進力となって献 こへ大垣市も加えて、 身的な努力した人は高田の佐竹直太郎でありました。 予防組合を発足させ、 牧田川大改修の推進のために、 推進委員会をつくりました。 多芸輪中水害予防組と協力し合い 既述のように瀬田輪中水害 陳情を幾 7



佐竹直太郎翁の治水有誉の碑 (高田橋南)

たもとに「治水有誉」の記念碑が地元民によって建てられました。 和二一年没し勲四等に叙せられました。 佐竹直太郎は昭和三― 日に彼の顕彰祭を行っています。 五年、 七一一 年と二回衆議院議員に当選、 彼の功積をたたえて高田 毎年 橋 昭

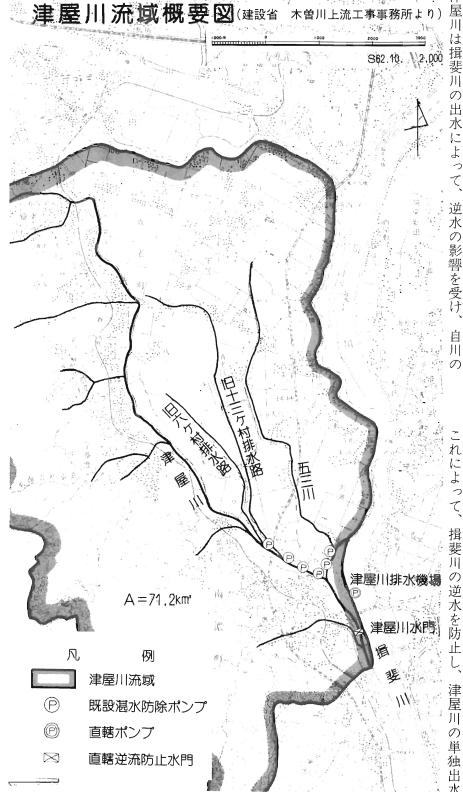


- 107 --

## 揖斐川と津屋川の合流点からの導流口 津屋川の逆水樋門と排水機の設

後逐次伸 揖 斐川 と津 斐川 屋 屋 0 Ж 今 Ė 出水によっ 0 流 お 水をよくしましたが、 7 からの導流堤 は 南濃 逆水の影響を受け、 町 河戸 は 地先まで三五〇〇 明治二五年に築堤 それでも、 自川 なお 0

そのた。 『水も. 逆水止樋門を着工して、 八年(一 加わって長時 九五三) 揖斐川 間港水 から建設省直営工事として延長五三 合流するやや上流の 昭和三四年に完成しました。 し堤外の農地 物 野 0) 河 水 損 戸 地 が 内に昭



**— 108 —** 

0 絶縁して、 0 進 び 本 は、 通りです。 異 その Ш 状 内 速 出水によって万 時 かに排水させ、 潮 湛水させるも 間を短縮 災害を軽減することが出来ます。 の影響による自 閉心 同 0 津 Ш 樋ひ 屋川 然排· 後は流域 筋に設置 乃 水の 13 ち 破 逆 远水防止! 堤 内に降る雨 圧迫を減 L た七排 が あっても、 により 水機 樋門の構造は じ、 水及 湛 又養老山 0) 揖斐川 能率 水区 び 悪水 を 域 地 増 を

によっ 早く排水 げておき、 巻き上げ 巻き上げ 樋 門の高さ五ぱ 屝 揖 増水時 は 屝 斐川 被害を最少 動力で上下する。 連 か には閉じるようになっ 幅七ぱ 合掌扉 らの逆水を防 シ限に喰 は 0) 1揖斐川 合掌犀 平常時 上上 止 めています。 0 JÜ 連、 逆 は てい 舟航 津屋 水を自動的 高さ六は ます。 刑 0 ため 0 単 独出 13 に だ巻き上 0 防 幅 設 水 止 Ŧ.

この工事費は、一億一二〇〇万円でありました。

## 津屋川の樋門の改築

門閉 画 同 これ も拘 は 九 五 津 塞後 月 屋 安全流下と、 は 0 年 わらず、 Ш を契機に、 0) 台風  $\sigma$ 九月と洪水が重って被害を受けました。 水位上昇により、 津 流 屋 域は昭和三四年 川 七号の洪水被害は著 同三六年六月 0 県は 内 旧 水排 水門が逆 津 除策 屋 Щ 内 水止 0 水被害を受けたからであり 同 0) ·改修計画 四 九 た しか 九年 め 8 五 九 0) 水門改築と、 画をたてました。 効果はあったが、 つ t し月、 たのであります。 に樋門が完成した 司 中でも五 五〇年八月 排 永 ま 水



津屋川新逆水樋門(福岡橋下100m)

津屋川新排水機(福岡橋上300m)



連門(L=三×二四、五片)であり、水門位置は、内水対策	新逆水止樋門は、計画高水量六八〇ヅに対応した逆T型三	老朽化、流下能力不足等により改築の時機になっていました。	旧逆水止樋門は、近年の地盤沈下やクラック発生等の施設の	場の新設であります。これは国営事業になりました。
-----------------------------	----------------------------	------------------------------	-----------------------------	--------------------------

津屋川水門	工事	既要							連門		
工事	色		所	岐阜県	海津郡南	有濃町、	海津町	地先	(L = = × :		
I		-	期	昭和61	昭和61年10月~昭和66年3月						
I		3	費	約69.3	約69.3億円						
計画	高水	流	量	680 m³/	680 m³/s						
-N 88	」 型 式				型				で		
水 門	幅		員	24.5m>	·3連				あ		
	敷		高	T.P2	2.60m(暫	定T.P	1.26m)		ŋ		
	揖斐	ЛΙΗ\	NL.	T.P.+7				_	1		
	津屋	Ш.	IJ	T.P.+5	.60m(暫	定T.P	⊦5.80m)		水門		
	平	水	位	T.P.+0	1.38m				位置は、		
	天	端	高	T.P.+9	1.24m				1置		
	門		扉	シェルローラーゲート							
	巻.	上方	式	ワイヤー	-ロープウ	インチェ	<u>r</u>		内水		
	巻	上	機	2モーター 2ドラム							
¬V □□ →	上	流	側	81.1m×25.0m×1.7m							
	水叩き 下流側				81.1m×30.0m×1.5m						
護床工	上	流	側	コンクリ	ノートプロ	シンク2t	型20m		1		
	下	流	側	コンクリ	ノートブロ	ハック2t∄	型20m+雑	石20m	1		
基礎工	水		門	鋼管杭(一部NF対策)							
				Ø1200	Ø1100	Ø1000	Ø 800	ø 700			
				56本	56本	60本	36本	18本			
	翼		壁		<b>鋼</b> 電	亨杭(NF	対策)				
					Ø800		Ø600	)			
					161本		40本				
	<_	()	長	e =36.	5m~45m	<u> </u>					
	水	OD	き		PH	C杭 e	= 8  m				
					600(B)		Ø300(A	١)			
					228本		508本	<u> </u>			
操作室	構		_造								
	仕	上_	げ								
管 理 橋	型		式								
	橋		格	1 等橋							
	橋		長								
	支		間								
	幅		_員								
管理棟	構		造		ノクリート		建て		1		
L	床		穫	/.Um×	$10.2 \text{m} \times 2$	2F					

上の効果、経済性、 以上流地点としました。この改築事業は昭和六一年一○月着 九億八五〇〇万円であります。平成三年完成の予定です。 現在進行中で、新聞によると平成元年度の国の予算は 維持管理から見て、 現樋門より約七〇〇

-- 110 ---

のため地区内の南水やかんがい排水など悪水の排除も悪く、元米低温地に多く存在する輪 の被害を防止する、四冊航の便を図る、回蓋水の改良を行うことを主な目的として、明治 「剣」と称される三川の出水時差の影響もあつて、下流部は水害を重ねて受けていた。こ 一十一八八七)年から同四十五(一九一一)年までの二十五年間に行われた。 木曽川下流改修(明治改修ともいうづは、木曽、長良、揖斐の三川下流部を対象に、竹洪水 往時、木曽、長良、揖斐の三川は支派川を通じて互いに連絡していたため、「四刻八刻十

が、この工事によってこの種の被害は緩和されたもののなお抜本的なものでなく、やはり 毎年のように洪水に苦しめられていた。 このため、明治政府はオランダ人技師デ・レーケ氏を招聘し、木曽川下流改修計画を樹 腰原養士で有名な「宝暦治水」は、宝暦四(一七五四)年から二ヶ年にわたって行われた 水腐れの害を受け、その害も甚大であつた。

て改修工事に着手した。この改修工事は、いわゆる「三川分流工事」と称されるもので、

洪水防御のためにも、また悪水の疎通を図るためにも三川を分流して高水、低水時ともに

ブル水制)の設置、④内水位低下を図るための牧田川、津屋川の揖斐川合流点引下げ、⑤ ②舟蓮の便を図るための船頭平閘門の設置、③低水路を固定するための長大水制(ケレッ 改修計画の主な内容は、①新川開削、派川および油島洗煙の締切りによる三川の完全分流、 互いの水位差による影響を断つのが得策であるとして、行われだものである。木智川下流

分流碑」が大正十二年に建てられている。 なお、この三川分流工事竣功を記念して、木曽川と長良川の背割堤上流端に「木曽三川

書

NO:

省

木曽川下流改修(明治改修)説明板(海津町成戸 長良川堤防上)

# 揖斐川「津屋川の分流」

木曽三川分流計画図

建 戬 省

合流していた。このため養老町や南濃町の低地は絶えず浸水し一帯は不毛の湿地帯と この地点から下流部は、かつて揖斐川が山裾に沿つて流れており、津屋川もここで

特中に開削し、揖斐川と津屋川とを分離した。 明治二〇年から始まつた木曽川下流改修ではここに堤防を築き揖斐川を新たに高須

流することとなり、揖斐川の背水の影響が大幅に軽減されることとなった。

一月ようやく完成し、この結果、津屋川はここから約三〇〇〇m下流で揖斐川と合

この工事は揖斐川の本流に堤防を築く工事のため非常に困難を極めたが、

明治三五

揖斐川「津屋川分流」説明板(養老町大巻・高柳堤防上)

水門設置が計画され、昭和二八年に工事が始まり、待望の逆水水門が昭和三四年完成

飛躍的に浸水被害が軽減され現在の一大穀倉地帯が形成された

また、ここは木曽川上流工事事務所と下流工事事務所との河川管理の境界となって

その後、導流堤の下流端(南濃町上野河戸地先)に揖斐川の逆水を防止するための このことを記念して、ここに「損斐川改修工事成功記念碑」が建立された。

# 牧田川、杭瀬川の分流

事物から、結局はほとんど何もされなかつだ。そのだめ、地元民はかねがねこの狭さ 流しており、さらに金草川・小畑川も合流し、灰さく部となっていた。 く部の拡張を強く願い出ていた。 を占言われているが、ここの工事だけは、関係精中や地元民の意見が合わないなどの このような背景から、ようやく大正十年より始まつた国による木曽川上流改修の区 宝度治水工事の擦この烏江・高渕付近の狭さく部拡張工事は主力工事の一つであっ **鳥江・高洲付近は、牧田川の河床勾配が急に緩くなるところで牧田川と杭瀬川が合** 

域となったが、財政難等で工事は進まなかった

後の物価高、資材入手難、労力不足等多大な苦労のすえ昭和二五年三月懸案であつた し、育割提により分流し下流の船附において合流させようとするものであった。また 拡張し、また同地点で牧田川に合流していた杭瀬川は、牧田川に併行して新川を開削 牧田・杭瀬両川の合流点付近と大垣市高渕町地先の狭さく部一〇〇〇m区間の川幅を 即ら)がつくられ、昭和一一年二月待望の狭さく部拡巾工事がはじめられた。工事は 適中戦争で一時中止されたが、地元の熱心な援助、協力により工事が再開され、 しかしその後、たび重なる地元の要望により牧田川下流改修促進委員会(佐竹直大 牧田川「牧田川・杭瀬川の分流」説明板(養老町烏江堤防上)

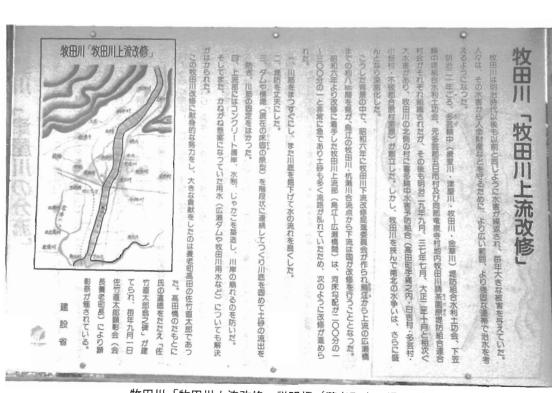
小畑川は杭瀬川に合流させるようにした。

『高渕抜』工事は竣功した

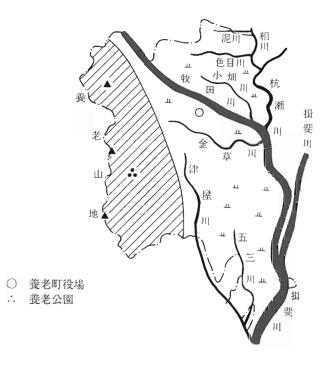
牧田川と杭瀬川の背割堤上に「牧田・杭瀬川分流竣工記念碑」がある。

建

設



「牧田川上流改修」説明板 (養老町高田堤防上)



養老町を流れる小河川の略図

#### 多芸・喜多輪中の支川 の 昭和改修

 $(\Xi)$ 

流し多くの被害を与えます。 おいて牧田川に合流する。 イ 金草川 ίŧ 多芸輪中の 牧田 北隅を流域とし、 ፲ が増水する時は金草川 江 栗笠に へ逆

年に完成しました。 この川 の改修は昭和一六年 改修の県当初予算は二一二、〇〇〇円で 九 四 から始 め昭 和二二

工事区域は、 右岸栗笠より岩道、 左岸鳥江より 高 田 「まで、

区間合計 四時

の栗笠揚水機に連結して用水に供する 放流するもの 主工事 樋管の長さ一二六片で牧田川を伏越して杭瀬 (かんがい期には杭瀬 川の 水を逆流させて既

Щ

伏越樋管の長さ一六片 (烏江導水暗渠

水路 上流部放流延長二〇〇片 河床中 五 高位 部

水

路一五〇〇以、 たのは昭和二七年三月でありました。 金草川樋門 牧田川合流直前で金草川 河床中三~四・五 牧田川から逆水防止 樋門をつくり のために建設省事業とし

同 浦

の締切りを行 それは、

自

つ

六平方牍に及んでいます。 に合流  $\Box$ 杭瀬川 流域 は、 は 相川・泥川・ 市四郡 r J ったん豪雨になりますと、 に跨り、 色目川等の支川を合せて牧田 か んが 61 面積

進めました。

(排水の項で説明

増水の役にたたないため、

昭

和五三年

-から排-しかし

水機の設置

が 疏さ 八六七ばの 下 地 月二八日 修工事に伴う支流の改修として、 改修要望の声がたくさんありました。 し多大の損害を起すことがしばしばであり 61 流は小畑 元負担金約三分の の便をはかりました。 川底をふさぐものを通す) から着手することになりました。 地内、 間 I 事 内務省直轄施行。 は 河 道 改修区域は杭瀬川 の矯正及 をはかり流水をよくし、 昭 び河 杭瀬 和 幸い 川下流境に至る一一、 底 牧田川 年 0 の赤坂地内より、 ました。 工事費約三五 浚  $\overline{\phantom{a}}$ 渫、 九三六)三 の上下流改 悪水の伏 その ため かん 万円

堤起点附 補 年九月に当初計画を完了しました。 強と川幅拡張 堤 杭 防補 瀬川 護岸工 近から上流 強と川幅拡張工事 事 工事を行 は昭 0 祖父江 和二四 いました。 地内相 年 昭和五二年から牧田川合流背割 長さは六八一〇片でした。 九四 Ш 合流点に至る間 九 に着工し同二八 0) 堤 防

南部 でありました。 に至る八、 へ合流口の高水位停滞によって、 表佐 着工は昭和一一年、 泥川 相川 六の 室原 は、 は、 八三〇片、 、ます。 南 特に相 部 室原が養老町へ合併する以前は不破郡 垂井町国道橋から下流の小 + この 栗原東部 六 工費約四八万円、 崩 0 冱 Щ 合流点に至る約三歳は出水時 護岸工事と堤防補強を行いました。 0 地 氾濫は昔からで、 0 域を流域とする約八億 稲 室原の字北浦 作冠 水 で豪 地 畑 元負担金約三分の の杭瀬 া を中心 前 0 たび 述 0) 0 川合流点 毎に被 に表佐 下の栗 四村 に相 小 河 Ш Ш

共同で川の柳刈りを行った古文書も残っています。

たが においてもなお続い 特異な川であります。 たん豪雨ともなれば、 る地形で輪中を形 うって、 0) 冠 水地域 川の堤防は、 は 成することの出来ない ています。 相 すぐ溢流します。泥川 附近の稲田は出水の度毎に冠水が 川  $\mathbb{H}$ 0) 面より高さ僅 合流口に向って漏斗形になって 今まで河 ][[ 地帯であります。 かに一片位で、 改修 は、 は余り行 このような 今 わ  $\exists$ 0

昭和一一年、支派川改修によってようやく手がつけられま

ていませんでした。

した。

ました。 掘さく、 区間 『は相川合流点から上へ室原まで約二歳、 その主工事は左 護岸、 築堤、 河 道の一 0) 通りであります。 部付替等を行 流 工 水をよくし 事 は Ш 底の

築 堤 延長二九〇㍍

護 岸 延長三六七二片 内 粗杂護岸二八八八片 詰杭

二四三片 混凝土張五五〇片

取り 1) 六は 現 五 15 在 昭 この 年に あげられ、 昭 0) 和 泥 五 河川ではあるが、 和四八年 川は 漸 Ш 年(一九七六)から泥川大改修が始まりました。 < 0 絶えざる水害について、 「公共小規 級河川で県の管理下にあります。 県は部分改修に着手しました。 (一九七三) 模河 大改修工事として、 から陳情を重ね Ш 改修工 事 室原 0 栗原 多額の国 た結果、 指 定の その 前 運 表佐・十 述のよう 庫 び 初めて とな 補 昭 助 和

は を受けて、 この工事が行われることになりました。 その内容

- 1 着工 昭 和 Ŧi. 年 泥川公共小規模河川改修工
- 2 完成 末 定 平 成 元年に約半分程度進行)。
- 3 事業費全体額 二二億三〇〇〇万円。

年度予算三年間平均 約一億円程度。

4 改修規模 延長 (相川合流点から Щ 田川橋まで五二〇

用地買収 三六八〇〇平方以 Ш 幅 北浦で四五に 買収費一一 最上部で一 九〇〇万円。 

(5)

6 住吉用· 水堰 純経間 几 九以×扉高二·一五以×二

完成 鋼製魚形ゲー 昭和五九年五月(岐阜県土木部) 1 一億六〇〇〇万円

7 泥川 橋 長さ三五・三五片 巾三に 経費三八〇〇万

> 現 通

在 ŋ

は

級河

川で県の管理下にあります。

綾野地内で相川に合流する四鳥の小河

川であります。

昭

和

年

(一九三六)

の杭瀬川水系の諸支派川改修によ

橋ば 円 昭和六一年度完成

8

幸

長さ五

巾三ぱ

北浦

と室原

0

農

道

橋

く手がつけ

られました。

工事内容は、

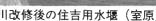
川床掘さく浚渫

9 Щ 幅拡大、 昭 築堤、 和六三年完成 川筋矯正、 六〇〇〇万円 護岸工事現在進 行 中。

力な 泥川 朩 原 て洪水の被害を軽減するものであります。 色目川 因は 改修 排 水機を設備するよりほかはないようです。 相 のねらい は 川の増水に原因するもので根本対策としては 日吉村豊地内より、 は、 下流を倍以上に川幅を拡げ 色目、 大坪、 しか 蛇持地区を 流水をよく しこの洪水 強



色目川護岸工事(大坪)



堰扉一・五パ田中用水巾五・ 木造扉捲揚式

1

内容は、

河 つ

道の て漸

局

部

付

用 排

水路の付替

樋管の付替等でした。

2 3 色目逆水止樋管 蛇持用水堰長五 樋管 高二・〇〇片 匹 001 高二・〇〇片 鉄 筋

クリ

この予算四万六〇〇〇円、 地元負担一万六〇〇〇円でした。

工等を行いました。 相川 昭 一合流点から上の養老街道橋まで三六三片の浚渫 和四二年 (一九六七) 県単事業として、 だの浚渫、粗朶柵 堤防補強を行い、

を行いました。 昭 和四五年度、 期工事として水路護岸工事と築堤工事

延長 継続中であります。 昭 和五四年 一、八一〇灯、 (一九七九)の県の色目川改修全体計画では、 事業費二億二三〇〇万円で、 現在も改修

工事であり、 全体計画は、 平 相川合流点から色目まで、 成元年度は大坪橋まで完了します。 主として水路護岸

達し 約○・五片を局部的に行いました。 昭和四九、 )溢流の所があったので、災害復旧工事により 五〇、 五一年と集中豪雨が続い て、 危険水位 堤 堤防の嵩上

八五以両岸、 平成元年七月~一一月までの低水護岸工事は、 水路幅三・八ば、 コンクリ 1 側板工事 大坪橋まで (工事

写真前ページ)を行う。

れなくなって湛水し、 田た 岸堤が溢流して、 いうことです。 色目方面の田 中な なお、 色目川は豪雨の時すぐに満水となるので、 (大坪西 色目川について一言したいことは、 水が一 平成元年九月七日の豪雨にも、 室原 同部落民が応急処置をしました。このよう Ö 斉に流れ込み、 水稲は冠水し被害を受けます。又それ 水田 溢流することが頻煩だと 0) 水は 豪雨の場合に豊、 色目 川沿 北野区域の Щ ・の小字 出 右

> 対策として、 小畑川は、 大坪、 宇田 室原は水越し場をつくっ 飯田・ 祖父江 江月・ てい 飯積 ます。 直江

0)

金屋関係輪中を区域とする小河川であります。 四日から始り、 て祖父江・江月・多芸東部は排水機を備えてい 増水で逆水を受けるので、 と合流する上流で杭瀬川と合流するため、 この小畑川 の改修は県事業で、 昭 和一八年度に完成しました。 水はけの悪い川であります。 昭 和九年 (一九三 T 水時 杭瀬 ます。 は杭 Щ 三月 瀬 牧 従 Ш  $\mathbf{H}$ 

0) 刑

経費 主工事区域 当初予算額九八、 小畑村江月~ 六〇〇円で内容は左の通りです。 祖父江間 五億

主たる工事 橋梁四か所 延長六〇片

水堰及床固

か所

延長一、 1002 樋管二か

料は手に入りませんでした。) 昭和四〇年以降も堤防嵩あげ工事を行いましたが、 その資

昭 和 五九年立案全体計画

全体計画 昭 和五九年~六一年 一、八八〇片 築堤工事、 一二〇百万円 名神高速道橋梁より上

昭 和五九年~ 養北幼稚園南まで。 六二年 板棚 護 岸工 事 飯 積 の光敬寺北よ

#### (8)谷 の 治

飯

田

部

落の

西端まで。

養老山地の扇状地を流れている谷川の水は、 出水時のほ か

悪水路付替水路工二か所

なると谷水や土砂があ は地中にしみこんで扇状地の地下を流れていますが、 えてきました。 ふれて、 田 畑や人家に大きな被害を与 大雨に

ます。 あり もあり にしてあり、 見の村では、 自普請をして砂防堤をつくり村を守ってきました。 は · 倉谷の扇状地域にある若宮、 家の西側に土手を築き、 道は畑より一片ぐらい高くして水が畑に入らないよう 一~二だぐらい低くしてあり、 村全体で水の被害が少なくなるように努力してい 二十町歩ぐらい 扇状地にある畑 ようにしてい 村の西側に舟見堤防をつくり、 ました。 0) は河原割 出水時の谷水の浸水を防ぐ家 畑の輪中ができています。 舟見、 今も当時の 堀とか堀道と呼んでい (二畝~七反) 小倉の村々は共同 谷水や土砂が 石づみ堤 若宮、 が して が残 ま 村 舟 で 村

防堤 は出来 村 苗 谷の推持は、 補助を受けて保安林を作り、 責任で取組んでいました。 の修理や下刈り、 なくなり、 昔は家々で行なっていましたが、 村で山組をつくり、 谷ざらえなどの作業を行ない 山の治水や谷の推持には 組ごとに義務人夫で砂 個 人の力で 植林も

神社の上で谷川の自然石ばかりでセメントを使わずからづみ 村 人十数名が半日間工事方法を揖斐郡へ学びにいき、はげ(が 明 一年に小倉谷のふとうとい I 一事や砂防工事をしました。 う所で地 大正七年には、 すべ ŋ がおこり

> 工事 の請負をしてい

**5** 四 結び体を横たえて部落 昭 ○はは越したときには、 和 一三年八月の集中豪雨時、 、の浸水を防ぎ、 村民は籔の竹を切り、 小倉谷の砂防堤を谷水 人家のない 、身体に 方の堤防 竹を



船見堤防 (小倉谷)

#### 赤岩神社の上のからづみ

#### 用 水

#### 1 自然用

て牧田 て支えられ 多芸輪中・ 川 津屋川の本流と、 ています。 喜多輪中の水田約三六○○☎の用水は、 その支流並びに、 地下水によっ 主とし

#### 牧田川用水

牧田 渇水期になると水不足となり、 用水の論争が絶えませんでした。 川では、 川を狭んで南北に二分して農地に取水するの 江戸時代から現代に至る

わたって起きつづけた水論争は全く聞かなくなりました。 うに樋門を改造しました。それ以後は、 広瀬ダムを建設して、 取水量も多くなり、 和 八年 (一九三三) から始まった牧田 取水口をここに移し、 南北公平に配水することの出来るよ 江戸時代から長年に Ш 取水口を一つに 改修によっ て、

川土地 b 7の用 牧田 水です。 改良組合用 Щ 北部水田 は 水 山田用水)と泥川、 広瀬ダム取水口から取水している牧田 色目 Щ 小 畑川 か

門によって乙坂用水、 の以 ダムの構築によっ に高さ一、 牧田 南 Ш 帯の 用水は、 八片、 水田 て、 基礎は岩板にたっ 牧田川左岸の喜多輪中と右岸の沢田及びそ かんがいのために、 牧田 流水を全部左岸の水門に集め、 川用水及び石畑、 Ļ 牧田 漏水を完全にふせぐ 川広瀬 沢田用水に分け、 機橋のすぐ下 分水樋

載

します。



ン式に川の

南岸へ導く仕掛

けになっています。 南岸でさらに沢田

それを

石畑

村

F 坂の 石畑

ユ

ム管で通し、

サ 0)

イオ )底を

地先で、

牧

田

Ш

沢

田

用

水はさらに乙

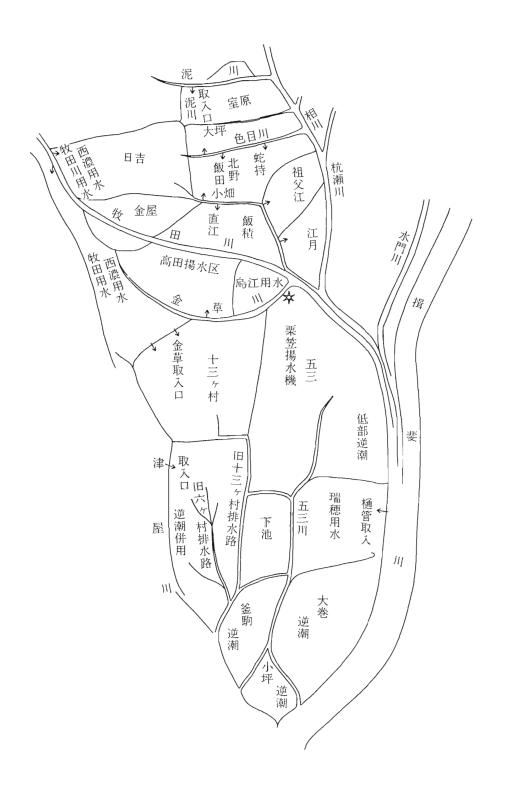
岸西北部の用水となります 余のうち、 井水に分けます。 多芸輪中では二五六〇鈴 一二四頁の図を参照)。 東南部一二八〇 これが南

然排水樋門は常に閉扉してあるが、 地区内水田へ流入し、 お余は海抜○、 充てることが出来るのです 即ち逆水を利用して、 (用水系統図参照)。 この潮 津屋川、 扉を開け かん 牧田 が ば川 63 用 Щ 水に 水は 0) 自

るために、 郷 杭瀬川から取水します。 用水」の行政訴訟が起きています。 ところが、 牧 田川右岸のかんがい 安田正鷹編「下立用水」対 昭和二〇年 は 九四五) この外、 に 次にその概要を説明す 笠郷では、 「笠郷用水」記録を掲 下がったて 用水」 干害時 対 には

#### 「下立用水」 対 「笠郷用水」 の 行政訴訟

昭和二〇年(一九四六)一〇月一九日、 当時の笠郷村会に



た。 訴訟を提 お て、 笠郷 起することを議決し、 村 が原告となり、 盲 岐阜県知事を被告とする行政 年一一 月六日 に受理せられ

でありますの 訴訟は笠郷 で、 その概要を述べます。 地区五百町歩の水利につ Vi 7 0 重要な歴 史

草村 'n 多くなり、 から 昭 和 水源を杭 (横曽根を除く) 大垣 二年 作の杭 水門 瀬 (一九三五) 川に変更したのである。 川 0) 瀬川に変更された。 水質が汚濁され、 の灌漑に支障を及ぼすことになっ の頃、 大垣市内の下立用 これは大垣市に工 元安八郡 州 本村 水 0 たか 同浅 場が 取 水

D

から専ら杭瀬川の て、 は たのであるが、 (栗笠・上之郷 笠郷村 灌漑に充ててきた。 牧田川に仮締切を設け、 は 牧 田 また金草川にも取入口 下笠: 川に取 流水を水源としてい 大野 しかし、 水口を設けて灌漑用水を取水 船付用· 0 牧田 用 水は 水は Ш が 牧田川 金草川 あり、 1= は殆 を逆流 ど流 から、 かんば 水がない 点せしめ その つ時 して 他 来 12

江用 これに対 郷 郷 水することになるの 用 水 笠郷村長と高田町長が県に出頭 0 水に不安を与えないことを約束した。 鳥 江 ような笠郷 烏江用· 用 して県 水が 不 は 水に支障のないようにしてほ 足する場合には、 用水にとって、 は 経済部長名で回答を与え、 脅威であらねばならぬ。 新たに下立 下立 書 用 水を制 一面を提出して 用 笠郷 水 これがため と申し出た。 限して、 が上流で引 用 水 笠 笠 鳥

> 締切 ことになっ たが、 用が出来ないところから、 渇したため、 笠郷 を無謀にも実力をもって啓開 両者の間に水争いとなった。 昭 和 鳥江としては、 たが、 九 慣例によっ 年の 下流で取水をする横曽根用 か んば て牧田川 県の回答によって、 大挙して船付用水に押 つ時になって、 L に仮締切を設けて取 水を流して引用 杭 水が、 瀬 応安堵. Ш T) か 用 流 水の 小水する け したた して 水 が 仮 引 涸

であることを確認 たのであって、全く杭瀬川を上流で引用する下立 題であった。 このような水論 は Ļ 笠郷 笠郷用水としては、 用水五百町歩の生死に関する重要 未だか 用 つてなか 水 0 影響 · つ

訴訟の内容は

間

を引用をすること。 下立用水は引用を差控えて、 から、 (--)笠郷用水は下立用水に優先して水を引用する権 これを確認するとともに、 笠郷用水の支障の 笠郷用水に<br />
不足するときは ない範囲で水 利が あ る

ることができること。 (=)笠郷用水は、 用 水引 用 0 た め に必要な時 は 仮締 切をす

ことを主とした主張 であ 0 た

仮締切の費用は下立用

水で負

担

する。

せら 野 後八も調印した。 昭 和二三年原告 立会人として、 被 医告の間 大垣 市 13 和 長 Ш 解 井 が 成立 岐阜県議会議長水 和解 証 書 かず 調 £Π

#### 和 解 証 書

用水に優先することを認める。 被告は 原告に対する旧慣 による笠郷村の用水に対し下立

用は被告其の他に於いても相当額を負担すること。 して取水堰を設置することを認めること。 障を生ぜし場合は 被告は原告に対し将来杭瀬川の水位が低下して用水に支 「サイホン」 の下流に於て他の水利を考慮 但し之に要する費

右 通を所持するものとす。 通り 和解が成立したから各関係者はこれに捺印署名 し各

当時者 笠郷 村長 安田 Œ 噟 钔

当時 岐阜 中県知事 武藤 钔

立合人 岐阜県会議長 水野後八 钔 钔

立合人

大垣

市長

川井

ことを認めたのである。 和 条項の は、 笠郷用水が下立用水に対して、 優先する

合がある。 切を行わないと、「サイホン」から取水することが出来な ころであり。 した場合には 口の下流に永久構造のものが設けられ、 ることである。 し得ることと、 和解条項の二は、「サイホン」の下流に於て、 この仮締切も和解条項の効果として認められたと 笠郷用水は河川法その他の手続きを俟つまでも この固 この和解条項に依る堰は その費用は県其他に於いても相 定堰を基 礎として、 杭瀬川の水位 「サイホ 更にその 取水堰を設 当額を分 ン 上に仮締 が低 0 取水 担 場 す 置

> する経費は、 これを実施し得るわけである。 下立用水に引継いだ大垣市が年々負担 またこの仮締切りに要 して今

に至っている。

る。 改修工事の出来るまでは、 たもので、笠郷用水の取入も重要な目的の一つである。 の牧田川と杭瀬 ら その後、 今日見る「サイホン」 この上下流 牧田川改修工事のために、 Ш は、 帯にかけて、 横曽根のはるか下流で合流しているが はこの改修工事として、 高渕権現裏で合流していたのであ 河川 の状態が一変した。 「サイホン」の所在 設けられ 今日 地 か

#### 2 揚水機の設置

けでは不充分の上、 かかって農民達は苦悩がたえませんでした。 町 0) 洒端 部 の牧 田川 砂礫地のた田川の以北、 北 ため漏水も多くし 以 南の 地は稲作に自然用水だ ばしば干害に

干害地方では、 の増産は重要政策の一つとなって、 精巧でないため故障が多く、 があって大正二年に、 の水不足を解消しようとしました。 その後、 石畑では大正三年に、 干害による不作は殆どなくなりました。 昭和に入り、 水不足対策として、 石油発動機の揚水機を備えつけて、こ 終戦後になると、 池辺では部分的に水不足を生ずる田 廃止のやむなきに至りました。 揚水機 農民の増産意欲も高まり しかし、 食糧不足による米 0 当時では機械 設 備が急に増

もできて、 また、 最近は用水にパイプライン方式を採用し 自由 に給配水しているところもあります。 る地

#### 農業水利事務所が設置され、 ました。そして、 これを推進するために東海農政 昭 和四四年二月一八 H には、

計

画用水は、

揖斐川

0

水を揖斐川

町

首口 か

で取水した水を西部幹線路により、

池 圌 島頭  $\blacksquare$ 

町

B

)垂井町 の右岸取

を経 水

数	揚水機管理組合名	揚水機数	数		揚	水機	管理網	组合	名		揚水機数
1	島田揚水機組合	4	14	瑞	穂	土	地	改	良	区	4
2	下高田揚水機組合	4	15	釜	段	土	地	改	良	13	5
3	押越土地改良区	3	16	笠	郷	土	地	改	良	区	18
4	押越東部水利組合	4	17	大	野	揚	水	機	組	合	1
5	烏江土地改良区	4	18	飯	EH	揚	水	機	組	合	3
6	石畑土地改良区	16	19	大	坪	揚	水	機	組	合	7
7	牧田川用水土地改良区	1	20	蛇	持	揚	水	機	組	合	3
8	養老西部揚水機組合	4	21	祖	父	江:	揚 水	機	組	合	1
9	竜 泉 寺 揚 水 機 組 合	3	22	牧E	日川	北部	多芸.	上地	改良	ĮΖ	17
10	飯ノ木揚水機組合	1	23	8	吉梭	疑械	用水	利力	刊組	合	82
11	上多度東部土地改良区	3	24	室	原	土	地	改	良	X	16
12	小坪土地政良区	1									
13	大卷土地改良区	5		合						計	210

#### 現在用水の取水状況(養老町内)

地	X	別	現在用水状況
高		Œ	金草川馬場川、牧田川土地改良組合用水及びパイプライン使用 (押越地区) 除川・新川・金草川より取水(高田・島田・下高田地区) 不足 分は揚水機 パイプライン揚水機使用(烏江)
養		老	牧田川土地改良組合用水及び石畑井組用水より取水 (沢田・桜井・上方・五日市・竜泉寺・勢至・石畑・明徳・柏尾) 西濃用水を石畑組用水路へ増加、揚水機
広		幡	金草川より取水 (ロヶ島・大跡・西岩道)、津屋川の一部と源氏 橋附近の涌水使用 飯ノ木の不足分は揚水機使用 大跡・岩道 では自噴水も使用
上	多	度	津屋川より取水(鷲巣・小倉・一色・有尾・田村・横屋地区) 東部土地改良地区の下池水路からポンプアップしてパイプライン 施設は田村・横屋
池		辺	牧田川の逆水により取水(大場本田・根古地・瑞穂・大代)(注 屋川の逆水により取水 (小坪・高柳・大巻) 旧十三ヶ村落江より取水は釜段 不足分は揚水機
笠		鄉	金草川より取水(栗笠・船付・大野の一部・上之郷・下笠)津 屋川及び飯ノ木方面より流下の余水 (三ツ屋) 干魃時は杭瀬川より取水、不足分は揚水機
小		畑	色目川より取水 (大坪・蛇持) 小畑より取水 (飯田・祖父江・江月) 不足分揚水機使用
多		芸	小畑川より取水 (飯種) 揚水機使用 (金屋・直江・飯種)
B		吉	牧田川土地改良組合用水と西濃用水、不足分揚水機(橋爪・字田・中村・新宮・豊・安久)
室		原	泥川で大部分、西濃用水 锡水機

3 消するため、 により地下 近頃 西濃用 ô, 水の 人 水 農林 不 0 足は 省において西濃用水建設の 増 加 年 々深 I 場 (刻となっ 0 進出、 農業用水の汲み上げ てきました。 計 画がたてられ 以局西濃 これ を解 用 西 水

> 濃用 関係町長、 業に協力することになりました。 事業として進められ、 水協議会が発足し、 各土地改良区理事長の 昭 会長には大垣市長森直之、 和五八年度に完成しました。 この計画 町村代表等がなってこの は、 農業用 委員に

水の国

事 は

— 122 —

用水路 五. て養老町に入り、 竜泉寺 線はさらに牧田 カウ 既設 取付け、 0) -勢至-耕地をかんがいします。 0 Ш 五二㎡で、 一石畑へと毎秒○、  $\boxplus$ 田水路 石畑支線水路となり、 Ш 象鼻山 を横断して養老地区に入り、 日吉並びに室原地区七一二診を潤 に取付け 麓の別所から橋爪に至り、 山田支線水路に、 九一 桜井 mの用水を供給. 上方 石 此 —五日市 畑井水組 分 処に 岐

では幅一・ 西 水 路は 濃用水建設負担金の養老町分と経常費負担は次の通 日吉地区で幅二、 ナハメー、 高さ〇、 九 五 石 畑 地 区

養老町 西濃用水費用負担金 分の建設費と経常負担 額

和 五 九年度 度 四七、 建設負担金額 〇四六千円

昭

六〇年度 三九、 八二一千円

年度 四五七千円 償還開始

経常負担 額

区では約三〇〇万円を負担する。 年額約六〇〇万円にして二分の一を町助成により、 関 係 地

ますが、 って数人の職員を置き管理運営業務を行っています。 合に移されてい この西 完成した現在の管理運営は、 濃用水は農林省が計画し国費で施行 ます。 事務所は揖斐川 町 西濃用水土地改良区 E 岡島 したもので 取 水水 年間 にあ 連  $\mathcal{O}$ 

ます。

又送水は末端まで約二時

万円であります。

現在

の送水量は最大量 間

七割に

制水して

養老地区)

は水不足が甚だしく、

不作の年が多いため、

これまでの、

養老町の稲作は、

特に西北部

(日吉・

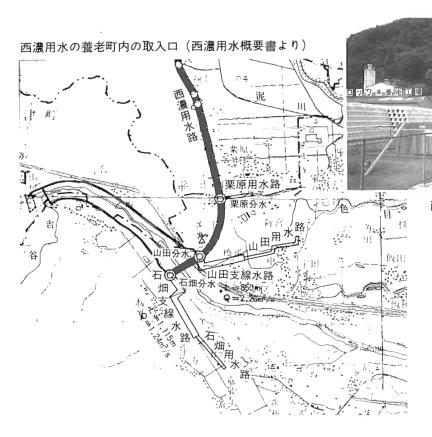
室原

かかるということです。



揖斐川岡島頭首工(西濃用水土地改良連合より)

— 123 —



西濃用水取付口 (橋爪、象鼻山南下)

どの

対策に心掛

7 牧

来  $\square$ 

まし

た。

n

でも、

な

お、

で 0)

は

な 置

このたび養老町

は

西 そ

濃

水

計

加 分

じまし

た。

対

策とし

Ж

用

水

0

最

大限

0

利

用

揚

水 充

機

設

な か

これで西北 たので、

部

の干

害

地

は

漸

救

わ

n 用

かて

か、 0

今 画

H 12

で 参

は

水不

足

を殆ど聞かなくなりました。

#### 排 水

Ξ

を二分して東に流 下 抜 は 養 011 老町 0 徐 々 地先に至り に か 0 牧 ら一川 地 勢  $\mathbb{H}$ Щ は 揖斐川 4 0 低湿 津 北 養 屋 兀 と合 老 地 Ш 高 帯 に自然 安八の 東南 流 が 多く します。 排 低 水され なり 郡境を南下 、ます。 輪 東 てい 中 南 内 部 ます。 0 牧 滞 行  $\coprod$ 水 Ш 根 は は 程 古 て 町 低 平 地 内 — 124 —

けて し大被害を蒙ります。 Ш 牧 ち は 等 明 た 田 早 治 め け Ш か 、ます。 に必 時 口を失って、 共に増水 は 代になると、 支流 排 死の工夫と努 水機を取 13 この痛手は昔 0 泥 た 大洪水となります。 ん悪 ][ 'n 低湿地帯 Ź 機 殊 相 天 n 械 力を続けて来ました。 に 候 Ш たの 池 0) か が 発達は 色目 辺 ら繰り返され、 か 続 が 地区は毎年の ら次第に増水して、 Щ 著しく、 大巻の 多芸・ 杭 降 瀬 雨量が多く 山 Щ 住民は日  $\boxplus$ これに目 ように **喜多輪中** 貞策であり 小 畑 被害を な 問 稲 Щ をつ 題 は が 水没 解 金 ま け 受 決 水 草

養老町内排水機の 第 した。

 $\langle$ 

常

#### 養老町排水系統図



番号は「養老町排水機一覧表」(次頁)参照

この排水機はどうなったか

養老町排水機一覧表

	<b>愛</b> 老町 排水機一覧表													
地区	地区名	排	: 水	排水	原真	助核	践			ポ	ン`	7°		設置年
番号	1RIV 4	機	名	面積	PS	E	М	径	斜	渦	軸	Н	Q	月日
3	高田	下	高田	ha 253.6	100 50		1	800 600			1	m 3.5	m³/S 2.0	昭28
4	鳥江	息		70	50		1	600			1	3.3	0.7	昭29
	18+3	-	·+Ξ	-	125		-	750		-	1	0.0	5.86	四日 8
(5-1)	ケ村			600	150 440	1	2 2	800 1.350	1	4	1	4.7	8.0	26 昭49
6	A 3	小大		880 525	150 150 550	2	2 2	800 950 1,400	2	2	2	3.0	6.0	昭26 大11 昭44
	旧六				165	Г	2	950	-			4.7	3.6	昭37
7	ヶ村	5	村	511	133		2	1,000	2		2	5.8	4.0	昭53
8	瑞利	珠	一種	180	166		2	800	2				2.4	昭51
					100		2	650		2			1.25	昭23
9	大 巻	大	卷	299	100		2	700	2	2		4.2	1.9	昭35
10	小 坪	1	、坪	40	50		1	500			1	3.5	0.545	昭21
(11)					80		2	600	2			5.1	1.4	昭33
(1)	釜 縣	釜	驹	130	133		2	1,000	2			5.8	2.0	昭52
4	色目川	色色	月川	316	165 125 266	1	2	900 800 1,200	1 1 2			4.0	3.0 6.0	昭29 昭51
(6-1)					40		1	400		1			0.38	
	江 月	Ι	. 月	73	106		1	700		1	_	6.0	1.0	昭52改
6-2	祖父江	祖	父江	51	50		1	500			1	4.1	0.48	昭36
(5)	多芸	3	一芸	180	200		1	950	1			0.6	1.7	昭37
(5-2)	旧十三ヶ一村	1.	地東部	70	50		1	600			1	3.3	0.7	昭29
(5-3)	"	IE 東	下地	70	30		I	550			1	2.6	0.5	昭 8
(7-2)	旧が	1.		84	70		1	800			1	3.0	1.2	昭35
(7-3)	,,	下第	-	15	15		1	340			1	3.1	0.15	昭27
(7-4)	"	下策	-	15	15		1	340			1	3.1	0.15	昭27
6		大新		61	15		1	450			1		0.3	昭38
	自然排水区域													
1	金草	Ж						1	泥	J	ı			
2	五日落	市江		_				2	伤	目川				
18 11						_	+		2	- /	1			
12	津屋	Ш					(	3	小	畑川	1			

連式蒸気機関の 努力によっ 治二七年 て、 (一八九四) 排水機が設置されました。 高柳地区に、 大巻の先覚者山田貞策の献身的 我国においても二番目という水

朽化するので、 昭和と年を追って、 大革命をもたらしました。 この 排水機設置は、 より大きい完全な排水機に改善されてきます。 排水機が新設されました。 大いに効果を発揮し、 その影響は大きく、 低湿地農業に一 明治 又旧設備は老 ・大正

## 旧十三ケ村地区県営湛水防除事業

械に取替えられました。

プに改造、蒸気機関も改造し、その後昭和

一四年県事業によって新機

初めは三〇馬力水車式であったが明治四五年に二〇吋両吸込渦巻ポ

段排水地区)となっています。 占める低湿地で総面積六八五鈴、 本地区は、 地区標高は西北部で五・四 養老町及び南濃町の多芸輪中西北部と中位部を 5 受益面積三五〇おでありま トメルし、 中位部で〇・七片(二

-126 -

六年地 月 O) 0 の豪雨には甚大なる湛水被害を被りました。 増加で、 水位上昇と、 地 X 盤変動対策事業によって設置された五 内には、 段排 排水不良となり、 水機 地区内地盤沈下及び、 昭 があり 和八年養老郡 ますが、 昭 南部 和三四年八月、 最近 排水改良事業と、 地区内整備による流量 排 水河 川である津 台の排水機 昭 和三六年六 昭 屋 和二 H

たてました。 〇・二点上の 三二三・一程を降雨があった場合、 画 0 概要 湛水時間を三六時間以内にする様に排 前述の被害を防止するため、三日間 基準田面上の許容湛水深 水計 連 続 画 N 量 を

があります。 三ヶ村 水しているが、 本地区の排水は養老町飯 排 水路 を流 この中流域左岸に二段排水地区 れ 南濃町 駒野 グオ 新 ・大跡部落より約七歳 田 地内で津 屋川にポ (下池東部 ンプ 旧 排 +

た。 水量 湛水防除 四匹 八・ 年、 0 駒野新田地  $m^3$ 農業経営の安定と高度化をはかることにしまし s と、 内に排 排水路の一 水ポ ンプロ径一三五行上二台、 部三一〇〇片の改修により 排

造り、 六年度の二か年で、 計を四、 Ι. 鉄 事 建 筋コンクリ Ō) )概要 築面積二五八平方はの上屋建築工事を一三三、 ○○○千円で計画しました。 昭 和四四年に事業計画の採択となり、 ト造りの機場工事及び鉄筋コンクリ 長二六・ 五片 巾三二・二片、 昭 和四五年より昭 高六 実施 〇 五 和 設 九 几

> 千円で施行 しました。

アル 昭 トパネル舗装を延長二、 和四七年から三か年で排水路の改修工事として、 七一五点、 一九四、三二五千万 アスフ

円で施行しました。

施行しました。 排水ポンプ二台を債務負担行為にかけ、 この間、 、昭和四五年より同四八年にかけて、口径三五 八八、六六八万円で 一〇パリトル

## 3、多芸輪中用排水事

な箇条が見えています。「抜井ハ輪中最大利害ニ関スル 排水に悩まされていました。 レ (一八八三) の多芸輪中水利土功連合会議案の中に次のよう この地は 域は年々西北地 におい そのため、 ては用水、 たとえば明治 東南 地 に お モノナ 六年 ては

ノヾ 該取締規約を遵守スルモノト ス

抜井所持者ニハ鑑札ヲ付ス現場ニ棟木ヲ置

乱リニ 抜井ヲ掘ラナイ

隠掘ヲ見ツケタトキハ速カニ埋 一壊ス ル

抜井ハ一株ニツキ三十円ヲ差出スコト」

などとあります。

やたら抜井をすると一年中水が噴出して排水に困るから制 限

も止む得なかったのであります。

は湿潤であります。 当時 四〇〇鈴で標高は約 の多芸輪中内 0 用排 水の状況 五以程度 い況をみ ると 排水不良のため一帯 面 積 は およそ

・ません。 あります。 所 々に小 自然排水が悪くなって湛水が数日に及ぶこと 排水機が設置されていますが効果はあ

ŋ

可という状態になります。 用水についても、 旱天時には牧田 川も金草川も取水不

事業が昭和五年 このような状態では、 から始められました。 放任することが出来ないので用排水

成に伴 にしました。 排水伏越の下流において、 揚水し金草川右岸に逆流させ、 なくするために杭瀬川を金草川沿いに導き、揚水機を設けて に排水機を設置して連年の湛水被害を除去し、 水機を設け、 水して用水源にします。 旧十三ヶ村落江排水幹線を改修し、 逆潮 又池辺排水幹線を改修して、 か んがい ・を行い 他の低地に対しては、 烏江用水幹線、 現在ある両江普通水利組合の 用排水の完全を期すること 津屋川吐 同様に津屋川 笠郷用水幹線に分 さらに干 排水施設の完 におい 吐 て排  $\Box$ 

ました。この結果、 養老町 の事業は長い年月がかかって、 内排 水機 この地域 の 0) 灌維排 昭和四二年に漸く完成し 水が大改善されました。

#### 1 小坪排· 水機

は 治三九年 縦軸片吸込渦巻 (一九三一) (一九〇六)の創設 一五卍低圧モーターに改めた。 ( | O + ) ポンプ二台であっ 一五馬力蒸気機関ポンプ 昭和二三年 たが、 昭和

> にゆ五〇〇行に Q=〇・六t/sに改造して現在に至っています。 軸流ポンプ(西島製)三〇タテーモーター

## 釜段駒野新田排水機

舎)二台Q=一四六t/sに改築されました。 六〇〇億星堅型斜流ポンプ二台荏原式と八〇円 業により旧施設を撤去し、 後モーターに変更、昭和三二年(一九五七)地盤沈下対策事 蒸気機関、 明治四二年(一九〇九) ポンプは二二だの横軸両吸込の渦 設置のポ 既設排水樋管を補 ンプで原 強利 巻ポンプ二台で 動機は八〇 電動 明

生じ、 排水路を水管で跨いで増設排水槽へ放出する構造であります。 電機製)一台Q=二・〇t ○○行≒堅型斜流ポンプ(荏原製)一八○≒≒モーター その後、 昭和五〇年(一九七五)より五二年にかけて、 排水条件の変動により、 /sを現機場の前遊地内に設置 排水機能. 力增強 φ () (冨士

#### 3 瑞穂排水機

込渦巻ポンプ二台であったが、 されました。 大正二年 (一九一三) 蒸気機関九〇馬力一台、 池辺北部耕地整理組合によって設置 五三排水機と合併し廃止され ポンプは二六吋

ました。 台排水量一・五六t 横軸渦巻ポンプ(荏原製) その後、 昭和四八年にこのポンプが能力低下をきたし、 昭和二五年県営灌排水事業によって中六〇〇汽ニ /sを新設し五三土 一〇〇��ディーゼルエンジン各二 地改良区より

の必要を

<u>一</u>台 効力を発揮しました。 行によっ に運転可能となり、 の被害漸増したので湛水防除事業によって、 . 旧 機場を撤 て二か年にわ 電 動 機は三菱製一二五路上二台排水量二・四 百 本堤掘割樋管新設工事は建設省の委託 その施設の規模は中八〇〇つにポンプ 五一年九月一二日の豪雨に充分にその たり実施 昭 和 五. 昭 年 和 四八年~ 九七六) 五

## ④ 旧六ヶ村排水機

sであります。

三〇吋 五. t 策事業によって、 昭和三六年度に設置しました。又昭和二六年度に地盤沈下対 ر ا برا 年 地 電気商会製であります。 運転するものです。 吸込渦巻ポンプ一〇〇Hモーター に排水機場は二か所に設けられました。 排水するものであります。 一二五歳がモー 盤変動対策事業と災害復旧事業の合併施行で、 (一九五九) 八月根古地決壊により水没し復旧を断 昭 の二双樋地点でφ九五〇雲上堅型軸流ポンプ(久保田 /sを増設しました。 和三年に設置されました。 横軸両吸込渦巻ポンプ二台を一〇〇 一台一五〇円ディーゼル一台 · タ ー 二双樋地点に4八〇〇行 堤内の水槽へ吐出し閘門を通じて津 (日立製) 二台、 その後、 その後 前者は西島製作所、 二型式のポンプを採用 これらのポンプは昭 歯車電動であり。 地盤沈下、 排水量三・六t 一方は四 (新潟鉄工製Q= )Hモー た横型 外 -ター直 上流約四〇 水位の上昇 軸 後者は奥村 五吋堅型片 流 他方は した為 s |念し、 和 ポ 屋川 結で を JU

一八○W二台、排水量四・○t/sであります。台(久保田製)原動機は直結型一八極水密モーター(東芝製)度に機場完成、この規模はφ一○○○≒≒筒型斜流ポンプニ九七四)湛水防除事業により排水機工事に着手し昭和五三年圃場整備等によって、湛水被害が増大したので昭和四九年(一

堅軸片汲込渦巻ポンプが存在していたが、これも廃止しましまた、ここには、大正四年設置の五○Hガス発動機一八吋一八○㎏二台、排水量四・○t/sであります。

## ⑤ 五三 (笠郷、池辺) 排水機

た。

ます。 場外に放出する機構で機関は英国製、ポンプは奥村製であり、一川で三八吋横軸両汲込渦巻ポンプニ台で排水錬鉄管にて、大三円で三八吋横軸両汲込渦巻ポンプニ台で排水錬鉄管にて、を対象として根古地排水機を合併設置しました。蒸気機関ニ大正一一年(一九二二)笠郷、池辺六五〇町歩(六五〇㍍)

県下 年に完成しました。 ターを装着し、 このモーターを新潟鉄工製の 海地震による地盤沈下の結果、 ポンプ二台には、 交換し新たに設置されました。 五〇円電動機二台に換装されましたが、 昭 和二三年 初の事業として行われ、 (一九四八) 排水量三・〇t/s さきのポンプを取り外した一五 瑞穂区域が独立しましたが、 これにより、 ゆ八○○行 地盤沈下対 五〇円ディ の増設を行 この事業により、 さきの蒸気機関は 策事業が発足 た可 ゼ 変翼横型軸流 ル 0 エンジンと ) H の 昭和二六 モー 南

度より事業に着手し、同四四年度に完了しました。湛水防除事業着手の気運も高まり、昭和四〇年(一九六五)昇し、地区内の圃場整備は昭和三四年の水害から急に進み、その後、地盤沈下は継続して進行し、津屋川の洪水位も上

常上電動機二台(富士電気製)で排水量は九、二t/sでありプはφ一四○○行上、堅型斜流ポンプ二台(久保田製)四六○る計画で、新たに一六一五片の導水路を新設しました。ポンる計画で、新たに一六一五片の導水路を新設しました。ポン事業の内容は機場の位置を江橋地内とし、牧田川に排水す事業の内容は機場の位置を江橋地内とし、牧田川に排水す事業の内容は機場の位置を江橋地内とし、牧田川に排水す事業の内容は機場の位置を江橋地内とし、牧田川に排水す事業の内容は機場の位置を江橋地内とし、牧田川に排水す

### ⑥ 烏江排水機

四 t / s で七○診の排水を処理していました。 で七○診の排水を処理していました。 横型軸 ではいたが、排水は、取水樋管を通じて金草川へ排水していた。 したが、排水は、取水樋管を通じて金草川へ排水しました。 したが、排水は、取水樋管を通じて金草川へ排水していた。 したが、排水は、取水樋管を通じて金草川へ排水していた。 したが、排水は、取水樋管を通じて金草川へ排水していた。 したが、排水は、取水樋管を通じて金草川へ排水していた。 したが、排水は、取水樋管を通じて金草川へ排水していた。 したが、排水は、取水樋管を通じていました。

建設省による金草川 となりました。この 位も上昇し、地区内 しかし、近年排 九月一二日の水害を転機に実施の方針に固まりました。 意向 統 が 水本川 治来ず 排水機 時、 0 地 金草川 盤沈下も加わって、 杭 の計 瀬川 難行しました。 の内水排除の要望もあって、 の水位上昇により金草川 画が立案され、 昭 湛水被害も甚大 和 五 進捗しました 年 <u></u>
一
九 の水

> した、 区と合併し高田 方湛水防除事業として農地 湛水防除計画は次の通りであります。 地区として計画立 排 案し、 水の問 題もあ 昭 和 五二 ŋ 一年申請 高 田 ぎ 地

設置場所 養老町丑墳地内

排水本川 金草川

排水機增設 中八〇〇音之×九〇霑之×一台Q=一・四

t / s

算べ絡 三〇〇~ 排水機吐出樋管は下高田と共用

導水路 三〇〇片

この結果は金草川排水機(国営)設置にか

わり

、ます。

### ⑦ 下高田排水機

北を牧田川

南を金草川左岸堤、

東を烏江

輪中

<del>.</del>堤

(杉

上記 ます。 り 丑 墳・ てい 雨に際しては一 に到達し、 だちに除川堤外金草川 高位部排水路の除川をもって南北に二分され、 流下するが楽野樋門から流出する南部区域は樋門を出て、 角状地帯は高田市街部を含めて形成されるこの排水区域 をもって包まれ ますが、 の通り自然排水にも少しでも有利になるように配慮され この内、 高田・ 栗笠用水樋管を逆流して杭瀬川へ流入しています。 地 楽野の 面白海となります。 区標高は 除川は高田樋門より金草川をへて、 西高位部は牧田川 と瀬割堤により 自然排水樋門により金草川 三・四以 昭和二八年 (一九五三) 〜五・○旨位で一たん豪 が併行し、 金草川 に挟さまれ それぞれ 牧 田 牧田川 ፲ 排 右岸堤 水され は た三 西

の改修を完了しました。本事業は次の通りであります。年までに、排水機場を完成し、同三〇年に地区排水路と除川より団体営灌排水事業として、排水機の設置に着手、同三〇

円に一 盤沈下、 の上昇、 水害には苛酷な連続運転のため、 水状態は極端 によって一応の 七t/s 排 水機の流域二五四鈴、計画雨量二六〇春上、 Ŧi. H 更に圃場整備の実施に伴う流出率の増大等により 到着 ポンプ(荏原)エンジン ◆六○○≦☆軸流ポンプ 間湛水し、 流ポ に悪化し、 時の早まりによる自然排水量 成果を収めましたが、 ンプ 一○○鈴余が収穫皆無の状態となり 一〇〇叶ディーゼル各 去る昭 和 エンジンが故障し、 Ŧi (新潟鉄工) 五円ディー 杭瀬、 年 0 減少、 牧田 九七六) 、排水機 ゼル 以上の完成 Ш Q 地区 0) 九 洪 地  $Q = \bigcirc$ **ゆ**八 水位 区 月 0 ŧ  $\bigcirc$ 排 地 0

した。さらに、これが国営金草川排水機設置に発展します。江と合併し、高田地区として排水機を設備する計画になりまこれが契機となって湛水防除事業実施の気運が高まり、烏

## ③ 金草川排水機(国営)

きい。この 金草川 又養 は牧 は 金草 逆水 老 Щ 田 の被害除去のために昭和二七年 Щ 地 Ш . の の各谷川 牧田川合流点において逆水止 洪水による逆 よりの 流水による氾濫 水が昔より今日 (一九五二) に続 0) 樋門をつ 被害も大 €1 てい

> あるが、 穂・下池へと順次流入し、 ては、 くり締切りを行いました。 して湛水防除事業を計画完成させました。 対処するため五三・旧十三ヶ村地区は、これを他動的 除」より多芸輪中へ溢流し、この 自流による河道内での貯溜 昭 和三四年(一九五九)、 甚大な被害を起しました。 通 常の降雨による出 の結果、 同三六年の異常出水 ため旧十三ヶ村・ 上流の通称 水に 五コ は これ 原因 「アホ に際 瑞 が

排除事業に繰入れ、 の計画は次の様です。 盛り上り同五三年度に一 になりましたが、 買収の困 金草川排水機設置によるポンプアップを計画し建設省の内水 一年に六、二五 方養老町においても溢水の原因を抜本的に除去するため 難と住民の意志統 昭  $m^3$ 和五二年 (一九七七) 再 実施の運びとなりました。 /sのポンプを備えつけました。 部着手し同五五 一ができず、一 年一 時廃 〇月に着工 び実施の 院案の寸 しかし、 気運 着 工 まで 同 地

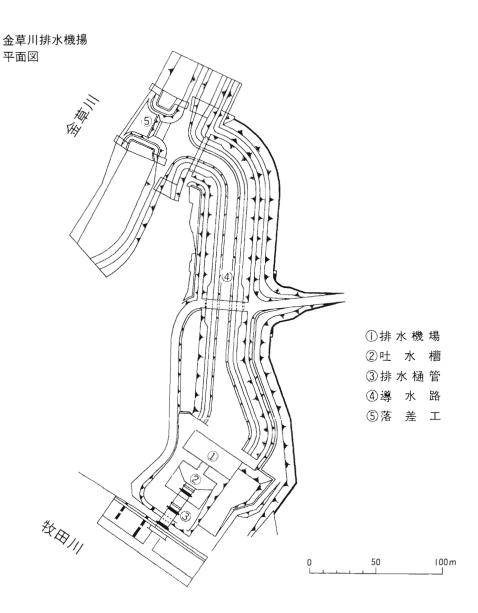
計画 制 限 内水位 酮 量 昭和三六年六月 河道より低位 への溢流 梅 া 前 水位はTP六・〇〇片 線 時 0) 豪 不雨量

地域開発等を考え制限水位をTP・五・○○はが妥当であると思われますが、将来の位であるので、鉄道、民家等の状況から六・

を保つためには二六・○㎡/sのポンプを必排水 流出率f=○・九のとき制限水位五、○○㍍

計

とする



排水機性能(金草川排水機)

排水機性能(含	6年川	排水檢	.)	
	型		定	立軸斜流
	П		径	1,650mm
ボンプ	実	揚	程	4.38 m
	排水	量(全体	計画)	6.25㎡/秒(25㎡/秒)
	台 数	(全体語	計画)	1台(4台)
	種		類	4サイクルディーゼルエンジン
原動機	出		カ	670PS
	台 数	(全体	計画)	1台(4台)

事業費約35億円 工期昭和55年度~昭和60年度

#### 土木、建築工事

工事概要
排水機場下部工
吐水槽、排水極管
排水機場上屋、導水路

#### 機械設備工事

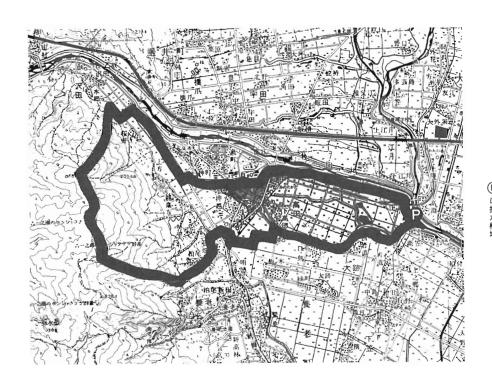
年 月	工事概要
57.9~59.3	主ポンプ擬作、吐出管製作援付
57.9~58.12	門扉製作据付
59.9~60.8	主ポンプ揺け、主ポンプ駆動設備、補機製作獲付

#### 電気設備工事

年 月	工事概要
59.9~60.8	電気設備機器の製作
60.6 ~60.8	電気設備機器の据付調整及び配管配線



国営 金草川排水機揚 (建設省木曽川上流工事事務所より)



— 133 —

要とする全体計画として二五・  $m^3$ / S 第一期計画として一〇 m³ / S Œ.

のポンプ五台)

 $m^3$ s (ポンプ二台)を設置

設置位置

○○旨牧田川右岸堤と金草川左岸堤の交点よ 金草川左岸、 削 流 牧田 かけて 川右岸、 烏江部落直上流地点より左岸堤 機場を設け導水路を新設 金草川 合流点上流約四

工 事 昭和五五年一〇月着工

昭 和 六一 年三月に一 部完成

## 9 江月・ 祖父江地区 排 ;水機

した。 おり、 自然排水が可能となる、 とおり両江悪水落江で排水し、 週間の地区内湛水後、 明 治時代までの本地区 しかし、牧田川 杭瀬川を伏越して大垣輪中を通り鵜 ( () 甚だ悪い状態にありました。 水位が上昇してきたため、 の排水は、 杭瀬川水位が下降してからようやく 祖父江輪中は84頁で記述のと 江月輪中は80頁で記述の ノ森へ落していま 降雨後約

ため、 期頃、 排水不良のまま、 ンプの大型位) 畑川の外水位は降雨後一、二日で回復しますので明治末 下江 一年で廃止してしまいました。 月地 を設置 内 自然排 の小 して排水を試みましたが、 畑川堤に蒸気機関排水機 水にあまんじて来ました。 その後、 大正末期まで (バチカルポ 能 力不足の

祖父江排

水機の

沿革

され、 幹事岡田保夫) 大正一三年(一九二 杭瀬 川の機械排水が可能となりました。 の共同事業によって江月祖父江排水機 四 地区内の地主十数名 ポンプは (区長桑原甫 が設置 左の

水面積九七於、 径七〇〇行上、 内江月分六三台・祖父江分三四台、 渦巻ポンプ一台。 五〇なとモーター二台排

通りです。

都 の奥村電気

化し、 左の通りであります。 小屋は鉄筋スレートに改善されました。 償工事として、吐出樋管が改造されて、 父江」に分かれました。 れ (一九六八) に建設省の杭瀬川改修 その後、 地区を分割されたために、 能力も悪くなっ 昭和三五年(一九六〇)に名神高速道路 ているので取替えました。 江月排水機は、 土地改良区が (拡幅) 工事 その後、 ポンプ場も現在地へ、 しかし排水機は老朽 「江月」 その設 Ò 昭和四三年 ため が とっ ↑建設さ 祖

口 径

七〇〇行心

八〇ないモーター

**どを六・○**とにあげた。 径 四〇〇だい 三〇たモーター 施行は荏原製作所 台とし、

総事業費 三二、五〇〇千円 施主 江月土地改良区

# 祖父江排水機の沿革

祖父江地区は、 昭 九六一)に団体営灌排水事業により左の排水機を設けま 1和三五年 (一九六○)に名神高速道路ができて後、 それぞれ排水系統が別れたため、 昭和三六年 江月、

した。

に設置 径、 五〇 排 ) 〇パラトル 水路二〇〇片を施行しました。 Ξ.  $\bigcirc$ HP 軸 流ポンプ 台を 杭 瀬 Ш

堤

まし 昭 祖 和三七年~三九年に圃 父江土地改良区 総事 た。 業費 その後、 六、三 昭 和四六年に 六千 場 整備 甴 排水面 建 が 設省 行 わ 杭 れ 瀬川 排 Ŧ 水系統 改 修 かつ 拡幅 が 事 業主 確 立 I

# ⑩ 色目川排水機

正化事業により、

t

〇〇〇千円でモーター、

配電設備

0

改適

排

水樋管が改造され、

又同

Ŧī.

年

九

七

には、

が

行

われて現在に至っています。

道以 地 降 動 水 12 分されて 積 関 西高 X して 雨 扉 により 畑 は三三八段を有 係 色目川沿岸土地改良区の が 内各輪中に生じ、 が 東 川によって境され、 地 区は、 長 が最低湿地帯であります。 東低であります。 自 ます。 引くと、 然閉扉します。 各輪中をそれぞれ別個に相 います。 小 降水による排 畑 その被害は甚大であります。 標高は西部で八片 日 湛水位が上昇すると低水位部 地 吉 そして、 域 東北部より 地区内は色目川 X 0) 室原地区であります。 水は本 域 北辺は泥 は そ 自然排水状況は全部自動 相川の右岸に沿う小 南端中 0) 川 川 地区ごとに 0 東部で四・ Ш 色目川 水位 によって、 央部 東辺 が上 に貫く養老街 は 湛水 昇す 相 0 小 四片で全般 関係する面 現象 輪中に 大きく二 畑 Щ します。 Ш 輪中で n ば 南 自 排 樋



色目川排水機場(蛇持)

排水機を設置することになりました。 入し被害は拡大します。 このため、 蛇持 小 畑 地区) 地内に

昭和二八年(一九五三)度県事業として着工することになり ました。そして、 X 域 が当時、 三か村に跨がるために漸く話がまとまって、 同三〇年に完成しました。

関係地区 養老町 小畑 日吉・室原地区

寸 T体名称 色目川沿岸土地改良区

場 所 小畑 地区蛇持 色目川  $\overline{\Gamma}$ 

排 機 径 九〇〇行之×一六五尸。 径八〇〇八二人×

二五形、 斜流ポンプ各一台

受益 重 積 町  $\mathbb{H}$ 歩 三〇九三町歩 (三三八段) 畑 (三〇九三段 六八町歩 (六八舒) 宅地

和 Ŧi. 匹 年二月に現在の排水機に改善しました。

昭

二〇〇パルモーター各二台 口径 110000 筒型斜流ポンプ Q 二六 m³ s

導水路 南幹線排水路一、二三五片 蛇 持 排

水

路四一 九 トメルー 北幹線排水路四六八片

### (11) 多芸排 水機

して 水田 は小 九六〇) 多芸東部土地改良区の設置 畑川の 地帯であります。 直江、 に建 中 卞 (設された名神高速道路が通 飯 流部に 積の住民であります。 面積は 狭まれて、 この区域は、 中 央東西に 自然排水は小畑 つ 水稲耕作は、 て耕地を二分した 昭 南は牧田 和三 五年 川 Ш から 主と 北

> の間 になりました。 その気運が高まり、 中内に湛水します。 ると杭瀬川 杭 瀬川をへて、 に作物は水腐れするので、 の水位が 牧田川という順でありますが、 排水は直接牧田川 これの自然排水を待つと時間を要し、 昭 高くなり、 和三七年 排水機設置の必要を痛感し 小 (一九六二) 畑川 行います。 は排水不良となって輪 に設置すること 一旦洪水とな そ

設置者 多芸東部土地改良区

排 水面積 一八〇診

設 備 原動機 七 m³ \_\_ \_\_ PS 口径 九五〇行人 台、 ポンプ 斜 流

/ S

## 四 土地改良

今日 四二年 しか この頃は 水持ち等のために、 た。 導入が必要となって、 て、 作り農業でありました。 我が国の農業は、 本町区域内の戦前の耕地整理 (現在は土地改良と呼ぶ) は明治 農民は代々、 P Ĺ の機械化時代には、 がて時代が進み、 (一九〇九) 今日の経済界の発展に遅れないためには農業機械の 当 『地の堀 作業の面倒と不能率に苦しんで来ました。 に小坪 自然と不整形な小区画の 田 古来より一般に水田稲作という面倒な手 土地改良の必要に迫られてきました。 0) 舟運を前堤とした区画整理であって 又水の必要から、 機械化時代に入ると、 とても及ぶものではありませんでし 地区で行ったのが 用排· 始まりであるが 水田農業となっ 小坪地区では 水の 便や田

以上になっ 位でした。 まだ 様で 坪 ŋ 第 0 機械化されてい あ 属 昭 П 行る池田 r) 九 和 年に一 ました。 兀 0) てい **今** 日 ±  $\bigcirc$ 辺 年 地 ます。 匹 改良 0) 村では、 100 機 ま 械 ない た、 九 (耕 化 0) 六 室原に 時 時 根 地 耕 五 代になりますと、 代 地 古 整 から三 蓮) で 整 地でも行って 田 理を行って おいては、 を行わ 0 年 枚 かけ 0 なければならなくな 大正 て行 13 面 £ V ます。 ます 積 元年 X は 10 が 由 ました。 0 N7 この が三〇 小坪と同 が 時 九 单 Ł

①終戦 は、 ら漸くい  $\mathbb{H}$ まし 九四 わ れ 他 産業の 12 0 営は てきました。 農外収入に走って、 対応できなくなりました。 곳 ) た。 脱 後 益 高度成長に対して、 から した思うと、 長 0 農業の大変革 Q 年 困 農地 0) 難となっ 封 又一方、 建 解 放が 時 代に 昭 てきま 農業は兼業農家を主とする形態に 和三〇 行 米は生産過剰となっ 続 我 わ 農業が過重労働 れ、 1 玉 したが 日は終戦 じした。 年 て、 概数 明 ね各農家は自 って、 九五 治時 直 後 代以降 五 0 農家の と低収入で、 昭 て、 代に入って、 和 0 作農となり 零細 青年 小作農か 年 な水 たち か

着手 に本 事になり 町 0 ように、 12 ました。 おい 水 田 7 0 灌が は 急速な時代の変化に対応して、 排 農家とタイアッ 水 0 便をは、 か ŋ ブして、 農 一業の 機 土 械化 地改 E 0) を進 良事 方針 業に と共 8

本町

は大被害を被りました。

この 九

復興を契機に土

地 雨

改 13

良 ょ

0 0

たまたま、

昭

和

匹

年

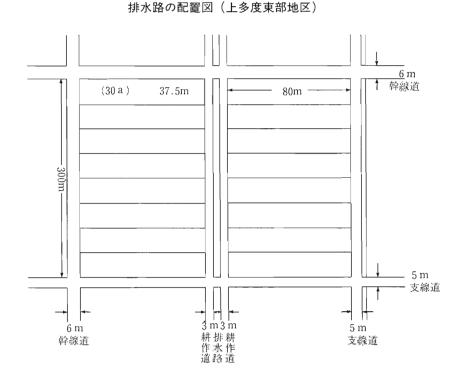
五.

九

には集中

豪

7



### (養老町史より)

単 位 耕 区 (平方メートル)	単位 圃区 (平方メートル)	幹線道幅 (メートル)	支線道幅 (メートル)	耕作道幅 (メートル)	水路状況	備考
$36.4 \times 27.5$		4.50	2.70	3.00	用排水兼用	災害復旧関連事業
		5.00	4.00		"	
60×50	240×50	5.50	4.00	3.00	n	災害復旧関連事業
36.4×27.5		5.50	2.50		n	11
					n	原形復旧だけ
36.4×27.5					11	災害復旧関連事業
36.4×27.5	220×36.4	4.60	2.80		用排水分離	11
					用排水兼用	11
40×25		4.00	2.20		11	"
36.4×27.5		4.50	2.70		н	11
	50×20	200×50	5.50	2.70	11	
					н	
					11	
50×40			4.00		用排水分離	
	200×50	5.00	4.00		н	
60×50	220×50	5.50	4.50	3.0	11	パイプライン
50×20	100×50	6.50	5.50	4.5	11	
50×20	80×50	4.80	4.80		11	パイプライン
38×27		5.00	4.00	3.0	用排水兼用	
100×30	300×100	7.50	5.00		用排水分離	
80×37.5	300×80	6.00	5.00	3.0	n	パイプライン
80×37.5	300×80	6.00	5.00		11	,,

### 養老町内土地改良実施状況(昭和48年当時)

		地以及天旭1	7.00 (-H-IH-I	0+==0)		
土地改良区別	種 別	実施年度	関 係農家数	田 (ヘクタール)	畑 (ヘクタール)	計 (ヘクタール)
①高柳土地改良区	団 体 営	昭 年 35—39	戸	37	2	39
②小坪 "	"	40—43	62	30	4	34
③釜段 "	"	36-38	78	78	3	81
④瑞穂 "	"	35—36	100	116	6	122
⑤根古地 "	町 営	34-36		78	5	83
⑥大場新田 "	団 体 営	37—40		57	4	61
⑦笠郷 "	"	35—39	719	528	20	548
⑧広幡 "	11	36-39		241	28	269
⑨上多度 "	11	36-39		120	5	125
⑩大巻 "	"	32-39		220	5	225
⑪江月 "	n n	37—39	72	60		60
⑫祖父江 "	"	37—39		34		34
⑬室原 "	"	大 元一3		150		150
⑭石畑 "	11	F召 44—48	300	77.9	0.8	78.7
⑤小畑 "	11	44-47	102	64.9	1.0	66.5
10鳥江 "	"	45—48	86	52.1	1.4	53.3
①養老北部 "	,,,	46—49	218	102.5	0.8	103.3
18押越 "	"	47—50	181	53.3		53.3
⑲西岩道 "	"	48-50	85	36.2	0.7	36.9
②河北 "	県 営	47-52	536	290.7	6.8	297.5
②上多度東部"	"(特殊)	46—50	255	140.9	2.9	143.8
②高田 "	" ( " )	48—52	311	176.7	0.5	200

### 土地改良区一覧表 平成元年現在

		W126 361					
49 EL-	所 在 地	設立年月日及び	関係市町村名	地区面積	事業概要	組 合	理事長名
名 称	(電話番号)	認可番号	<b>国际印刷刊石</b>	(ha)	(水・道)	員 数	生學核和
瑞穂	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	25 . 8 . 6 岐 阜 7	養老町	122	(水)	173	片山美秀
旧十三ヶ村	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	27 · 8 · 2 岐 阜 91	養老町・南濃町	252	(水)	644	栗田芳 -
牧田川用水	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	27 . 8 . 2   岐 阜 97	養老町・垂井町 ・上石津町	543	(水)	1.077	木村正二
五三	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	27 · 8 · 2 岐 阜 99	<b>後老町</b>	538	(水)	768	細川清一
旧六ヶ村排水	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	27 · 12 · 2 岐 阜 119	養老町・南濃町	511	(水)	569	田中金低
養老町高田	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	28 · 8 · 30 岐 阜 146	養老町	194	(水・道)	327	野村 宽
色目川沿岸	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	29 2 . 25 岐 阜 192	養老叮	544	(水)	698	佐竹米一
釜駒	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	31 · 11 · 2 岐 阜 342	養老町·南濃町	527	(水・道)	127	中嶋三男
養老町石畑	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	34 · 1 · 27 岐阜 381	養老町	87	(水・道)	254	古市健三
牧田川北部多芸	養老郡養老町直江396-1 (05843) 4-0273	35 · 9 · 11 岐阜 421	養老町	132	(水・道)	180	野村 彰
養老町大場新田	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	36 . 3 . 16 岐阜 432	養老町	57	(水・道)	77	伊藤喜蔵
養老町江月	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	36 . 3 19 岐阜 433	<b>巻老町</b>	60	(水・道)	87	岡田文雄
養老町祖父江	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	36 . 4 . 30 岐阜 437	養老町	39	(水・道)	57	佐竹正三
養 老 町 大 巻	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	36 . 5 . 4 岐 阜 439	養老町	245	(水)	266	高木 弘
養老町小坪	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	40 . 6 . 8 岐阜 489	養老町	35	(水)	69	山田 實
養 老 町 鳥 江	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	45 . 7 . 16 岐阜 545	養老町	66	(水・道)	88	近藤善友
養老町上多度東部	養老郡養老町小倉199-1 (05843) 2-0595	45 · 10 · 23 岐 阜 548	養老町	143	(水・道)	270	児玉貞三
養 老 北 部	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	46 . 6 . 11 岐阜 556	養老町	79	(水・道)	185	田中雪夫
養 老 町 河 北	養老郡養老町高田3879-3 (05843) 2-3411	47 . 3 . 6 岐阜 564	養老町	276	(水・道)	531	木村正二
養老町押越	養老都養老町押越348-1 (05843) 2-3480	48 . 1 . 4 岐阜 576	養老町	51	(水・道)	171	古川德太郎
養老町桜井	養老都養老町桜井621 (05843) 2-9459	52 · 7 · 13 岐阜 597	養老町	26	(区)	64	大橋正輝
上沢田	養老郡養老町上沢田4 (05843) 4-0229	56 . 10 . 16 模 阜 619	養老町	9	(区)	34	酒井敬一
南濃北部	海津郡衛濃町志津新田501-1 (05845) 7-2084	56 . 12 . 24 岐 阜 621	養老町・南濃町	102	(本,道)	246	安藤 登
多芸业部	養老郡養老町直江396-1 (05843) 4-9273	59 · 6 · 25 岐 阜 636	裘老町	110	(水・道)	158	西脇才二

ることにしました。 運が急速に高まって、 つって、 補助 金の交付 この がこれを一 本町においては、 土地改良は、 層促進させました。 玉 これを積極的 県の 農政方針 に進 でも 8

ものです。昭和三二年に土地改良区が発足しています。これは自主的な昭和三二年に土地改良区が発足しています。これは自主的なしたが、これとは別に町内においては終戦後、既に大巻では、②本町の土地改良計画は昭和三五年から第一歩を踏み出しま

であります。 地区が発足しました。 備事業となりました。 年には小坪 年に始 災害復旧関連事業としては、 めました。 地区が発足しましたが、 又同三七年には江月、 さらに同四四年から同四 町 内 0) 土. 地改良実施状況は別 瑞穂地区の外六地区が 小坪は二回目で再圃 祖父江 八年までに九 地 区 表の ũ 同 場整 四〇 通 五. r)

が 田 使 い易くなっています。 枚 0 区 大きさは約三〇年又はそれ以上に拡げられ 画 [は耕 地 の地形にもよるが、 今 Ħ の土 地改良では 大型 機 械

してい 又 しているところでは用 ます。 用水をパイプラインにたよる地方も町内に四 昭 和四 四年以降の土地改良は、 かし 西岩道 排 地区 水分離 のように、 が 困難だとい 用 排 か 水 分離 L が 方式 13 61 か所 ま を採 湧 も出 水 用

> 1 バ か 埋 来ました。このパイプライン圧送方式という施設 設 ができます。 ル んがいする方式であって七五以おきに配水管が立ち ブ分水口が設けられています。 せられたパイプ(石綿管水路)によっ 二毛作の野菜作りにも便利であります。 農家は必要な時にか て配管し は 用 地 上って んが 水を 下 12

勾配等により用排水の便利がよくなりました。 (三) 一般的には水路改修によって真直、幅の適切、一定の

以上となり大型機械の導入が容易となりました。
四 道路は碁盤の目のように、幹線は幅約五片、支線約

田 堀田がなくなりました。多芸輪中は東南部に行く程低パイプライン送水場及び圃場整備の写真は左のとおりです。



水田地帯のパイプライン送水場 (上多度地区)

舟を利用して、 和の終戦後になると、 この 農作業を行ってきました。 堀田 は櫛 の歯状の 排水機の発達が著しく、 池になっ かつての堀田の現状 (根古地) 海抜ゼ

湿地であり、 高くし、 わ 池を掘り、 稲の水腐れを防ぎ収穫の が地方は、 その土で片方の 水腐 n 向上をはかってきました。 田 から守るために、 面を盛りあげて、 ていますので、小 水田 耕地を に短

> 耕 つ

昭

地 たために土地改良ができて、 地帯でもこの排水機を備えつけて、 は増大した上、 耕作にたい 堀 田 ん便利になりました。 は埋 悪水排鈴 められて整理され 除の徹 底をは



土地改良後の水田(田) 農道幹線左右の田は一区画50アール 地下にはかんがいパイプラインが配置されている。

# 第八章 薩摩義士顕彰事業

# 」、平田靱負の最後

く出来た」とほめられました。見事に工事を完成し、幕府の検査も無事終り、幕府から「良心を砕き、薩摩藩士一千余名が命をかけた努力の甲斐あって、値川幕府の工事命令が薩摩藩に下ってから一年半余、昼夜

たことでした。出したことと、巨万の藩債を作って、末長く藩に苦難を残し出したことと、巨万の藩債を作って、末長く藩に苦難を残しいし、総奉行の平田靱負の悩みは、八十四名の犠牲者を

死んでお詫びをしようと決心をしました。 殿様や死んだ遺族に申訳ない。かねてからの覚悟の如く、

後の報告書を書きあげました。な嬉しいことはありません。」と、鹿児島と江戸表の家老に最すみ、工事場を引上げてよろしいと言われましたので、こんが静かに筆を取り、「工事は上々の出来栄えで、検査も全部

住みなれし里も今更名残りにて、自分の心境を辞世の歌として残しました。

# 立ちぞわづらふ美濃の大牧

って、潔ぎよく自害しました。亨年五十二才の靱負は、殿様からいただいた刀を取り、島津家の安泰を祈玄暦五年(一七五五)五月二十五日早朝、身を清め白装束



平田靱負像(大巻)

があって、縁のあった寺でした。)京都の伏見にある大黒寺に葬られました。(伏見には薩摩屋敷遺体は揖斐川を下って、桑名に送り、それから陸路を取り、

八日、従五位が贈られました。市妙谷寺に葬られました。約一六〇年後、大正五年一二月二五年五月二五日、平田靱負と書いてあります。遺髪は鹿児島墓名は高岳院殿節吟了操大居士と刻せられ、右側に、宝暦

# 2、養老町にある義士の埋葬地

根古地薩摩工事義歿者墓(浄土三昧) 二四名

覚智道本信士 同 七月二一日 助次郎通報浄達信士 同 七月一三日 六 平相覚了頓信士 宝曆四年六月二七日 新右衛門

秋道良白信士

同

八月

四日

新右衛門

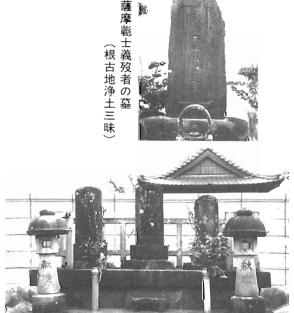
津門梁通居士	攝心常在居士	天照寺薩摩工事義	宝国諦林信士	報運順應信士	陽観春察信士	春到岸誓信士	風外浄航信士	正融義春信士	灌山頂雪居士	節霜義端信士	玄入義門信士	頂法灌受信士	本倒還立信士	一超乗感信士	円山了諦信士	一空相林信士	浄翁清感信士	一道立然信士	義感了應信士	順光隨玄信士	本空誓厳信士	恢山良廓信士
司	宝暦四年八	事義歿者墓	同	同	同	同	同	宝曆五年正	同	同	同	同	司	司	司	同	同	同	同	同	亩	同
三月四日	月一八日	三名	五月 八日	四月二八日	二月一三日	二月一二日	二月 九日	<b>正月一二日</b>	— 月二 日	一一月九日	一〇月二三日	一〇月一七日	п	九月二七日	九月一五日	九月一三日	九月 六日	八月二五日	同	同	八月一八日	八月一五日
山口清作	八木七郎右衛門		仁助	市右衛門	覚左衛門	与八	大橋七郎右衛門	助四郎	大灌十左衛門	仁八八	太田喜三右衛門	三四郎	長八	六左衛門	深見勘助	岩七	惣左衛門	長左衛門	喜右衛門	権右衛門	川合瀬兵衛	利右衛門

## 雲峰月秀居士

同

四月二三日

松下清七



薩摩義士三士の墓 (根古地天照寺)

## 3 養老町の薩摩義士顕彰事業

ぎと薩摩義士顕彰活動が始まりました。 この地域でも、関心の深い人達が、 かくしにしたことが広く社会に言えるようになりましたので、 十年間にその方向と基礎が固まり、 されました。これは徳川幕府が倒れ、 水の業績が顕彰され、 千本松に「宝暦治水の碑」が建てられ、始めて、 多度町の西田喜兵衛の発起により明治三三年(一九〇〇)、 ついで同年、「大榑川 洗 堰碑」が建 立 積極的に活動し、つぎつ 徳川幕府を恐れて、 明治維新の新時代も三 世に宝暦治 ひた

(1)

薩摩工事義歿者の墓が建つ

大正二 味 いに建ち、 年(一九 碑の裏 三年)「薩摩工事義歿者之墓」 面 に二四 人の義士の 名が 刻 が んであ 根 古 r) 地 浄

宝曆治水 卒塔婆を立て の時 て供養を行 0) 天照寺七代住職湯誉上人以来, てきました。 代々、 孟っ 蘭。

になりました。 義歿者の 明 沿治四 埋 + 葬地 年 (一九〇七) は 無縁者の 墓 郡 道高田 地として収用され、 - 今尾: 紀線の改造 修が 道路 0 あ れり、 部

墓が 有志者の そこで、 わ からなくなるのを恐れて、 寄附によっ 天照寺 匹 代 この 住 職 墓 水谷 碑 関係者に呼び 演達は、 が建てられ 天照寺には、 大恩ある義歿者の まし か け た 義士三 池辺村 なお、

毎年8月13日 夏の例祭を行う浄土三昧墓地 (根古地浄土三昧)

地記

(2)

負翁

焉

念碑 平田靱

が

建

0

墓が

別にあり

摩工 大正 であ され 五. 大巻のこの る。 事の 12 た記念すべ 平 几 田 靱 池辺村元村 年 というので 元 負 小 地 は か 屋 き所 九二 割 か 腹 あ 薩

> 設計画を立てました 長岐阜県元県会議員山 田貞策は、 薩摩工事の 大記念碑 0)

建

西走、遠引き受け、 協賛を得ました。 その 後 遠く鹿児島 事務所を私宅の修徳館 貞策は、 も飛び、 薩摩義士顕彰会を作 あちこちの要人に直 (養老町高柳) 'n 自ら会長 とし 接 面 談 0 東に職奔にを

彰の趣旨を訴え、 鹿児島県下の小学校へ寄附金募集の依頼状を発送し、 愛知の三県内各町村 そして貞策は、 薩摩工事によっ 浄 財の 学校 )募金運 青少年団・処女会を始めとして 動を展開 て恩恵を受けた岐阜・三重・ しました。 広く

講演し、 感動を与えました。 ○余回に及び、 なお、 その回数 西濃地方を中心 多大 に教育講演会 義士 の浪花節を巡

とし、 作り、 児島県出身代議 国定教科書に採用 課外読本薩摩義士」 れ度儀に付 って 薩摩義士 建議 更に、 公民教育の資料 運 動 請い 大正十五 を 願だ 0) 事蹟を と題 せら 寺  $\mathbb{H}$ 鹿



毎年、 4月11日、春の例祭の行われる、大巻の記念碑

れました。市正の尽力で、同年三月一七日の衆議院請願委員会で採択さ

平田靱負翁終焉地」記念碑は完成されました。四ヶ年の広範な顕彰会活動によって、この薩摩工事役館趾

岐阜県内務部長をはじめ県官、養老郡団体事務所長はじめありました。時に、記念碑除幕式は、昭和三年(一九二八)五月六日で

永遠に顕彰の象 徴が出来ました。 学校児童ら約二○○名参列し、神式によって厳粛に挙行され、各団体長、池辺村々長はじめ各団体・在郷軍人・青年団・小各団体長、池辺村々長はじめ県官、養老郡団体事務所長はじめ

# ③ 薩摩義士慰霊堂が建つ

大湖水となり、大きな惨害を受けました。この年は二度も堤防が切れました。従って、多芸輪中全体は壊し、続いて、九月二六日に伊勢台風によって再び決壊し、昭和三四年(一九五九)、八月一三日、集中豪雨で堤防が決

があたった」と流言が飛びました。上を人や車が往来し、踏みつけているから、「薩摩さんのバチに「薩摩工事義歿者之墓」がありますが、道路改修で墓地のこの時、切所(堤防の切れたところ)の真西六〇〇㍍の地この時、切所

た。をとらえて、昭和三五年六月一二日に発掘作業が行われましをとらえて、昭和三五年六月一二日に発掘作業が行われましそこで、村内有志によって、道路沿いの排水路改修の機会

果たして、口碑の如く、現存の墓碑の北側に町道を南北に

りました。

七

人の義士は一

一百余年後に、

字の中で永眠されることにな

横断して、二列に並んだ土甕が五個、西側からも二個発見さ



発掘された現場と土甕(内堀靖郎提供)

天照寺に保管されている土甕

児島へ里帰りしました。土甕の一つは復元して天照寺に保管拾い、土器に入れ、墓碑の南端に埋められ、一部は郷里の鹿二百余年の歳月をこの泥甕の中に眠っていた義士の遺骨を

されています。

美しい形の六角堂と丸に十の島津家の紋が目立ちます。二時に、昭和四六年四月(一九七一)でした。り、鉄筋コンクリートの慰霊堂が建ちました。彰会が設立され、義捐金の募集が行われ、多額の浄財が集まこの事を契機に養老町は協議会を開き、養老町薩摩義士顕





(根古地浄土三昧)

平田翁辞世の歌碑 (大巻の役館跡)

なお 附帯事業として

浄土三昧の墓域拡張

2 天照寺の墓の石積修理と鉄栅づくり

大巻役館跡に、

歌碑、

休憩所と手洗鉢の新設

夏は慰霊堂前で慰霊法要を、 養老町薩摩義士顕彰会は、 養老町及び地元の行政機関・ 毎年春は役館跡の前で慰霊祭を、 寸

小学生が参加して厳粛に行われます。

海西郡

## (4)平田靱負の巨像が建

万円を投じて、 養老・海津ライオンズクラブは、 長く薩摩義士の功績を伝えたいとして、 地上四メー ŀ ルの平田翁の像を建てました。 結成二十五周年記念事業 総工費一千

平田靱負翁の像 (大巻役館跡)

平成元年二月十六 大巻役館跡で、

官民多数が参列して

落成式が盛大

偉容を物語るようで 役館趾にふさわしい

に行われました。

# 薩摩工事に家を開放した鬼頭兵内

豆大島に流されました。その後伊豆諸島を征服しましたが、 西八郎為朝です。 宝暦治水工事の元小屋に、 為朝は保元の乱(一一五六年)に敗れ、 本宅を開放した兵内の先祖は鎮

その子義次は母胎にあったが、 工藤茂光の討伐軍と戦い自刃しました。 成人して尾頭次郎義次と名

乗りました。

よって鬼頭の姓を賜わりました。 義次は朝廷の命を受けて、 紀州の山賊を平定し、 その功に

それから一八世の景義・通称吉平衛は尾州愛知郡 海

・知多郡において、寛永八年(一六三一)から明暦三

二千石余になりました。この功により、 年(一六五七)の二六年間に、二七ヶ村を開拓し、 大正一二年一二月一 総高二万

ti 贈従五位を賜わりました。

その三男、 吉之丞は兵内と改名し、 明暦二年から寛文七年

州中島新田で死亡しました。 呂圭、寛政一一年(一七九九)九十一才で、 喜んで、居宅を開放したと言われています。 一六六七)の十一年間に大牧新田を開発しました。 この三代目兵内の時、木曽三川の治水工事に当り、 最初の開拓地尾 兵内は隠居名を 兵内は

に葬られました。 三) 正月二九日、 その子七之丞は、 七十九才で死亡し、 後の名を猪郷といい、 海津郡南濃町円満寺 文化一〇年(一八

町駒野に居住し、 現在の当主、時義は兵内から一一代目に当たります。 薩摩工事関係の文書が残っています。

お手伝方役所からの感謝状 通 通

# 小屋の造次明細書

薩摩義士顕彰の先駆者山田貞策

5

に生まれました。号を耕読堂柳波と称しました。 慶應三年(一八六七)二月七日、池辺村大字大巻小字高柳

池辺村長等にあげられ、 を開拓して高柳新田と命名、代々その村の庄屋をつとめました。 山田家の四世山田正悦は寛文年間に高柳野に移住し、 貞策は、 岐阜県会議員、 政界に貢献しました。 岐阜県農会議員、養老郡農会長 田 畑

広く産業振興に尽くしました。 させ、 明治二二年、 干拓 干拓事業を福島県相馬郡八沢浦や朝鮮にまで発展 農事改良に尽くし、 独力で、自村に排水機を設置し、 林業・水産業に至るまで、 稲作の増収



山田貞策像

彰会が結成されました。 終焉之地記念碑が落成し、 四ヶ年後の昭和三年五月六日平田翁 その献身的努力が報いられました。

九

長太です)。 記念碑の南側に建設し 石津町下山の人、 ました(像の作者は上 月一〇日、 平田翁像を 昭和九年

に死亡しました。年七 刊しました。貞策は昭 読本「宝暦治水」も発 また、学校家庭課外 九年太平洋戦争中

> 衆の道義昻揚に尽く しました。 西洋文化の導入と民 に修道館を建設 に入信し、 キリスト教 大正初期

二九日、大垣共立銀 行楼上で薩摩義士顕 大正一四年一二月



修徳館

1事 (主として岐阜地方気象台編)

六 五 五	六五〇	一六四七	一 六 八	五八六	五六六六	五三五八	西曆
明 暦	慶安	正保	元和	天正一四			年の介
元	=	四	四	匹	九		と と と と と と と と と と と と と と と と と と と
七 八 四 · · ·	九・二六~	せ・ニー	六二三二	八 · 九	·	六・二七四	暦 年 号 月 日
四水に「枝広の大水」「ヤロカの大水」という。	ろなく、舟で往来ができたという。死者三、〇〇六人、牛馬七一〇頭死、流家壊家三五〇未曽有の大洪水といわれ、濃州の低地は悉く水底に没し、岐阜・養老の間は干上ったとこ正保年間金屋御井神社流失	牧田川出水、大墳村堤防五三間切入る。	牧田川出水、島田村・高畑村・村境の堤一四間切入り、耕地数町歩を荒らす。牧田川大出水、沿村各地を荒らす。尾両国の境とした。	木曽川大洪水、河道を変じ、現在の木曽川となる。この洪水後の木曽川筋を豊臣秀吉が濃  のが現在の牧田川である)。  から南と北の二派に分かれ、直江字中瀬で再び合するようになった(この新しく分かれた	学校の敷地、三神町の南側の道路などは河川敷きであった)この洪水の際、高畑字将棋頭畑・大墳・直江(今の南直江)に至るまで一河川であったが(現在の美津濃工場や高田中、牧田川大洪水のため河状を変じた。これまで南岸は五日市・押越・島田、北岸は橋爪・高	川河道を変じて現今上流大破	水害・工事(月日は太陰暦を太陽暦になおして記載) 「岐阜県災異誌」に拠る)」

一七三八一	一七三八		1 七二七	一七三五	一七三四	一七三三	一七三一	1七三〇	一七二九		一七二八	一七二四	一八三二		七二	1410		一七一九	一七一六	一七一五	一七一四	一七一四	一七一三	一七〇九一
	=		元文 二		一 九	一八	一六	一五			1 111	九	七		六	五		享保 四	六	五.	四	四	正徳 三	六
八・一五~	七.五五	八二五	七・二八~	八·六		一	九・一二	九・六			九・一六		一 · 四	八・一〇	七 : ] : ]		- 0. - -	九・一匹~	1	六・一八		九・三〇	八:二八	
津屋川沿い徳田新田破堤	金草川大水、岩道村入水		津屋川沿い徳田新田破堤	小畑川大水、堤切入る。	$\mu$		牧田川筋島田・金草川筋岩道・色目川筋大坪・津屋川筋徳田新田切入り。		牧田川・津屋川・色目川・伊尾川水行直し。	津屋川沿徳田新田堤破壊	牧田川筋直江村堤五○間切れ耕地三○町歩を害す。小畑川沿小畑村堤三○間破れ切入り	沿い徳田新田堤破壊	長良川・揖斐川出水、色目川沿い蛇持村破堤	牧田川沿い島田村・烏江村破堤	津屋川沿い徳田新田破堤	津屋川沿い志津新田堤切入り。		牧田川沿い大墳村堤一六間切入り。	牧田川・小畑川・段海川・水行直し。	津屋川大水、駒野新田にて破堤	牧田川水行直し。	津屋川沿い徳田新田破堤	津屋川沿い徳田新田破堤	牧田川、色目川築堤

室原村北堤切入り。室原村北堤切入り。	五二七	五. 三		一七六八	
	九・一八	:			
江月切入り。	九・一七	_			
大風雨、大坪堤防大出水	九・一六				
津屋川筋志津新田及び徳田新田にて二ヶ所切入り。					
牧田川筋多芸村にて堤決壊一三〇間、流家二戸、耕地一一町余砂入	八・一九		明和	一七六五	
牧田川筋五日市村堤切れる。	九・二四	八		一七五八	
牧田川通り五日市村・津屋川沿い徳田新田堤切入り。	六・一七	七		一七五七	
牧田川通り五日市村・島田村堤破壊	-0.	六		一七五六	
牧田川筋多芸村堤切れ、耕地残らず損耗	一〇・六~				
宝曆治水工事完成	五二三	Ŧī.		一七五五	
宝曆治水工事着工	二・二七				
津屋川筋鷲巣堤切入り。	八:二八	匹		一七五四	
津屋川筋志津新田堤切入り。		=	宝曆	一七五二	
	-0.10				
牧田川沿い大墳村の堤切入り。	九・一二~	=		一七四九	
津屋川筋志津新田堤切入り。	六・二〇	元	寛延	一七四八	
色目川大水、大坪村堀の内の内堤切れる。	六・三〇	元	寛保	一七四一	
	10.10				
津屋川大水	九・二一~				
牧田川出水、島田・烏江の堤破壊	八、八	五		一七四〇	
	九・一三				

一七八二   天明 二 八・二六   九・ 九	<u> </u>	一七七八七八十三	八.		七・二二	七・一二	七· 二	· ·	九.二二
下池輪中入水、収穫皆無  津屋川沿い津屋村・志津新田入水、揖斐川通り高柳新田で一一〇間破堤。	牧田川筋直江村・小畑川筋飯田村破堤岩道村など入水	牧田川沿い五日市村など破堤、烏江南堤切入り、岩道村常性寺椽の上五寸まで入水津屋川沿い鷲巣村・志津新田・小坪新田にて七五間破堤	五間程切入、島田堤切入、多芸輪中残らず水入り。  大坪村懸樋東二〇間程切入れ、橋爪村段木所切入りたるため一円に入水、蛇持堤東にて一	1-1-	入、多芸輪中残らず水入。 牧田川筋多芸村堤五〇間切入り耕地一三町歩砂入、流家五戸、大坪掛樋三〇間、蛇持村切	沈坪	飯田村切所より入水出水鳥江湊堤より水押込む、江月村堤所々切入れ、下笠輪中も切入。陣の上椽の上三寸五分まで入水	大風水、島田村堤切れ、烏江村紙木より切入、飯田村切入口ヶ島圦切入、岩道村常性寺下津屋川沿い徳田新田堤切入る。	牧田川筋五日市村・津屋川筋徳田新田破堤大雨、揖斐川・牧田川水系大洪水、岩道村、江月村、島田村で破堤、烏江村平押となる。島田堤切れ、烏江紙木堤切入り平押となる。室原村中堤切入り、大坪村へ入水、岩道村入水、江月村切入り。

	享和元	一八〇二	一八〇一				一七九八	一七九七	-t:	一七九五	一七九〇				一七八九 寛政 元	一七八八	一七八七 天明 七	一七八八	一七八六~	一七八六	
九・二七~	し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	じ・二八	八・・		五三	五三	五. 一五.		10.1=	-00-		 一・一九~	t· - 0		七·九	七・三	五.九			三二八	
小畑川沿い飯積村三五間破堤、耕地一町余を害す。牧田川筋直江村六○間破堤、耕地四○町余を害す。	牧田川沿い直江村堤切入る。	牧田川筋島田村寺裏・烏江村横手紙木堤切入る。床上三尺	牧田川筋島田村破堤入水	も高く前代未聞という。津屋川破堤。	各川洪水となる。木曽川・長良川・揖斐川外各川氾濫す。慶安三年の枝広の洪水より六尺	暴風雨。	この日より天空異常、五・二一より強風引き続く。	津屋川築堤	津屋川沿い津屋村圦樋吹抜け。	津屋川沿い津屋新田圦樋吹き抜け、三〇間程切入り。	津屋川門樋成る。	牧田川筋多芸村破堤	多芸輪中所々破堤	岩道村常性寺御堂下陣にて三尺二分入水	津屋川沿い津屋村破堤、小坪村新田杁樋吹抜、堤五四間破堤、有尾村前近辺残らず切入れ、	津屋川沿い徳田新田破堤、岩道村常性寺台所の上三寸まで入水。	津屋川筋志津新田破堤、徳田新田・釜段新田入水、岩道村常性寺椽まで入水、大飢饉。		水行直し、各川、各地にて行われる五四ヶ村。	津屋川筋駒野新田・釜段新田破堤、六艘樋東高須圦吹破らる。	揖斐川・津屋川堤修理、水行き直し。

_																								
	一八四八	一八四五		一八三七		一八三六	八三五	一八二九	八二四	八二〇	一八一九			一 八 一 六				八一五	一 八 一	八〇九		八〇四	八〇三	
	嘉永	弘化					天保				文政											文化		
	元			八		七	六	_	七	Ξ				Ξ.				Ξ	八	六		元	三	
九・二六	八・二九~	八· 五		九・一三	七・二	六・三〇		八· 二 二	九 · 六		八.二		ı	八・二六	八、三		八・三	八.二.	七・二〇~	八・二		- - -	八・一四	
金屋村堤五〇間破壊、耕地一町五反歩を害す、	牧田川沿い大墳村堤四ヶ所切入り、家屋三戸流失、耕地数町歩を害す。	地を害す。	牧田川沿大墳村堤一一間破堤入水、耕地損害多し。	大暴風雨、大牧村圦樋・高柳圦吹切、高柳新田堤五〇間破壊、岩道村常性寺庭まで入水	岩道村常性寺庭まで入水	津屋川筋徳田新田切込	牧田川州浚	牧田川筋多芸郡内にて三〇間破堤、耕地一町歩砂入	て破堤。	長州藩お手伝い普請(第2回目)	伊勢・美濃大地震、堤防の崩壊箇所多数	島田村・沢田村・根古地村堤修築	牧田川沿い大墳村堤一二間切入り耕地二反害す。	津屋川筋破堤、釜段新田入水。	牧田川筋多芸村破堤	り台所上二尺、島田村切入れ。	牧田川沿い五日市村破堤、大墳村一五間破堤耕地五戸歩砂入り、金草川沿い西岩道村切入			牧田川筋五日市村破堤	大跡・舟付・根古地新田堤修築(薩摩外六藩)	大跡新田堤破壞	津屋川沿い大跡新田破堤	島田堤修築(薩摩他五藩)

																			_
一八八六〇			八六〇			一八五七					一八五五		一八五二	八五一		八五〇	一八四九		
明 文治 久			万延								安政								
三元			元			四							H.	兀		Ξ			
九八.	-		から元	五	- · - :	ا ا		九・三〇			九 · 二 二	九 · 五	七二五五	八・一六		九・一三	- -		
畑川沿い田川沿い水	尺田村辺へる。て切入る。で切入る。で切入る。で切入る。で切入る。で切入る。で切入る。で切入る。で	岩道村常性寺本堂下陣にて五尺程、庫裡台所にて鴨居の上五寸程。この洪水を舟付切れという。牧田川筋舟付村堤、津屋川沿い鷲巣村堤切入る。多芸輪中入水	大暴風雨、木曽・長良・揖斐三川大洪水、被害甚大	津屋川沿い大跡新田、釜段、小坪新田、徳田新田など堤切入る。	牧田川沿い大墳村にて堤ニヶ所(一一間及び一二間)破堤し、耕地数町歩を害す。	津屋川沿い鷲巣村破堤	津屋川沿い駒野新田切込み、大場新田、釜段新田悪水堤破壊。	大風雨、牧田川筋沢田村東一四〇間、大畔四〇間、茶園原二六間、押越村北二三間切入る。	小畑川沿い飯積村二ヶ所六○間を破壊し、耕地二町歩余を害す。	直江村二ヶ所一一○間破壞耕地六○町歩を害す。	大暴風雨、牧田川出水、大墳村一八ヶ所切入り、耕地数町歩を害す。	牧田川筋沢田村東大畔、大墳村、飯積村堤切入る。	牧田川筋大墳村にて堤二ヶ所三八間切入れ、耕地を害す。	暴風雨・大洪水、島田村破堤耕地を害す。	津屋川沿い大跡新田破堤。	大暴風雨、大牧新田堤八四間破壊、流家三三戸、大牧村堤も破壊。	牧田川沿い大墳村堤一五間切入り、耕地を害す。	壊、耕地一町二反余を害	直工村是三ヶ所長さ一三○間破壊、耕地五○町歩余害す。

・津屋川・金草川・色目川も出水。  ・津屋川・金草川・色目川も出水。  -    -    -    -    -   -   -   -		八	一八八五
		八	一八八四
	八		
-   牧田川高畑・大墳村にて切入り、高畑村は全部流失、死者一名、大墳村一五戸流失	八・六		
	نا آ	— 五.	一八八二
堤破壊			
島田にて六ヶ所切入り、一戸流失、耕地二〇町歩砂入、金屋・安久・大墳・喜畑・直泊々			
・相川通りの堤破壊し	九 ·		
	九		
	五		
六   多芸村入水	五	四四	八八八一
二町一反一歩を害す。			
牧田川・小畑川等の川沿いの村々破堤三三ヶ所、延六四三間、田二三町八反二畝七歩   畑			
	九		
八 沢田村にて五〇間破堤。	九	九	一八七六
塘の切れたところ四四ヶ所、延九二二間、田地五町八反八畝余、畑地六畝二九歩を害す。			
711	八.一	八	一八七五
")。			
二 暴風雨。揖斐川・牧田川・小畑川出水。沢田村・橋爪村・飯積村にて破堤(耕地の被害を	0.		
牧田川筋牧田村にて七ヶ所三九五間、押越村にて八ヶ所  四〇間切入る    島田村堤破堤	0		
表出数田力で言じ	九		_

ェテル		三二五五五四(	一一九九 五四 〇九	
枕崎台風室戸台風(史上最大級の台風)	九・二 七	三 〇 九	九 九 三 四 五 四	
牧田川改修工事	ı	昭和八	一九三〇	
烈風雨、各河川出水、揖斐川大洪水	四 · 三	-0	一九二二	
台風、西濃豪雨、揖斐川氾濫		大正二		
西濃地方大雨	七·八	四五	九二二	
台風西濃被害大	八・一七	三八	一九〇五	
台風西濃地方被害甚大、河川氾濫	t: - 0	三七	九〇四	
三川分流工事竣功		三六	九〇三	
壊五八ヶ所				
多芸郡床上浸水九七九戸、流失六五戸、崩壊一五七一戸、耕地浸水三二一四町余、堤防決				
豪雨、西濃地方被害激甚、一一日また暴風雨があり一層災害を大きくした。	九 · 八			
防決壊九一ヶ所				
多芸郡の床上浸水八五四戸、家屋流失三戸、崩壊二六六戸、耕地浸水三二三三町九反、堤				
区域岐阜市をはじめ一市二五郡				
豪雨、木曽・長良・揖斐その他大小の河川 悉く漲濫、堤防至る所で決壊、浸水、 被害の	ان آ آ	<u>.</u> ال	一八九六	
暴風雨、入水戸数多芸郡一九一戸	八,	·	一八九三	
泥川、津屋川、杭瀬川、相川等堤防破壊	七・二三	 <u>Fi.</u>	一八九二	
牧田川出水飯積村へ切入る。	儿 · ·			
暴風雨、揖斐川平水位より二○尺高く、牧田川・相川・杭瀬川・大谷川も大洪水	じ・: 元		 一 八八八 八八八	
橋爪東南及び人墳にて破堤、宅地流亡、流家あり、大牧新田・大跡新田へも切入る。				
この洪水のため県下で切所六二三ヶ所、延二五、○六六間余決潰、死亡六人、家屋流失二				

一九七六一	一 九 七 二 二	一 九 六	一
五五一〇	四四七六		三二 三六
九七. 一一七	九 九 九 八 八 - 二 二 二 二 九 九 - 二 二 二 二 九 九 - 二 二 二 九 七 二 二 七 二 七 二 七 二 七 二 七 二 七 二 七	六 九 九 五 二 五 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七 七	八 九 七 六 二 二 二 二 二 二
杭瀬川の水位が八・八九メートルにあがり祖父江と段海との間の堤防が決潰寸前となり小揖斐川大出水、根古地堤決潰口で漏水   牧田川と杭瀬川との中堤が二ヶ所破堤	牧田川の水位一○・四○メートル、烏江で牧田川と杭瀬川との中堤破壊牧田川の水位九・五一メートル、烏江で牧田川と杭瀬川との中堤破壊右風一八号(第二室戸台風)県内全域、五市一○町一二村に被害	梅雨前線(三六・六梅雨前線豪雨)西南濃五市一二町に被害 梅雨前線(三六・六梅雨前線豪雨)西南濃五市一二町に被害 梅雨前線(三六・六梅雨前線豪雨)西南濃五市一二町に被害 梅雨前線(三六・六梅雨前線豪雨)西南濃五市一二町に被害 梅雨前線(三六・六梅雨前線豪雨)西南濃五市一二町に被害 一〇大六、床下浸水五七二五、水田流失一五台、大田流失二四台、水田冠が、地阜・三重惨害、惨禍の規模は史上最大級 「大田元五台、畑流失四三七台、畑冠水四一五五台、橋流失四三七台四、半壊一一〇一大、流失二四二、床上浸水三一七〇、床下浸水一三八九二、水田流失六一四台、水田冠水四九五五台、畑流失四三七台、畑冠水四一五五台、橋流失三台、大田流失四三七台、畑冠水四一五五台、橋流失五台、地岸県下では列書七名、貨像三一名、宮屋全場が、半場二七一流サニアを軽削する。「大田では大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大田では、大	な過れてはむ台になるは悪にした、 は、ではできたな、は悪にした、 は、では、ではできた。 は、では、ではできた。 は、では、ではできた。 は、では、ではできた。 は、では、ではできた。 は、では、ではできた。 は、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では

	牧田川大出水のため江の橋・根古地の中間で堤防約五〇〇メートルにわたって法崩れが起こり五七〇名程出動して決潰をまぬがれた。

### 用 語 解 説

## 貝塚が

### 断だれぞう

所を貝塚という。 原 始 人 が 食べて捨て 我が国では、 た貝殻が 縄文時代につくられ たくさんつ Ł つ た場

たものが多い。

け目。 地 球の外側を包んでい 両 側 のどちらかがずれ上り又はずれ下がっ る部 分 地 殻) にできたさ

1) さらには横にずれている。

扇状地 をよく透すため、 急に緩やかになるので、 て出来た地形である。 かな傾斜の扇状の地形のこと。 山 麓で川 が Ш 地 扇状 から平野に出る所に広が 地 扇状地は、 の頭の所 礫や土砂が谷の出 山地を出ると流水が 砂や礫が多く (扇頂) では川 つ に積 た緩 0 水 B

出すようになる。 13 水が多い はなく、 が、 扇状地 中央部は水が地中に入ってしまって表 Ш 0 末端では泉となってそれが湧き が山地を出る所を要として扇 0

自し 然堤で 防雪 形 のような平面になるので扇状地という。 自然のままの 川では洪水の時、 流水が川 0) 両 側に

何度もくり 流 いには が急に減っ れがおそくなる。 はっきりと自然の 返されると次第に川 て川 0 その 両 側に ため流水が土砂を運搬する 土砂 ) 堤防 が 0 になる。 両 堆積する。 側が高くなって それ

低湿

と後背

あ

ふれると急に水深が浅くなるため河心にくらべて

れ

を後背低湿地とよび、 二つの川の自然堤防の

中

ができる

500

畤

間 輪

前は沼や湿地であった。

天治はようがお

ている川のことである。 河 床の 面が周囲の平野面より高くな

ため、

堤防を築いて河道を固定してし

300

古墳

代

水害を防ぐ

進の大和 した和 か家

古

洪水のたびごとに河床は高くなり、 まったため、 13 河道の中だけにその Щ が運ぶ土砂が多いと狭 土砂 が \*堆積 洪 200 (2) 3

害となる。 水によって堤防が破れた時は大きな被

① 紀元後 100時

剁烫

焖剣

弥

縄文時代 0 紀元前七、 間をいい、 八千年から弥生時代まで 縄文式土器 0) ほか打製

紀元前

外生土器

原

水田耕作 小国の分立

代

弥生時代 頃 磨製の石器等を使用してい から三世紀頃までの 縄文時代に続く時代で紀元前三世 が期間 た時代。 で、 古墳時

紀

10,00

文

縄文土器

貝塚

石器

代へと続く。

古なな 待代 代という。 古墳が盛んに築かれた時代を古墳時 だい たいニ 世紀末頃から七

10000

先土器 群代

などにも利用されてきた所が多い 高さは一ばから数は位である。 自 一然堤防は、 周囲より高い 平野 0 0 で集落ができ、 中の微高地であ

n

は低く、 そ 畑 700 代 600 奈良時代 平安時代

— 161 —

代

生

世紀頃まで続

古墳

墳 る。

石紫鉄

豪族ら有力者の墓で、その形によって、 前方後円墳・ 前方後方墳・上円下方墳などがあ 円墳・方

条じょうり

だから長いものは六だな位のものもある。 縄 文・弥生時代に使用された石の鏃で、長さは

目のように直角に交わる道路や水路によって区切り、 一方を一条・二条・三条……と数え、 をいう。 大化の改新によって定められた土地の区切り方 縦横六町(一町は一〇九片) 間隔に碁盤の 他方を一里

六町四方の一区切りを里といった。 町間隔に三十六に区切られ、それぞれ一ノ坪・二ノ 二里・三里と呼び、この縦横六町間隔で区切られた 里は更に縦横

坪・三ノ坪というように三十六ノ坪まで番号がつけ ら れた (一坪は現在の約一・二鈴にあたる )。

そこに一時水を貯えたり、 河 Щ *О*) 部の幅を非常に広くしておいて洪水の 又は、 Ш 沿 いの低湿地 時

遊水池

防ぐ場所。 水を導き入れて一時貯えておき、 遊水池は平野部で河 Щ 堤防の破れるの 0 傾 斜 が急から緩

となる箇所に多くみられる。

干なって

Z (三角州) 田 「などにすること**。** 浅い遠浅海岸の干潟や浅い 河 川が湖や海に流れ込む所へ運んで来た 湖や沼の水をなくして

きが多かった。

デル

土砂が沈み積もってできた地形をいう。

お経を経筒の中へ入れ地中に埋めたところ。 水害に備えて、 家財道具を二階等高い所へ上げる

こと。

評定新 定場 立法審議の最高機関。 奉行の三奉行で運営されていた。訴訟裁決および 江戸時代の最高裁判所で寺社奉行・ 重要事項および所管が二奉行 町⇟ 奉行 勘だ

老うじゅう 以上にまたがる事件などを扱った。 江戸幕府の最高の職で、幕政を総理し、

名か五名で月番交替で勤務した。

の事をあつかい、

遠国の役人を監督した。

定員は四

朝廷・大名

大器 めつけ 江戸幕府の職名。 老中の配下にあって諸務を監督

寺 ピート 音 社 奉 ぞ きょう べていた。 江戸幕府の三奉行の第一で、 江戸幕府の職名で旗本などを監督した。 諸大名の 行動を監察し、 役人の勤めぶりをしら 寺社・ 神職 僧侶

0

奉行 管理・ 五名。 した。 察等をつかさどり、 江戸幕府 三奉行の一つ。 訴訟などに関する事をつかさどった。 0) 職名。 特に町政を管轄し、 老中の支配下で行 定員一~三名だが、 政 訴訟を裁判 二名の 司 法 定員四

町ま

-- 162 ---

勘な 定 奉行 0) 行 江戸幕府 収 政 税 訴訟をつかさどる。 金銭 0) 職名。 の出納など幕府の財政及び領内農民 幕府直轄地の代官・郡代を監 三奉行の一 つ。 定員四

砂<sup>\*</sup> 落 ネ 堀 り と

名

た池を土で埋めることができず、 ました。これを落堀 に大きな深い か っ 洪 た時代は人力による復旧にたよったので、 水があっ て、 池ができます。 堤防 (押掘)といいます。 が切れると、 土木事業に機 そのまま池が残り 切れ た堤防 械 力 でき 0) 0) 跡

このようになることを「砂入り」という地名 離 のえぐられた土のうち、 んありましたが、 金草川、 ては利用しにくく、 れた濁流の進 従って、大きな河川 にもなっています。 ほとんどなくなりました。 杭瀬川等 行方向に堆積します。 近年 の川沿いには 畑 . の 0 揖斐川、 や宅地に利用されました。 粗い砂や礫は落堀より 耕地整理、 落堀ができた時 この落堀がたくさ 牧田 土地改良によっ そこは水田と 川 津 屋 (小字 Ш 7

押越の南を東に向って流れ、藤井ハウス産業㈱の西、赤除 深く、大きい谷の勢至谷の出水は、飯ノ木の北、

P

北

で金草川に合流

してい

ます。

落ま 江ぇ 番ばんすい

灌漑用水が乏しい

v 時、

用水の使用に順番を決

に流入します。飯ノ木輪中にさまたげられた水は、しかし、大出水の時は、除を溢れて、南東の低地

ると、 大跡 接の出水で遊水地となって、 除から南への溢水を除ぎ、 受けました。 落江を経て、下池へ落ち、 よう必死になって水防作業をしました。 にさまたげられた水は、 この水系の中で、 の北をかすめて、 地域総動員で、 そこで、 大きな排水路のない中島 アホ除の南に土嚢を積んで、 遠く離 中島に入り、 更に、 洪水が金草川 更に津屋川に注ぎます。 農作物に大きな水害 れた中島は 南に走り、 また、 笠郷 落水する 出水があ 十三ヶ村 は 直

郷倉(水防倉庫

水防倉庫) して、 平常時 破堤の危険が迫ると、 非常時に役立てました。 から、 河水が増水し、 杭 縄 槌 水防道具が必要であるので 刻々、 針 金 水位が高まっ スコップ等を保管 たり、

が入っている倉庫なので水防倉庫といいます。防上に、一定の距離をへだてて建てられています。 古は、年貢米の保管や、大水の時村を守る水防道 これは、河水沿いの、堤防が切れやすい場所や堤

その順に使用することをいう。

に排水できる所まで導い 長い水路を築いて水を低所の方に落とし、 中をとりまく川 の方 た。 が 輪中 この 内 水路を落江という。 0 土 地 より 高 自 0

井 論 用 水の 利 用等につい ての 争

懸廻 堤 精平野 河 川 0) 堆積作用により生じた平野。

輪中を完全に囲繞する連続堤で、 部 分堤、 築捨堤

対 して称せられる。

頭が 百% 姓岩 中 世 の土豪が兵農分離によって農民とな つ た

Ł

0)

草 分百姓などが頭百姓として村内で一 近世 初期には開発に貢献して検地高請をした 般百姓と隔絶

た特権を有した。

村役人 屋ゃ 幕 名: 主。 領主 によっ 年により て定められ 組 頭) 及 び百姓代 た村の 自 治 か ?ら成 組 織 ŋ, 庄岩 村

方三役と言 われた。

内済証· 文 訴訟にもちこまず 談 合 和解 その 内容を証 文

に残したもの。

高か

収 穫、 知行などの )数量。 土 地 えを所有! 年貢負担義

務 0  $\oplus$ ある農家を高持百姓 畑 に生育 中 0 農作物。 لح 61 0

川 0 堤 防

Ш 0 水を止 め る堤 防。 ダ 4

根# 蒔紫石紫洗紫堰紫堤深立紫杭公石岩堤沿堰紫堰紫

石積 堰 を石 堤 畳として水越場にする、 防のことで水勢の強い 水量 調 節 0) 設 備

庭 0 飛 石のように必要に応じ要所要所に置く ところにつく 石。

に土中深く打つ杭。 地  $\mathcal{O}$ 境 洯 線に深 打 つ杭。

土

Ш

0

護岸工

事に川

霞かずみてい

堤

が河

川に沿って連続堤でなく切れ切

'n

に

な

馬は 踏る

堤

防

0)

頂上

0

平

担

面

のこと。

馬

が

通

れ

る

0)

は

馬 踏 と称

堤防 堤 があの 0 天端に土 頂上のこと。 砂礫を置 馬踏

外炎上於天炎 腹端置端端端 付品 Щ の表して

0)

0

ŋ

r.V

て堤

防を高くすること。

のことを今は天端と

に土を置き堤防

を補強する

内腹けばらつけ ر ک Щ 0) 裏; 外川 内川 側の 側の

河幅 が広く、 流路 が 乱 れてい

0)

0

ŋ

に土を置き堤防

を

補

強

す

横堤に

12 0) 耕地 ため に横堤 0 多い場合は、 が 設 け Ġ この横堤構築によっ れる場合がある。 · る河 川 では本堤保 また堤外 て水勢を 地 護

弱めて耕 本 ・堤または台 地の 地 保護を目的とする場合もあ から 河 身に向 ってほぼ 直 角に る。 !築か 横堤 n は

中 'n 低位 さらに、 部に悪水 0 0) (不要の 輪 一中の 水 中 の高位部 が 流入しない か 5 ように そ 0 輪

Ł ある。

低

ŀЭ

土手を築く場合に、

その土手を横堤とよぶ場

猿き

尾堤堤

て設けた堤 水 勢緩 和と河身 で、 猿 整正 0 尾 0 0) ため、 ような形をして 河 岸 か 6 いる 河 心に 0) でこ 向 け

名がある。

水が

制さ

水勢緩和 河身整正 0 ため河岸 か ら 流 水中に 突出

せて設け る工作が 物。 みず は ね

- 164 -

内に水が入り水位を低下させる。 って、そのある部分は重って二重堤また三重堤をな 洪 水の 時 は、 その切れ切れのところから堤 霞堤は扇状地など

河 川が急傾斜で流下するところに築かれてきた。

樋い暗れまり

下を通す水路

用 水の取入れや悪水排除のため堤防を横断 して作

ている排水樋門もあるが、 扉が自動的に閉じて輪中内へ入水しない装置になっ られた水路の門に扉があるもの。 用水の場合は必要に応じ 外水が高くなると

扉をあけて水を取り入れる。

逆 水樋門 抜り灯地帯では ので逆水樋門の整備が必要になってくる。 右と同じで外水が侵入しないために作られ 海抜りに地帯では潮の満ち引きの影響を受ける 水田用水に逆潮を利用するので、 又この海 たも 排

水と用水を兼ねた水門の 設備が必要である。

開こうもん

船を閘室に入れた後、 後に開閉できる扉を有し、 な水面に昇降できる装置で、 するための水量調節用 運 河 放水路などにおいて、 の堰。 扉を閉じ、 一方を開いて、 船を閘室に入れその前 船舶を高低の差の大き 水面を一定の高さに 水位を同じにして 水と共に

仝

後合掌木

渦 Η 軸

軸流ポンプ

渦巻ポンプ 斜流ポンプ

Q 高さ 水量

原動機

HP (HP) PS Е エンジン 馬力

M

ター

t/s 秒 間 0 水量

kW キロ 直径 ワッ 1

棟っ木 大聖 牛

ポンプ 径

径 単 位はミリメート ル

方へ運行させる装置

二前宣木

養老町 南濃町 海津町-木曽三 養老町史 養老郡志 輪之内町 大垣輪中調 西 岐阜県治水史(昭和28年) 河 ひらけゆく郷土 のびゆく養老町 牧 木 木 「南濃地 田田 ·曽川 ·曾川 Ш Ŧ. 六法 川 改修計 应 の文化財 史 史 丌 上 上流改修工事誌 史 域の 流 の治水を語る 参 昭昭 昭昭 昭昭 (大正14年 昭昭 昭 查報告書 五〇年の歩み 1和53年) 和53年) 考 1和57年 和45年 画 土地改良の概要と沿革 建設省中部地 建設省中部地方建設局木曽川 建設省中部 50 • 和56年) 説明 (昭和59年) 文 昭 和29年 51 号 書 滷 昭 昭昭 和 地 和 44 岐 63 方建設局木曽川 方建設局木曽川 阜県地 年) 年) 養老郡郷土史編纂委員会 方改良協会養老郡支会 養老町文化財保護協会 大垣土地改良事業所 養老町教育委員会 大垣市教育委員会 上流工 Ŀ Ŀ 流工事 流 工. 事事務所 事 輪 ☆内町 事務所 岐阜県 事務所 建設 養老町 南濃町 海津町 岐 [阜県 省 輪中 輪中 木曽三川低地部 木曽三川~ 輪 明治期における輪中 宝暦治水と薩摩義士 更新世末期以 濃州徇行記 中 その相剋の歴史 地学雑誌 地理学評 濃尾平野の 木曽三川を分流した男 その形成と推移 その展開と構造 洪水と人間 その流域と河川 論 (昭和 九 地形発達過程 降におけ 七一二(昭 五二 (輪中 12 (昭 (1)年) 地 (2)昭 和 几 る 昭昭 昭 域 和 54年) 学生社 大衆書房 昭昭 (平成元年) 和 63 和 61 技 和 昭 63年) 和 61 術 0 50年) 年) 和 年 人々 54 郷土出版社 年 大明堂 62 年) の生活 古今書院 安藤萬 安藤萬 安藤萬 安藤萬寿男 安藤萬寿男 伊 中 矢崎正 藤安男外 海 日新聞 伊藤信 津 寿男 寿男 寿男 正

デレ

ケの生涯

倫

社

歴史は、時を経るにつれて、わたしたちの記憶のかなたに薄れていくものです。

私たちの養老町の祖先たちが、何千年の遠い昔から、各世代を引き継いで、今日の繁栄を

築き上げてくださった、その苦闘の歴史を認識し、今一度感謝の念を深め、さらに後世に伝

えるためこの読本を編集・作成いたしましたが、まだまだ調査・研究不足の点も多く、 読者

の方には満足いく読本にはできなかったのではないかと思います。

を一層深く見直す機会としていただければ幸いと存じます。

「災害は忘れたころにやってくる。」と申します。この読本をお読みになって、

郷土の治水

なお、誠に勝手ながら、本文中の資料・参考文献等の所有者・著者名については、すべて

敬称を省略させていただきました。

養老町教育委員会

監修

安藤萬寿男

編集 (順不同)

田 中 育 次 種

田

丹治 彦

安福彦七

藤  $\mathbb{H}$ 信 誠 水 谷 達

平成三年三月発行

郷土の治水 -養老町-

電話 (0五八四) 三一 100

発行 養老町教育委員会

電話 (0至八四) 八一九二一 田中印刷興業株式会社

印刷